

授 業 科 目 の 概 要			
(学校教育研究科 教育実践高度化専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目 教育課程の編成及び実施に関する科目	子どもの発達と学校のカリキュラム	乳幼児期から青年期に至る子どもの連続的な発達の過程と特徴を理解し、子どもの発達と個人特性に応じたカリキュラムの編成を実現する際の諸問題を考える。 （オムニバス方式／全15回） （37 内藤 美加／8回） 第1回～第8回を担当する。乳幼児期から児童期までの子どもの認識活動を中心とする能力の発達と学習の仕組みを理解する。 （66 角谷 詩織／7回） 第9回～第15回を担当する。幼児期から青年期までの子どもの学習の特徴と子ども個人に適合する教育環境やカリキュラムを考える。	オムニバス方式 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	社会に開かれた教育課程のマネジメント	学習指導要領改訂の動向を踏まえて、今後の学校に求められる教育課程の在り方とその編成に関する基礎的な知識を習得し、個々の学校を取り巻く環境や組織の課題状況に応じた具体的なカリキュラム・マネジメントを推進するための実践的思考力、判断力を獲得する。 （オムニバス方式／全15回） （108 菅原 至／2回）（3 安藤 知子／2回） 第1回及び第15回を担当し、第1回ではカリキュラムと教育課程について授業を行う。第15回ではカリキュラム・マネジメントを促進する学校組織について授業を行う。 （108 菅原 至／7回） 第2回～第8回を担当し、学習指導要領と教育課程の関係を確認したうえで、「社会に開かれた教育課程」について具体的理解を深める。先進的なカリキュラム開発事例の検討を通してこれからの学校に期待されるカリキュラムの在り方を自分なりに構想する力を養成する。 （3 安藤 知子／6回） 第9回～第14回を担当し、組織経営論の視点からカリキュラム・マネジメントの学校組織単位での共有を促進する方途について検討する。	オムニバス方式・共同（一部） 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	教育課程の編成・実施の実践と課題	教育課程の編成・実施の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、グループ別討議とグループ発表を繰り返す。このことによって、基礎的事項の定着をはかるとともに、それに対する問の質を高める。教科横断した全校体制で改善するカリキュラム・マネジメントを軸にして、以下の項目を改善する意義と具体的な編成方法を学ばせる。その際にICT活用の方法を含ませる。さらに上記を通して問題意識と視点を形成し、実際の授業の観察、ビデオ・IC記録の分析、授業者との議論を行い、理論と実践の往還を行う。 ・学習指導要領と教育課程の編成実施 ・個に応じた指導を充実させる教育課程 ・指導と評価の一体化、教育課程の自己点検・自己評価	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	Society5.0における教育課程の編成と実践	Society5.0において、AIやICT機器等の先端技術を取り入れた学校や授業のあり方、公正に個別最適化された学びを実現するための教育課程を編成する実践力、さらにその効果の検証方法に関する実践力を育成することを目標とする。内容は、Society5.0の社会像や求められる教育課程のあり方について学ぶ。また、AIやICT機器等の先端技術を活用した授業を紹介し、実践方法についても体験的に学ぶ。なお、一部内容は少人数による教育を行うため、同内容の授業を複数回実施することがある。 （オムニバス方式／全15回） （113 榊原 範久／4回） Society5.0の教育課程におけるAI活用の可能性、ICTを活用したディベート演習、Society5.0における教育課程のあり方について授業を行う。 （119 水落 芳明／1回） Society5.0における教育課程と目指す人材育成の方針について授業を行う。 （107 清水 雅之／1回） Society5.0におけるメディア・リテラシーについて授業を行う。 （104 桐生 徹／2回） Society5.0における授業デザイン、プログラミング教育実践演習について授業を行う。 （101 赤坂 真二／2回） Society5.0におけるSTEAM教育の理論と実践、オンライン学級づくり演習について授業を行う。 （112 大島 崇行／3回） 先端技術を取り入れた教育実践事例の参観、ICTを活用した授業分析検討会演習、Society5.0における授業デザイン発表会について授業を行う。 （102 阿部 隆幸／1回） オンラインアクティブラーニングについて演習を行う。 （109 中野 博幸／1回） エビデンスに基づいた教育評価について演習を行う。	オムニバス方式 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間

<p>教科の本質を踏まえたカリキュラムデザインの理論と実践</p>	<p>教科の本質を踏まえたカリキュラムをデザインするために必要な各教科教育学に固有の内容知・方法知を広げるとともに、各教科に固有の教師の専門性を高め、教師としてのアイデンティティをより確かなものとするを旨とする。</p> <p>「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、受講者間の交流や協働を促すとともに、発表や質疑等を中心とするアクティブ・ラーニング型の授業を展開する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (120 渡部 洋一郎/1回) 国語科における教材の読解と方法について授業を行う。 (50 迎 勝彦/1回) 国語科における過程志向的授業デザインについて授業を行う。 (9 岩崎 浩/1回) 算数・数学科に固有の見方・考え方について授業を行う。 (89 山田 貴之/1回) 理科の見方・考え方を働かせて自然現象を捉えさせる単元構成と授業づくりのあり方について授業を行う。 (27 志村 喬/1回) 社会科・地理歴史科・公民科教育固有の見方・考え方とは何かについて授業を行う。 (8 茨木 智志/1回) 社会科・地理歴史科・公民科教育固有の見方・考え方を實現するカリキュラムデザインについて授業を行う。 (75 中平 一義/1回) 社会科・地理歴史科・公民科教育固有の見方・考え方を踏まえた指導と評価について授業を行う。 (120 渡部 洋一郎/8回) (50 迎 勝彦/8回) (9 岩崎 浩/8回) (89 山田 貴之/8回) (27 志村 喬/8回) (8 茨木 智志/8回) (75 中平 一義/8回) 全担当教員によってグループ別授業(グループ別討議)、全体授業(グループ発表、まとめ)を実施する。</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部)</p> <p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>SDGs時代の教育課程の編成・実施の実際</p>	<p>教育課程の編成・実施の実際と課題に関して、以下の内容を中心に、各教員の研究成果と専門性に基つた実践的内容の講義を行うとともに、「グループワーク」や「フィールドワーク(実践校の訪問調査等)」「レポート発表」などの多様な学習形態を組み込んだ授業の展開を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領と教育課程の編成実施 ・SDGs時代と学習指導要領の関係 ・SDGs時代と教育課程の編成実施 ・教科横断的・総合的な学習と総合的な学習の時間の全体計画 ・カリキュラム・マネジメントの実際 	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教育課程の編成・実施とカリキュラム・マネジメント</p>	<p>実践事例をもとに、教育課程の意味や編成方法、カリキュラム・マネジメントの意義や方法について理解し、学校の教育目標に結び付けるための総合的な学習の時間のカリキュラムづくりを通して、目標・内容・方法上のつながりや教科横断的な視点の重要性、教育課程全体との往還について考えることを目標とする。</p> <p>実践事例をもとに、教育課程の意味や編成・実施の方法、カリキュラム・マネジメントの考え方や方法について理解し、教育課程やカリキュラム・マネジメントの課題と改善策について検討する。その後、求められる「社会に開かれた教育課程」実現の一つの方策として、総合的な学習の時間に着目し、学校の教育目標を想定したカリキュラムの作成を行う。最後は、総合的な学習の時間を生かしたカリキュラム・マネジメントの在り方について検討し、教師に必要とされるカリキュラム・マネジメント力について考える。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教科等の実践的な指導方法に関する科目</p> <p>教科等の実践的な指導方法の実際と課題</p>	<p>教科等の実践的な指導方法の実際と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、グループ別討議とグループ発表を繰り返す。このことによって、基礎的事項の定着をはかるとともに、それに対する視点の質を高める。その視点で授業を分析する。さらに上記を通して問題意識と視点を形成し、実際の授業の観察、ビデオ・IC記録の分析、授業者との議論を行い、理論と実践の往還を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科等の意義・目的 ・授業計画 ・教材研究 ・指導方法 ・指導と評価 	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教科教育実践における理論と実践の往還</p>	<p>教科教育実践において、先行研究の成果に基づいて「主体的・対話的で深い学び」を保証する授業を実践し、その効果を検証できる教師の育成を授業のテーマ及び到達目標とする。</p> <p>教科教育実践において「主体的・対話的で深い学び」を實現するために、先行研究の調査や意義・目的、指導方法の効果検証、指導と評価の一体化について学び、模擬授業の実施等を通じて、学習のデザインから検証といった「理論と実践の往還」プロセスを体験的に学ぶ。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>

<p>主体的・対話的で深い学びを実現する授業デザイン</p>	<p>各教科等の見方・考え方や道德教育の視点から主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業デザインの作成方法、教材開発、子どもの学習方法等について先行研究をもとに理解し、授業デザインの作成やテーマごとの探究活動、プレゼンテーションを通じて実践的に探究する。 (オムニバス方式/全15回) (113 榑原 範久/4回) 第1回～3回は、各教科等の見方・考え方の視点から学習指導要領や先行研究を基に主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業デザインの概要について理解する授業を行う。第4回は、ICTを活用して、学習者が主体の授業デザインについて考察する授業を行う。 (102 阿部 隆幸/1回) 主体的な対話活動を通して、キャリア形成に向けて良好な関係性を構築している、子どもたちが主体となる授業デザインについて考え合う授業を行う。 (106 佐藤 多佳子/1回) 「深い学び」のための教科の本質に根ざした問いづくりについて、その理論と学習デザインをもとに主体的な子どもの姿について考察する授業を行う。 (104 桐生 徹/1回) 教科の見方・考え方の理解を促しながら、子どもが主体的になる活動の体験を通して、学習者が主体となる授業デザインについて考え合う授業を行う。 (110 早川 裕隆/1回) 実感的な理解をもたらすロール・プレイング(役割演技)の指導方法を理解し、主体的な学習構造の変容をもたらす授業デザインを探究する授業を行う。 (113 榑原 範久/7回) (102 阿部 隆幸/7回) (106 佐藤 多佳子/7回) (104 桐生 徹/7回) (110 早川 裕隆/7回) 第9回～14回では、これまでの講義を発展させ、グループ探究活動を行い、プレゼンテーションを行う。第15回で講義を総括して討論を行い、まとめのレポートを作成する。</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部) 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教科等の実践的な指導方法に関する事例研究</p>	<p>教科等の実践的な指導方法に関する現代的な教育課題とその課題に直結する教育理論と実践的なアプローチを網羅的に学ぶ。 (オムニバス方式/全30回) (112 大島 崇行/12回) (103 片桐 史裕/12回) (61 河野 麻沙美/12回) (104 桐生 徹/12回) (113 榑原 範久/12回) (106 佐藤 多佳子/12回) 第1回～第3回では、本科目の目的と概要を「教科指導」、「アクティブ・ラーニング及びカリキュラム・マネジメント」の視点から説明する。第22回～第30回では、グループ発表、レポート作成、総括に関する授業を行う。 (112 大島 崇行/3回) 協同的な学習の理論と設計、協同的な学習を経営する教師のあり方について授業を行う。第16回では、協同的な学習の設計と教師のあり方に関するグループ別討議を行う。 (103 片桐 史裕/3回) 教科の見方・考え方を育む授業、言語活動の教育的効果について授業を行う。また、教科の見方・考え方を育む授業デザインに関するグループ別討議を行う。 (61 河野 麻沙美/3回) 学習指導要領における位置、学習科学からの示唆について授業を行う。また、人の学びを科学する授業研究の視点に関するグループ別討議を行う。 (104 桐生 徹/3回) Society5.0をめざした授業、Society5.0での授業研究の方向性について授業を行う。また、Society5.0と学習者のICT環境に関するグループ別討議を行う。 (113 榑原 範久/3回) 批判的思考を育成する思考ツールの活用と実践、社会科における地域素材を教材化したカリキュラム・マネジメントについて授業を行う。また、批判的思考を育成する授業デザインに関するグループ別討議を行う。 (106 佐藤 多佳子/3回) 論理的思考と言語活動、言語力・リテラシーのための学習デザインについて授業を行う。また、言語活動における「問い」の有効性の検証に関するグループ別討議を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部) 講義 28時間 演習 32時間</p>
<p>言語力・リテラシーの学習デザイン</p>	<p>言語にかかわる資質・能力の育成にかかわって、現在の教育課題とその課題に直結する理論をもとに、言語活動を中核とした学習デザインの方法、授業の方法、授業の質的分析の方法の具体について考察し、学習デザイン・カリキュラムデザインの実践的力量を養う。 言語にかかわる資質・能力の育成をめざして、①資質・能力と言語活動の関係、②カリキュラムデザインの考え方と目標、③授業の方法(対話型学習)、④学習者研究の在り方、⑤学習者の評価とカリキュラムへのフィードバックの在り方などについて、具体的な教材や授業実践を資料として検討する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>アクティブラーニングと授業研究</p>	<p>学習者の主体的・能動的の態度に基づく教育と学びの方法としての「アクティブラーニング」に関する理論、方法論、及び実践上の課題について学び、ICT等の教育情報機器の活用を含めて、アクティブラーニングの手法を効果的に取り入れた授業デザインができるようになることが目標である。 「アクティブラーニング」の理論的背景と方法論について学ぶ。また、アクティブラーニングの複数の手法を取り入れて学修を進める。これらの学修成果を基に、授業のデザインと実践研究の方法論について学ぶ。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>

ICTを活用した教育・情報教育デザイン	<p>急速な情報化の進展に伴う、学校教育における情報活用能力の育成やICT活用などの教育の情報化に対応できる教師の力量形成をめざし、ICTツールに関する知識、ICT活用スキル、ICTの教育利用、情報教育の実践力を高めるための基礎を学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (7 井上 久祥/2回) (58 石川 真/2回) (67 高野 浩志/2回)</p> <p>第1回の授業では、本授業に関する導入を行い、第15回の授業では本授業に関する省察とまとめを行う。 (7 井上 久祥/5回)</p> <p>ICTを活用した教育・情報教育に関する、社会的、制度的な事柄、学校での経営的な事柄について授業を行う。 (58 石川 真/4回)</p> <p>ICTを活用した教育・情報教育に関する、教育課程の意義及び編成の方法、教科の指導方法について授業を行う。 (67 高野 浩志/4回)</p> <p>ICTを活用した教育・情報教育に関する、教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を中心）について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 14時間 演習 16時間</p>
Life, STEAM, Education	<p>STEAM教育の学びと実践を通して、持続可能な開発目標（SDGs）の実現、新しい時代「Society 5.0」における学校教育、生活の質の向上といった課題への興味・関心・理解を深める。STEAM教育の学びを介して、次世代における真の意味でのより良い生活の実現を模索・探求することを目標とする。</p> <p>STEAM教育の学びの概念を理解し、SDGsの実現をはじめとする現代課題・地域課題の解決における意義・役割について認識する。小・中・高等学校家庭科の教科内容を反映させたSTEAM教材を作成し、現代課題・地域課題の解決学習における学習効果や問題点について議論するとともに、実践に移すための具体的な方策についても検討する。一連の分析を通して、小・中・高を一貫した家庭科教育カリキュラムにおけるイノベーションを勘案し、新しい時代の教育を支える新たな学びを創出するとともに、より良い生活の実現についての検討を行う。 (25 佐藤 ゆかり)</p> <p>主担当として、Educationの視点から理論と実践に関する講義及び教材作成の支援を行う。また、受講生の議論の実務的なファシリテーターとして総括する。 (49 光永 伸一郎)</p> <p>副担当として、主にSTEAMの視点から理論的な講義及び教材作成の支援を行う。また、受講生の議論のファシリテーターとして支援する。 (90 吉澤 千夏)</p> <p>副担当として、主にLifeの視点から理論的な講義及び教材作成の支援を行う。また、受講生の議論のファシリテーターとして支援する。</p>	<p>共同</p> <p>講義 14時間 演習 16時間</p>
教科等の横断と実践開発	<p>これからの教育活動を計画的に行っていくために、各学校では、教育課程編成において、教科等横断的な視点から教育活動の改善を行っていくことが求められている。この際、「社会に開かれた教育課程」を実現するために、総合的な学習の時間、生活科を中核とし、内容面、資質・能力面等からの合科的・関連的な指導の工夫が必要となる。この授業では、上記のような課題に対する知見を深める。 (オムニバス方式/全15回) (48 松本 健義/2回)</p> <p>子どもの行為による学びの成り立ち、相互作用・相互行為による意味生成としての学びについて授業を行う。 (111 松井 千鶴子/1回)</p> <p>総合を中核としたカリキュラムマネジメントと教科等の接続について授業を行う。 (105 古閑 晶子/2回)</p> <p>判断の拠り所となる見方・考え方を創出する学びのプロセス、対話的学びを核とする探究型国語学習のデザインについて授業を行う。 (68 竹野 欽昭/2回)</p> <p>身体運動を活用した教科横断的な教材の開発と実践について授業を行う。 (86 松浦 亮太/2回)</p> <p>身体運動を題材とした教育、科学するマインドを育てる実践について授業を行う。 (109 中野 博幸/1回)</p> <p>統計的リテラシー育成を目指した授業実践について授業を行う。 (115 渡辺 啓子/1回)</p> <p>自然事象への関心・意欲・態度を育てるということについて授業を行う。 (23 小高 さほみ/1回)</p> <p>人生・暮らしを考えるカリキュラム・デザインについて授業を行う。 (19 釜田 聡/1回)</p> <p>地域で進められる新しいカリキュラムの創造について授業を行う。 (33 土田 了輔/2回)</p> <p>球技学習における深い学びと探求型学習、内容と方法からの体育的合理的配慮・授業まとめについて授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>

<p>探究型教科学習と授業デザイン</p>	<p>言語、生物、身体や運動、音楽や造形が関係する教科を具体例として、学習者が探究的に学習するプロセスと、それを実現する学習材や学習環境及び授業デザインについて考えていく。探究や協働・対話を通して、教科の知や考え方を創出する学習の在り方や学習材及び授業デザインに資する諸研究に触れたり、授業のビデオやICTを用いた事例演習や教材演習に参加したりすることで、教科と学習者の視点をもちながら探究的な授業をデザインするための基礎の獲得を目指すものとする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (105 古閑 晶子／2回) (48 松本 健義／2回)</p> <p>教科と学習者の視点で捉える探究型の学習と授業デザイン、探究型教科学習が成り立つ要件と授業デザインについて授業を行う。</p> <p>(105 古閑 晶子／5回)</p> <p>探究型を志向する国語の学習と授業デザイン、探究契機となる言葉に拠る見方・考え方のズレ、言葉に拠る見方・考え方のズレと問いの生成、対話的学びと新たな知の創出、探究型国語学習の特性と授業デザインに資する要件について授業を行う。</p> <p>(38 中村 雅彦／1回)</p> <p>探究型を志向する理科の学習と授業デザインについて授業を行う。</p> <p>(33 土田 了輔／1回)</p> <p>“正しさ”にとられない体育におけるボール運動の探究型授業デザインについて授業を行う。</p> <p>(68 竹野 欽昭／1回)</p> <p>科学論文の視点で捉える探究の形と授業デザインについて授業を行う。</p> <p>(2 阿部 亮太郎／1回) (10 上野 正人／1回) (71 玉村 恭／1回)</p> <p>(78 長谷川 正規／1回)</p> <p>探究型を志向する音楽の学習と授業デザインについて授業を行う。</p> <p>(48 松本 健義／4回)</p> <p>造形表現学習過程における探究・協働と対話、図画工作における探究活動・探究型学習デザインについて授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>主体的な子どもを育む授業づくりの理論と実際</p>	<p>教職の意義や教員の役割、職務内容、今日的な教育課題等を踏まえた上で、学校現場での授業観察を通して主体的な子どもを育むために、教員には何が求められているのかを考察する。それらを踏まえて、指導案作成、模擬授業、分析、考察といったグループ別演習を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (107 清水 雅之／8回)</p> <p>本授業の概要、主体的な子どもを育むための教育観・授業観、附属小学校での授業観察、観察授業の指導案復元について授業を行う。</p> <p>(115 渡辺 径子／2回)</p> <p>授業における子どもの見とり、授業観察・分析方法について、授業づくりのポイントについて授業を行う。</p> <p>(107 清水 雅之／1回) (109 中野 博幸／1回)</p> <p>復元指導案の発表と討議について授業を行う。</p> <p>(109 中野 博幸／3回) (107 清水 雅之／3回) (115 渡辺 径子／3回)</p> <p>第11回までを踏まえた活動として、グループ別による授業構想、指導案作成、授業プランの発表と討議について授業を行う。</p> <p>(109 中野 博幸／1回)</p> <p>第14回までの授業を踏まえた総括について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>
<p>生徒指導及び教育相談に関する科目</p> <p>子ども理解、生徒指導、教育相談の実践と課題</p>	<p>子ども理解、生徒指導、教育相談の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、グループ別討議とグループ発表を繰り返す。このことによって、基礎的事項の定着をはかるとともに、それに対する視点の質を高める。その視点で授業を分析する。さらに上記を通して問題意識と視点を形成し、実際の授業の観察、ビデオ・IC記録の分析、授業者との議論を行い、理論と実践の往還を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解の内容と方法 ・子どもの社会的・情緒的発達を促し、子どもの健全育成できる、教員と子ども、子ども相互の人間関係 ・問題行動等に関する、学校、家庭、地域や関係機関との連携 ・子どもの進路発達を促す指導援助体制とガイダンスの機能と教育相談の充実 	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>生徒指導の理論と実践</p>	<p>『育てる生徒指導』の実践ができる教師の育成を目指し、道徳、進路指導、生徒指導、教育相談等の実践と課題について、心理学や教育学等の理論をベースとする探究的な活動を通して、実践的な指導力を身につけることを目標とし、「ケーススタディ」、「グループワーク」、「プレゼンテーション」といった活動を通じて協働的な学びを展開し、理論と実践の往還を図る。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (54 山田 智之／9回) (6 稲垣 忠顕／9回) (31 高橋 知己／9回) (116 寺戸 武志／9回) (101 赤坂 真二／9回) (110 早川 裕隆／9回)</p> <p>第1回は本授業の概要について授業を行い、第8回～第15回は、道徳、進路指導、生徒指導、教育相談等の課題についてのグループ別探究を行い、そのプレゼンテーション及び振り返りに関する授業を担当する。</p> <p>(116 寺戸 武志／1回)</p> <p>第2回を担当し、生徒指導の意義に関する授業を行う。</p> <p>(101 赤坂 真二／1回)</p> <p>第3回を担当し、生徒理解の内容と方法に関する具体的事例を取り扱い授業を行う。</p> <p>(31 高橋 知己／1回)</p> <p>第4回を担当し、「いじめ問題」への対応に関する具体的事例を取り扱い授業を行う。</p> <p>(54 山田 智之／1回)</p> <p>第5回を担当し、生徒指導とキャリア教育に関する概念と関係性について授業を行う。</p> <p>(6 稲垣 忠顕／1回)</p> <p>第6回を担当し、生徒指導と学校教育相談に関して、不登校問題とチーム連携を中心に授業を行う。</p> <p>(110 早川 裕隆／1回)</p> <p>第7回を担当し、関係機関との連携のあり方と開発的な生徒指導について、道徳教育の視点を取り入れながら授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>

<p>特別な教育的ニーズのある子どもに対する指導の理論と実践A-特別支援学校及び特別支援学級を中心にー</p>	<p>特別支援学校及び特別支援学級における特別支援教育の理論と実践に関する基礎的・発展的な知識を習得することをテーマとする。具体的には、特別な教育的ニーズのある子ども、主に特別支援学校及び特別支援学級に在籍する視覚/聴覚/知的/肢体不自由/病弱等の障害のある子どもの特性に基づいた支援の在り方を理解することを到達目標とする。 (オムニバス方式/全15回) (20 河合 康/3回) 障害及び特別な教育的ニーズのある子どもに対する教育の歴史、特別支援教育とインクルーシブ教育、特別支援学校及び特別支援学級における特別支援教育について授業を行う。 (63 佐藤 将朗/3回) 視覚障害のある子どもの理解と支援、重複障害のある子どもの理解と支援について授業を行う。 (95 坂口 嘉菜/2回) 聴覚障害のある子どもの理解と支援について授業を行う。 (51 村中 智彦/3回) 知的障害(中度・重度)のある子どもの理解と支援、自閉症スペクトラム障害のある子どもの理解と支援について授業を行う。 (18 笠原 芳隆/2回) 肢体不自由・運動障害のある子どもの理解と支援について授業を行う。 (87 八島 猛/2回) 病弱・身体虚弱のある子どもの理解と支援について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>特別な教育的ニーズのある子どもに対する指導の理論と実践B-通常の学級及び通級指導教室を中心にー</p>	<p>通常の学級及び通級指導教室における特別支援教育の理論と実践に関する基礎的・発展的な知識を習得することをテーマとする。具体的には、通常学級及び通級による指導における特別支援教育の推進、特別な教育的ニーズのある子どもの特性に基づいた支援の在り方を理解することを到達目標とする。 (オムニバス方式/全15回) (57 池田 吉史/6回) インクルーシブ教育と特別な教育的ニーズ、限局性学習症の理解と支援、注意欠如多動症の理解と支援、自閉スペクトラム症・情緒障害の理解と支援について授業を行う。 (62 小林 優子/3回) 神経発達障害と脳機能、軽・中等度難聴児の理解と支援、聴覚情報処理障害の理解と支援について授業を行う。 (11 大庭 重治/1回) 弱視児の理解と支援について授業を行う。 (44 藤井 和子/3回) 言語障害の理解と支援、個別の教育支援計画・個別の指導計画と自立活動について授業を行う。 (114 関原 真紀/2回) 校内委員会とチーム支援、就学支援の体制づくりについて授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>健康・安全・食の教育の理論と実践</p>	<p>児童生徒等のいのちを守り、心身の健康を保持・増進するための教育指導、支援、管理、組織活動について、理論と実践を統合しながら学修することを通して、健康・安全・食の教育に係わる実践力を高めることを目標とする。 健康・安全・食の観点から、学校における教育指導、支援、管理、組織活動を包括的に捉えていく。同時に、理論と実践を統合しながら理解を深めていく。健康・安全・食の教育についての確かな知識、最新の動向を学ぶとともに、それらを実践に落とし込み、活用したりするための具体的な方途について学修する。 (オムニバス方式/全15回) (41 野口 孝則/5回) 体と心の健康のための食の大切さ、学校・家庭・地域が連携した食育、学校給食を生きた教材として活用する食育、食を通じた国際理解と和食の文化、若い世代に向けた食育について授業を行う。 (74 留目 宏美/5回) 学校教育と安全・安心、自然災害と学校、新型コロナウイルス感染症と学校、リスクマネジメントの考え方及び実際について授業を行う。 (56 池川 茂樹/5回) 熱中症予防の基礎及び予防のための栄養学、運動不足のリスクと生活習慣病、新型コロナウイルス感染症が運動習慣に与えた影響、Society 5.0時代の健康・安全・食の教育について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>学級経営及び学校経営に関する科目</p>	<p>担任教師を含む学級メンバーの相互行為の質的変容を促す働きかけとして学級経営をとらえ、そのプロセスとダイナミクスを検討する。さらに子どもの発達と協同的な学びをめぐる今日的課題に照らした学級・学年・学校経営の具体像とその将来展望をつかみ、主体的に学級経営や学年経営、学校経営に取り組む判断力や行動力を身につけることを目標とする。 (オムニバス方式/全15回) (3 安藤 知子/1回) (21 越 良子/1回) (73 辻村 貴洋/1回) (101 赤坂 真二/1回) (102 阿部 隆幸/1回) (108 菅原 至/1回) 本授業に関する概要についての授業を行う。 (21 越 良子/7回) (101 赤坂 真二/7回) (102 阿部 隆幸/7回) 学級内の人間関係、子どもの適応、学級集団の在りように影響を及ぼす教師の働きかけ等に関して授業を行う。 (3 安藤 知子/7回) (73 辻村 貴洋/7回) (108 菅原 至/7回) 学校・学年・学級経営の課題を、より今日の状況に照らして理解するために、組織論の観点からその機能や特質を検討する。現代教育の社会的性質にも目を向け、関連する環境変動やそれに伴う改革動向を吟味し、今後の経営実践の方向性を模索する。</p>	<p>オムニバス方式 共同(一部) 講義 14時間 演習 16時間</p>

<p>教育の経営と社会</p>	<p>公教育を構成するシステムの原理・原則を再確認し、学級・学年等の学校内の分掌組織の協働の現状と課題を明らかにし、これからの方向性について検討する。学校内の組織づくりから、地域社会の中の学校をとりまく周辺領域へと視野を広げ、現代的な教育課題に向き合う上での戦略的な教育計画と実践について、受講者相互の討議を行いながら理解を深める。 (オムニバス方式/全15回) (108 菅原 至/1回) (73 辻村 貴洋/1回) 第1回を担当する。学校にかかわる「経営現象」への着目について授業を行う。 (108 菅原 至/6回) 第2回～第3回、第5回、第7回、第11回、第13回を担当する。学校の経営、校内の協働と組織、学校財政の現状と課題、学校を運営する組織に関する総括的討議、学校・地域との関係と教師、教育連携のデザインについて授業を行う。 (73 辻村 貴洋/8回) 第4回、第6回、第8回～第10回、第12回、第14回～第15回を担当する。校内の協働と組織、開かれた学校づくり、教育をめぐるポリティクス、教育制度・行政の原理、「公教育」をめぐる包摂と排除、人事異動と教育経営、教育連携のデザイン、教育の経営と社会に関する総括的討議について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部) 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>学級経営、学校経営の実践と課題</p>	<p>学級経営、学校経営の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、グループ別討議とグループ発表を繰り返す。このことによって、基礎的事項の定着をはかるとともに、それに対しての間の質を高める。それぞれの項目の中に、特別支援学級の子ども、通常学級における気になる子を包含した学級経営の在り方、特別支援学級を包含した学校の在り方を述べる。さらに上記を通して問題意識と視点を形成し、実際の授業の観察、ビデオ・IC記録の分析、授業者との議論を行い、理論と実践の往還を行う。 ○ 学級経営の内容と果たす役割 ○ 学級経営と学校経営と校内研修の意義・形態・方法 ○ 保護者と連携を図った学級経営と開かれた学校づくり ○ 学級・学校経営を支える組織と評価</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>学級経営及び学校経営に関する事例研究</p>	<p>学級経営及び学校経営に関する現代的な教育課題とその課題に直結する教育理論と実践的なアプローチを網羅的に学ぶ。 (オムニバス方式/全30回) (101 赤坂 真二/12回) (102 阿部 隆幸/12回) (39 西川 純/12回) (110 早川 裕隆/12回) (119 水落 芳明/12回) 学級経営及び学校経営における実践的な指導方法やアクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントについて授業を行う。 (101 赤坂 真二/3回) 学級経営を基盤にした学校改善の実際、効果的な学校経営について授業を行い、学級経営における教師のリーダーシップをテーマとしたグループ別討議を担当する。 (102 阿部 隆幸/3回) 学級経営を軸にしたカリキュラム・マネジメント、ヒドゥン・カリキュラムについて授業を行い、教室の空気をテーマとしたグループ別討議を担当する。 (39 西川 純/6回) 学級経営目標の設定と学級経営に関するルーブリックの作成、学級経営案の作成と運用について、アクティブ・ラーニングによる学級経営、カリキュラム・マネジメントによる学校経営について授業を行い、学級経営に関するルーブリックや、定常的に行える教科指導と学級経営の融合をテーマとしたグループ別討議を担当する。 (110 早川 裕隆/3回) なりたい自分(役割)の創造、道徳性について授業を行い、いじめ問題への対応の充実をテーマとしたグループ別討議を担当する。 (119 水落 芳明/3回) 目標と学習と評価の一体化、学級経営と授業経営について授業を行い、人間関係づくりをテーマとしたグループ別討議を担当する。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部) 講義 28時間 演習 32時間</p>

SDGs時代における学級経営・学校経営の理論と実践	<p>SDGs時代における学級経営・学校経営の理論と実践について、以下の内容を中心に、各教員の実務経験と研究成果に基づいた実践的内容の講義を行うとともに、「探究学習」「グループワーク」や「フィールドワーク（実践校の訪問調査等）」「レポート発表」などの多様な学習形態を組み込んだ授業の展開を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級経営の内容と果たす役割 ・学級経営と学校経営（学年経営案、学年会、学校行事など） ・保護者と連携を図った学級経営　・学校組織、校務分掌とその機能 ・校内研修の意義・形態・方法 ・開かれた学校づくり（家庭や地域社会との連携、学校間交流の推進、学校経営と学校評議員、情報公開と説明責任） ・学級・学校経営と評価など（オムニバス方式／全30回）（19 釜田 聡／2回） <p>本授業の概要、SDGs時代における学級経営・学校経営について授業を行う。（111 松井 千鶴子／1回）</p> <p>学校課題の解決に向けたカリキュラム・マネジメントについて授業を行う。（69 田島 弘司／1回）</p> <p>学級における絆・仲間作りについて授業を行う。（23 小高 さほみ／1回）</p> <p>SDGs時代における家庭や地域社会との連携について授業を行う。（109 中野 博幸／1回）</p> <p>学校評価を活用した開かれた学校づくりについて授業を行う。（115 渡辺 径子／1回）</p> <p>家庭や地域との連携による開かれた学校づくりについて授業を行う。（107 清水 雅之／1回）</p> <p>ICTを活用した学級経営と学校経営について授業を行う。（82 原 瑞穂／1回）</p> <p>多文化共生と教育について授業を行う。（19 釜田 聡／21回）（111 松井 千鶴子／21回）（69 田島 弘司／21回）（23 小高 さほみ／21回）（109 中野 博幸／21回）（115 渡辺 径子／21回）（107 清水 雅之／21回）（82 原 瑞穂／21回）</p> <p>学級経営・学校経営に関するフィールドワーク、SDGs時代における学級経営・学校経営に関する探究とグループ発表会に関する授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 2 8 時間 演習 3 2 時間</p>
学校教育と教員の在り方に関する科目	<p>グローバル化に伴う知識基盤社会への移行に向けた教育政策、OECD・ユネスコなどの国際機関における教育課題、特にフランスの移民と教育の問題に焦点を当てた学力向上策を題材に、国際的な視点から教育を省察するためのディスカッションを行う。また、PISA調査の成績上位の国と地域の教育改革、カリキュラムデザインと授業の内容を取り上げ、多文化共生社会におけるカリキュラムデザインを考えるためのディスカッションを行う。（オムニバス方式／全15回）</p> <p>(13 大前 敦巳／2回) (76 野澤 有希／2回) 第1回、第15回を担当する。教育の国際的動向への対応、国際的視点からみた教育の省察について授業を行う。</p> <p>(13 大前 敦巳／7回) 第2回～第8回を担当する。知識基盤社会の中の教育、国際機関における教育課題、学力向上策の国際比較について授業を行う。</p> <p>(76 野澤 有希／6回) 第9回～第14回を担当する。PISA調査成績上位の国・地域における教育改革・カリキュラムと授業について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
社会の変化に応じる教員の役割	<p>教育及び学校教育という営みがどのような意味で「公共性」という性質を帯びているのかについて確認した上で、さまざまな観点から長期的な社会変容のもとで教育という営みが直面している課題を理解する。さらに、そうした課題に対して、次世代の担い手とともに向き合う一つのあり方として市民（性）教育について学び、今後の公教育の可能性や教員の役割について検討する。（オムニバス方式／全15回）</p> <p>(85 堀 健志／3回) (80 蜂須賀 洋一／3回) 第1回、第8回、第15回を担当する。本授業に関する微視的な視点と巨視的な視点、「市民社会の担い手であるとは、どのようなことか」、不確かな社会と教育をめぐる総括ディスカッションを行う授業を実施する。</p> <p>(85 堀 健志／6回) 第2回～第7回を担当する。教育の公共性、再生産の危機について授業を行う。</p> <p>(80 蜂須賀 洋一／6回) 第9回～第14回を担当する。市民（性）の育成、教員としての職責と課題意識について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
学校教育と教員の在り方に関する事例研究	<p>学校教育と教員の在り方に関する事例研究に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、発表・質疑を取り入れた授業の展開を図る。さらに上記を通して問題意識と視点を形成し、実際の授業の観察、ビデオ・IC記録の分析、授業者との議論を行い、理論と実践の往還を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校と社会 ○ 学校における教員の社会的役割と社会的・職業的倫理 ○ 社会、学校における教員に必要なコミュニケーション論 	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
持続可能な教員研修論	<p>先行研究の成果に基づいた上で、研究者視点と実践者視点を持ち、持続可能な自身の学び及び、勤務校の学びをデザインできる教師の育成を授業の目標とする。学び続ける教師であることを目指し、先行研究に基づいた教師のリフレクションの理論と手法、授業研究における授業観察・分析の理論と手法について学修する。本授業では理論を学ぶ講義と演習・分析、そしてその演習を振り返る評価を行う。この過程を通し、「理論と実践の往還」する学び続ける教師としてのプロセスを体験的に学ぶ。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>

			<p>教育を取り巻く様々なプロフェッショナルをゲスト講師としてお招きし、仕事に対する考え方、仕事術等について学び、「開かれた教育課程」を実現する学校づくり、教育実践のための教師の在り方について学ぶことをテーマとする。</p> <p>「開かれた教育課程」を実現するために連携機関、協働機関に勤務するプロフェッショナルをゲスト講師としてお招きし、仕事に対する考え方や仕事術について講義いただく。また、その内容を自分自身の仕事にどのようにいかしていくのかについて、自分の考えをまとめ、その後学生同士がディスカッションすることによって対話的に学び、考えを深めていく。</p> <p>(104 桐生 徹)</p> <p>第1回では、開かれた教育課程を実現する学校づくりについての講義を行う。第3・4回では、国レベルの教育行政のプロを講師に講演と教師の在り方のディスカッションを行う。第7・8回では、地方自治体（県）教育行政のプロを講師に講演と教師の在り方のディスカッションを行う。第11・12回では、教材開発会社のプロを講師に講演と教師の在り方のディスカッションを行う。</p> <p>以上の授業でメインティーチャーを担い、他の回はサブティーチャーとなる。</p> <p>(119 水落 芳明)</p> <p>第2回では、連携、協働、成果の共有や発展についての講義を行う。第5・6回では、地方自治体（県）教育行政のプロを講師に講演と教師の在り方のディスカッション。第9・10回では、民間企業と教育機関の連携に関するプロを講師に講演と教師の在り方のディスカッション。第13・14回では、コミュニティづくりのプロを講師に講演と教師の在り方のディスカッション。第15回では、講師の講演を元に、今後の教員としての在り方をディスカッションする。</p> <p>以上の授業でメインティーチャーを担い、他の回はサブティーチャーとなる。</p>	<p>共同</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
		SDGs時代の学校教育の現状と課題を明らかにし、その対応策に関して、学校教育全般と教員の役割・在り方について、教育理論と教育実践の両面から学ぶことをテーマとする。	<p>持続可能な社会の在り方と学校教育の関係、働き方改革、withコロナ、GIGAスクール構想等、現代的な学校課題について多角的なアプローチから探究し、今後の学校教育や教員の在り方について、協働的な探究活動を通じて、具体的な提案ができることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(19 釜田 聡/1回)</p> <p>SDGs時代における学校教育と教員の在り方について授業を行う。</p> <p>(111 松井 千鶴子/1回)</p> <p>教師の自律性とカリキュラム・マネジメントについて授業を行う。</p> <p>(23 小高 さほみ/1回)</p> <p>SDGs時代の現代的な生活課題と学校教育について授業を行う。</p> <p>(107 清水 雅之/1回)</p> <p>GIGAスクール構想が目指す次世代の学校教育について授業を行う。</p> <p>(33 土田 了輔/2回) (86 松浦 亮太/2回) (68 竹野 欽昭/2回)</p> <p>生涯学習社会構築に向けた身体教育の課題について授業を行う。</p> <p>(48 松本 健義/1回) (105 古閑 晶子/1回)</p> <p>子どもと社会をつなぐ授業デザインについて授業を行う。</p> <p>(69 田島 弘司/1回) (82 原 瑞徳/1回)</p> <p>多文化共生社会と学校教育について授業を行う。</p> <p>(19 釜田 聡/7回) (111 松井 千鶴子/7回) (69 田島 弘司/7回)</p> <p>(23 小高 さほみ/7回) (109 中野 博幸/7回) (115 渡辺 径子/7回)</p> <p>(107 清水 雅之/7回) (82 原 瑞徳/7回) (33 土田 了輔/7回)</p> <p>(48 松本 健義/7回) (105 古閑 晶子/7回) (68 竹野 欽昭/7回)</p> <p>(86 松浦 亮太/7回)</p> <p>本授業に関する探究活動、グループ別発表会、リフレクションを担当する。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
		SDGs時代の学校教育と教員の在り方		
コース別選択科目	プロフェッショナル科目	学校教育実践研究コース	<p>子どもの認知能力とその発達に関する心理学的知見をふまえ、学校現場でのカリキュラム運営や学級経営の実践に資する理論的な基盤を探究することを授業のテーマとする。</p> <p>子どもの認知能力とその発達に関する書籍を講読し、その心理学的、神経学的証拠と説明をもとに教育実践での理論的背景や基盤を探究する。そのために、受講者各自が各章の担当を決め、その概要とともに関連する論文や書籍を調べて報告する。その報告の内容をもとに、受講者各自が自らの論点を呈示し、受講者同士で教育実践への示唆について討論を行う。</p>	
		子どもの認知発達論		
		発達と教育の評価	<p>講義と演習を盛り込んだ授業形態とする。個人の発達を支え促進する教育実践や支援的介入の効果を検証する力を身につけ、児童生徒の学習や発達を評価分析する方法を理解することを目標とする。人間の心身の発達、発達を促す教育実践・支援的介入に関する論文を受講生が選ぶ。それらを講読しながら、そこで用いられている教育・支援の効果検証の方法を理解する。その後、実際に受講生の問題意識に基づいたテーマを決め、それらの検証を行うためのデータ収集、分析、考察を体験する。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
		教師と子どもの社会心理学	<p>学級・学校内では児童生徒間、教師と児童生徒間など様々な人間関係が成立し、様々な対人行動が行われている。それらの現象の成立機制を社会心理学の理論から理解し、他者との関係形成に関する事例について討議することを通して、より深い児童生徒理解と教師の関わりの基本的視点・態度および実践的方法を学ぶことを目標とする。</p> <p>自己評価、対人認知、対人関係、集団内行動、集団間行動について、社会心理学の基本事項を理解し、今日的な児童生徒の問題や社会的課題との関連を講義と討議によって考察する。そのうえで、学級・学校での児童生徒の関係形成に関する実践事例について、そのプロセスや機制をグループワークによって討議し、適切な教師の指導・支援のあり方を考察する。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>

現代の教師と教育の哲学	<p>教育の基本原則、歴史、思想についての様々な理解と説明モデルを検査し、現代の学校教育の諸課題を再考するための哲学的な分析枠組み・理論を習得することをめざす。とりわけ、子ども理解、教育的関係、人間形成をめぐる現代の教師の諸課題に関連づけながら学校教育を再考するための哲学的な分析枠組み・理論を習得することをめざす。</p> <p>教育の哲学という視点を切り口に教育の行為や活動の基本原則を読み解きながら、教育実践の本質をよりよく理解するための哲学、思想、歴史に迫り、現代の教師と学校教育をめぐる今日の課題や問題について専門的に探究する。私たちの子ども観、教育・発達観、自己理解、他者理解、等々に潜んでいる社会的な諸前提に着目しながら、教育実践のなかで当たり前なこととして見過ごされ、見落とされてしまう教育の事象に光を照らす。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
構造変動の教育社会学	<p>「変化する社会の中の間人発達と教育連携—学校・家庭・地域・職業社会のネットワークづくり」をテーマとし、教育社会学の伝統的なテーマである「社会化」と「選抜・配分」の問題を念頭に置きながら、学校・家庭・地域・職場・社会階層等との関わりにおいて、今日の子どもたちがどのような諸問題に直面し、いかなる支援策が可能なのかについて議論する。子どもたちを取り巻く生活環境や社会環境の構造変動に着目して、教育連携のネットワークづくりを通じた対応策と課題を理解することを目標とする。</p> <p>家庭と地域における第一次社会化、学校と職場における第二次社会化について、現代社会の構造変化に伴う問題点・争点の整理を行い、教育連携のネットワークづくりについて議論を行う。続いて、教育選抜と階層文化の問題を取り上げ、フランス社会における文化的再生産の諸問題との比較から、教育を前にした様々な格差や不平等の解決に向けた議論を展開する。</p>	
包摂と排除の教育社会学論	<p>学校教育は、〈社会化機能〉と〈選抜配分機能〉を果たすことを通じて、すべての個人の人生を左右するとともに社会全体のありようをも左右する巨大な国家プロジェクトである。ただ、このプロジェクトは、現在までに築かれてきた社会的文脈のもとに置かれており、必ずしも意図したとおりの結果をもたらすとは限らないという難しさを抱え込んでいる。本授業では、社会的排除と包摂という概念を武器に、学校教育が置かれている社会的文脈を理解しながら、学校教育が抱えている難しさを克服する道を探る。</p> <p>包摂型社会から排除型社会へという図式を学び、次に、現代社会を捉えるいくつかの視角を学ぶ。その上で、教育と関わる社会的排除の諸側面を学び、学校教育が抱える困難を克服するための議論を行う。</p>	
教育環境の条件整備とデザイン	<p>様々な教育改革が進められてきている中、学校では子どもたちへの教育実践はもちろん、社会状況の変化に対応すべく、新しい教育課題に取り組んでいかなければならない。現代の教育改革動向と特徴をとらえ、自らの教育実践や学校運営、さらには地域の教育経営に必要な判断力を培う必要がある。本講義では、現代における教育改革の実践状況を取りあげて、課題点・改善点のポイントを探っていく。多方面から押し寄せてきている様々な改革要求を整理することで、教育現場の職務改善へとつながられる途を見いだすことが目標である。</p> <p>中央と地方の教育改革、さらには学校の実態それぞれを念頭に置きながら、今後の日本の（学校）教育をどのようにデザインしていくかについて、主に学校・地方自治体の実践事例をもとに、参加者相互の討議を交えて進めていく。とくに授業の後半では、受講者自身の関心にもとづいたテーマについて議論する。</p>	
教育法規の理解と学校における実践	<p>学校内外の諸問題が複雑化する中で、教師には、法令遵守と社会規範に合致した言動が求められている。本授業では、教育法規と学校現場での具体的な働きかけとの関連や、教育関連裁判事例における学校・教師の問題等の検討を通して、法的知見の必要性を感得するとともに、法意識の資質の向上を図ることを目標とする。</p> <p>学校現場での具体的な働きかけと教育法規との関連について検討し、学校教育も「法律主義の原理」に則り、法律に基づいて実施されることを理解する。そして、教育関連裁判事例の検討を通して、社会に求められる学校・教師の法的言動や責任等を考察する。また、様々な教育関連裁判事例を検討する中で、裁判官が示す学校・教師に対する法的判断、対応等について議論することで、学校・教師として必要な法意識の向上を図っていく。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
学校組織連携論	<p>相次ぐ教育改革に揺れ動く状況下での、学校内外の連携・協働をめぐる課題とその克服の方途を検討し、自分なりに今後の学校の連携ビジョンをデザインできるようにすることを目標とする。特に、「チーム学校」の「組織学習」を促進するミドルリーダーへの発達をテーマとしてとりあげ、探究する。</p> <p>学校組織の基本的特質と、教育目的達成のための自律的学校経営に関する基礎知識を学習する。そのうえで、「チーム学校」、「組織学習」、「ミドルリーダー」といった各キーワードに着目しながら検討・考察をすすめ、今日的課題としての教育連携、組織連携について課題状況を把握し、子どもを中心に据えたよりよい連携の在り方を探究する。講義の他、文献講読や事例検討、ディスカッション等の演習形態を加味して進める。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
学校危機管理論	<p>学校では、事故等の発生を未然に防ぎ、万が一事故が発生しても、児童生徒等の安全を確保し、被害を最小限にとどめるために、教職員一人一人に、状況に応じた的確な判断力や機敏な行動力等が求められている。本授業では、関係法規や国の施策、過去の学校事故事例等の理解や模擬教職員研修等を通して、危険を予測する力や最悪の事態を想定する力、的確な判断力等、危機管理に関する資質の向上を目標とする。</p> <p>まず、学校管理下における災害の状況を把握する。次に、学校保健安全法等関連法や国の施策等をもとに、学校危機管理の必要性と理論を学ぶ。そして、具体的な学校事故事例をもとに、学校・教師に求められる責任や、判断・対応等を考察する。さらに、模擬教職員研修を取り入れながら、どのような方策や判断がよいのか討論しながら、危機管理に関する資質の向上を図る。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>

教育組織マネジメント	<p>教育組織、マネジメントの概念を検討し、その概念の対象と特徴を捉え、時代の変化や組織研究の進展に伴い、学校組織がどのように捉え直され、位置づけられたかを理解する。「学習する組織」「実践コミュニティ」という視点で教育組織マネジメントや、これからの社会における教育組織づくりの戦略を考えることをテーマとする。</p> <p>学校を取り巻く環境が激変し、教育実践の高度化、教職の専門性の向上が求められ、「地域とともにある学校」という方向性も示されている。「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには「学び続ける教師」という考え方が基づく教育実践をつくっていくためには、学校組織、教育委員会等の教育組織が、「学習する組織」や「実践コミュニティ」として捉え直し、位置づけ、組織づくりをしていくことが求められることを、理論と実践の両面から明らかにし、これからの社会における教育組織のマネジメントについて構想する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
現代の教育改革とビジョン	<p>近年の地方分権化や自律的学校経営を進める一連の動向の中で、学校教育関係者には、教育改革に関する的確な理解とそれに基づく主体的な判断力が求められている。この要請に応えるためには、単に知識を深めるだけでなく、それを踏まえてどのような方向を目指すのかという教育ビジョンを明確にする必要がある。そこで、本科目では、現代教育改革の経緯・背景・内容について正確な理解を得るとともに、それを踏まえた上で今後の学校経営の在り方について各自が明確なビジョンを描くことを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (3 安藤 知子/6回) (73 辻村 貴洋/6回) 第1回と第6回～第9回、第15回を担当し、第1回では概要について授業を行う。第6回～第9回では現代教育改革の論点について授業を行う。第15回では本授業の総括について授業を行う。 (73 辻村 貴洋/4回) 第2回～第5回を担当し、現代教育改革の主要トピックを取り上げてその背景や特徴を検討する。 (3 安藤 知子/5回) 第9回～第14回を担当し、組織学習論の知見に学びながら組織行動の変革を促すためのビジョンや取り組み課題を探索する。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>
学校改善とカリキュラム・マネジメント	<p>教育課程とカリキュラムの概念の検討、教育課程管理、教育課程経営、カリキュラム・マネジメントの考え方の違いやつながりを理解する。「社会に開かれた教育課程」「地域とともにある学校」が目指す方向性と学校改善、カリキュラム・マネジメントの具体的な事例を分析・考察し、カリキュラム・マネジメントによる学校改善の戦略を考えることをテーマとする。</p> <p>教育課程、教育課程管理、教育課程経営等の戦後の教育経営や学校経営と教育課程のかかわりの編成を理解し、学校と家庭・地域・社会等のかかわりを踏まえながら、「社会に開かれた教育課程」「地域とともにある学校」という方向性に向け、カリキュラム・マネジメントを通してどのように学校改善を図っていくかを考察する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
教育研究における質的研究方法論	<p>研究を首尾よく行うためには、研究方法を身につける必要がある。研究方法は、扱うデータが量的ものであるか質的なのものであるかによって、大きく二つに分けられる。いずれも人間や教育や社会を理解する上で欠かすことのできない方法で、いずれか一方が勝っているということはない。しかし、扱うデータの性質に違いがある以上、両者の間には様々な違いがある。そこで、本授業では、質的データを分析する質的研究の方法を学ぶことをテーマとする。</p> <p>本科目では、①科学的な研究にもとづいて知識を生産・創造するとはどのようなことなのかを学んだ上で、②質的方法を用いた教育研究の典型例のいくつかを、とりわけその方法面に注目して吟味することで、質的研究に何ができるのかを学ぶ。最後に、③質的研究の実践スキルを身につけるために演習を行う。</p> <p>(85 堀 健志) 主担当として、質的調査研究法に関する講義及び、受講生の議論のファシリテーターとして統括する。 (23 小高 さほみ) 副担当として、質的調査研究法に関する講義及び、受講生の議論のファシリテーターとして支援する。</p>	<p>共同</p>
カリキュラムマネジメントとカリキュラムデザイン	<p>カリキュラムマネジメントの基礎理論を理解し、カリキュラムグランドデザイン、年間指導計画、単元、授業を資質・能力をベースにデザインすることを習得する。また、カリキュラム改善するためにカリキュラムマネジメントサイクルを習得し、応用できることを到達目標とする。</p> <p>カリキュラムマネジメントの概念と重要性を理解する上で、カリキュラムマネジメントの事例を分析する。また、カリキュラムグランドデザイン、年間指導計画、単元、授業と目標、資質・能力の関係性を明確にし、デザインの方法を習得し、カリキュラムマネジメントサイクル：PDCAサイクルとCIPPサイクルを理解する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
教育経営総合演習Ⅰ	<p>一人一人の実務経験のもつ固有性や解決が難しい様々な現場の課題を受講者間で共有し、理論と実践との往還を通して経験を相対化させながら、これからの社会における教育経営の在り方について検討する。個々の研究課題について共同で吟味し、「適応の学」にとどまらない教育経営についての総合的な学識を動員しながら、学校教育現場の問題解決に資する将来構想について考察する。</p> <p>本演習では、スクールリーダーに必要な教育経営の総合的視点を身につけた上で、個々の研究課題を設定し、フィールドワーク等を通して学校教育現場がもつ課題を共同で検討し、研究課題を深く掘り下げて議論する。また、フィールドワークや研究で獲得した視点を通して、これからの教育経営の課題は何かを考え、問題解決のための道筋を構想する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

教育経営総合演習Ⅱ	1年次の学修・研究や個々の現場経験を受講者間で共有し、理論と実践の往還を通してあらためて教職経験を相対化させながら、これからの社会における教育経営の在り方を深めて議論する。個々の研究課題について共同で吟味し、「適応の学」にとどまらない教育経営についての総合的な学識を動員しながら、学校教育現場の問題解決に資する将来構想を最終報告書にまとめて発表する。 本演習では、1年次の教育経営総合演習Ⅰを履修した上で、2年次生の受講者が各自の研究課題の論点を整理するとともに、教職大学院で教育経営を研究・探究する「理論知」と、過去の教職経験や将来のスクールリーダーとしての「実践知」との往還を図りながら、それぞれの「知」の有効性と限界について検討する。また、これらの検討を通じて、これからの教育経営についての解決すべき課題や解決のためのプランを構想し、最終報告書の執筆と発表を行う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
授業分析の理論と実践	校内研修は、特色ある学校づくりを推進するため、学校全職員で行うものである。特に授業研究は、教師の授業力量形成の大きな研修の場となることから、授業研究の在り方を講義及び演習を通して理解する。特に、実際の授業を参観し、学習者の見方、授業後の意見交流の仕方等を視点とし、学校の授業研究の運営と方法の課題を探る。 校内授業研究は、日本の教育界において脈々と受け継がれ、実践されてきた研修の1つである。今日、その弊害は数多く指摘されている。そこで、様々な授業研究の利点と欠点を理解し、特色ある学校づくりのための礎となる授業研究を論じる。また、実際の授業を参観し、学習者の見方、授業後の意見交流の仕方等を受講者同士で論じ合う。アクティブ・ラーニングを取り入れている。	
カリキュラム・マネジメントを育む理科学習デザイン論	子どもの学びに即した理科授業のデザインの在り方を講義及び演習を通して理解する。特に、子どもの評価方法や学習方法、教材開発や単元開発、他教科や学校体制との関連性を考慮した理科学習デザインを考え合い、深め合う活動となる演習を中心とすることで、様々な手法の運用上の利点と欠点を理解し、状況にあった授業デザインの構築できる知識と態度を養成する。 新学習指導要領の総則と理科の目標との関連性や学校体制と理科のカリキュラムの関わり等を中心に授業は展開される。子どもの視点に立った理科授業とカリキュラム・マネジメントを視野に入れた理科授業の学習デザインを構築する必要がある。本論は、学習論の変遷、子どもの学びのとらえ方、それらを基礎として教材開発や単元開発、指導形態の在り方などを論じ、学校体制の構築を理科学習から行い、カリキュラム・マネジメントを計画し、実践できる教員の育成を目指した演習を実施する。	講義 14時間 演習 16時間
国語科学習デザイン論	国語科の授業デザインに関する、現在の教育課題に即した文学の読みに関する理論について、実践事例に即してさらに深く学びながら、新しい授業実践を含む教育改革の方向やそのあり方を評価する複眼的視点を養うことを授業の目標及びテーマとする。 読者反応理論に基づいた文学の読みの交流の理論的枠組みと交流の発話分析の手法である質的三層分析について、具体的な教材に照らしながら実践的に扱うとともに、理論に基づいた汎用性のある学習デザインについて考案・演習する。	
学習者主体の授業設計理論と分析	学習者が主体となる授業の実現のために、先行研究の成果に基づいた上で、授業設計し、授業を分析・評価し、次の授業を設計することができる「理論と実践の往還」する教師の育成をテーマとする。 学習者が主体となる授業の実現を目指し、先行研究に基づいた授業設計の理論と手法、授業における学習者観察・分析の理論と手法について学修する。授業では理論を学ぶ講義と実際に授業設計と学校現場の授業を観察・分析する演習を行う。この過程を通し、「理論と実践の往還」するプロセスを体験的に学ぶ。また、講義全体を通し、授業技術の理論と演習を学ぶ場を設けることで、即戦力としての教師の力量を形成する。	講義 14時間 演習 16時間
教科におけるICT活用論	教科の授業において、ICT機器の操作方法と、アクティブ・ラーニングにおいてICTを活用する方法を学び、実際に模擬授業の中でICTを活用した授業設計を行い、実践できる能力を育成することを本授業のテーマとする。 タブレット型端末やCSCL、その他のICT機器の操作方法や機器の特徴を学ぶ。さらに、さまざまな教科においてICTを活用した先行研究の学びを通して、実際に授業設計を計画・実践して、体験的に学ぶ。	講義 14時間 演習 16時間
『学び合い』の授業論	『学び合い』という考え方や、その実践を理解することを目標とする。 認知研究の成果から、知識・技能の相対的に高い教師は、知識・技能の相対的に低い学習者（特に成績の低い学習者）がどのように理解しているかを、理解できないことを明らかにする。また、学習者の理解は多様であり、教師一人ではその多様性に対応しきれないことを明らかにする。このことから、学習者相互に学び合う学習の必然性を明らかにする。その後、学び合いによって、知識・技能の向上と、人間関係の向上が無矛盾に成立することを明らかにする。さらに、学び合いの関係が、複雑になることによって集団が安定することを明らかにする。	
学習デザイン論	「主体的・対話的で深い学び」を保証する授業実践のための目標の立て方、学修の評価方法等に関する学習デザインや、個別の学習状況を可視化し、学習者全体に広げていくためのフィードバックの在り方等について体験的に学び、教師の指導がどのように効果を上げていたのかを検証するための記録、分析方法を学ぶことを目標とする。 そのために、学習指導要領に基づき「主体的・対話的で深い学び」を実現するための指導方法に関する理論と実践に関する先行研究を紹介するとともに、それぞれの学生が考えたテーマに基づいた学習デザインやその記録方法、分析方法等について発表し合う演習を取り入れる。	

<p>勇気づけの学級経営論</p>	<p>子どもの学校生活に対する意欲を高める学級経営の理論と方法を理解し、実践できる教師の育成をテーマとする。 授業や学級経営は、子どもの実態や教師の力量に影響されることが多く、一般化されにくいとされてきた。特に、学級づくりは断片的な技術に分ち合うことができて、その基本的な考え方や技術は、それぞれの教師の「名人芸」として、共有されにくいものである。本授業では、多様な考え方があって叱るべき学級経営に、あえてモデルプランを示す。そして、その学級経営によってどのような学級ができ、どのような子どもが育つのかを明らかにする。また、受講者が学級経営について探究したい課題を設定し、それをグループワークを通じて解決することを通して、学級経営に対する実践的知識と身に付ける。</p>	
<p>道徳教育の理論と実際</p>	<p>道徳教育や、特別の教科 道徳（道徳科）の充実が、これまで以上に求められている。そこで、道徳教育や道徳科の関連のあり方や、それぞれの特性、目指す内容の理解を深める。また、道徳授業の指導方法を概観し、さらに役割演技を中心に、道徳的価値の理解と生き方に関する考えを深める道徳授業の展開や効果について、実感的に理解することをテーマとする。 道徳教育と道徳科の違いと関連を正しく理解し、道徳授業の指導方法の確立・充実が図れるよう、講義や演習をとおして道徳教育や道徳授業に関する様々な理論や実践を概観すると共に、適切な価値分析や資料分析に基づいた道徳授業の指導案を作成し、模擬授業を展開する。これらの学習で、道徳科授業や道徳科を要とする道徳教育の指導力の高度化を図る。</p>	
<p>資質・能力ベースのカリキュラムデザイン</p>	<p>資質・能力を育成する授業・カリキュラムのデザインし、その評価ができるようになることを目標とする。 はじめに、講義と資料購読によって、教育課程改革の国際的動向と国内における学習指導要領改訂に係る議論を展望し、これからの学校教育における資質能力ベースの教育課程と期待される授業実践のあり方を理解する。次に、教育方法学や学習科学などの教授・学習に関わる理論や研究成果を文献資料から学び、それらと実践と関連付けることを目的とした議論を行う演習によって、授業づくりの基盤となる学習理論の習得と授業デザインへの援用手法を学修する。これらの学修成果を統合し、より実践的な力の獲得に向けて、資質能力を基盤とした単元の開発と評価方法を考案する演習を行う。上記の学習過程を省察し、授業デザイン、カリキュラムデザインの原理と方法を学修する必要性を認識し、生涯学び続ける教師としての学修のありかたを理解する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>協同的な学習実践論</p>	<p>協力して同じ目的に向かって学んでいくあり方、考え方、進め方を実践的に学び、自分が授業をデザインするときに活用することを本授業の目標とする。 今後、主体的・対話的で深い学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）を授業の中で日常的に推進していくにあたり、協同的（協働的）に学んでいくあり方、考え方、進め方の習得が学校現場に求められている。これらをワークショップや演習を中心に実践的に、体験的に、協同的に学んでいく。</p>	
<p>中学校高等学校国語科授業づくり演習</p>	<p>中学校・高等学校の国語科授業の専門性について考え、身につける。文字言語に関しては、「書かれてあることを正確に読み取る」指導や、「書かれていないことも読み取る」指導を身につける。音声言語に関しては、音声言語表現をすることで、文章で表現されている世界を学習者が体得できる指導を身につける。総合して主体的・対話的で深い学びが起きる指導を身につける。 散文教材の読み取り、韻文教材の開発や韻文作品の制作、より良い古典課題の開発、音声言語表現活動の実践、群読作品の制作、それらに対する学習者の活動予測など、学校現場の活動に即して、演習を中心に学ぶ。</p>	
<p>カリキュラム・マネジメント実践論</p>	<p>学級を運営するためには、子ども達の協働力を高める必要がある。同様に、学校を運営するためには、学校職員の協働力を高める必要がある。これを実現するためには、学校教育の大部分を占める教科学習がアクティブ・ラーニングとなり、教科を横断するカリキュラム・マネジメントが必要がある。本講義では、『学び合い』の実践を通して学級・学校が抱える様々な問題を協働して解決できる場になることが出来ることを学ぶことを目的として、学校の抱える様々なテーマを従来の解決策と『学び合い』の解決策と比較し、それを学生同士、学生と教員との討議をもとに深めていく。</p>	
<p>教科内容構成「道徳」の理論と実践</p>	<p>「道徳教育理解の深化」をテーマとし、①道徳教育の基礎基本を深く理解し、教材を開発できること、②開発した教材を用いて、授業を実施できること、③模擬授業をとおして、学習者の学びの姿を評価できることを到達目標とする。 道徳教育の内容をより深く理解できるように、理論的な考察を行い、その後、道徳教材を開発し、授業方法を学習する。授業は、グループ討議や、指導案作成、役割演技、模擬授業などを用いて、演習形式で行う。</p>	
<p>道徳教育の理論と実践</p>	<p>「道徳教育における新しい指導方法の検討」をテーマとし、①小中学校における道徳授業の指導案を作成することができて、他者の作成した指導案に建設的かつ批判的なコメントができること、②「特別の教科道徳」の授業における道徳教育と学校の教育活動全体を通じての道徳教育の関連について説明できること、③道徳教育と、人権教育や生徒指導などのかかわりが説明できることを到達目標とする。 道徳教育の現状を理解し、「特別の教科道徳」の授業における道徳教育と学校の教育活動全体を通じての道徳教育の関連について検討し、新しい道徳授業のやり方を学びつつ検討する。授業は、グループ討議や、指導案作成、役割演技、模擬授業などを用いて、演習形式で行う。</p>	
<p>学校教育相談の理論</p>	<p>学校教育相談の概要・定義、公教育機関である学校で実践される教育相談としての特長、背景理論、近接領域との異同等を生徒指導要との関連において概説する。また、受容・共感・自己一致というカウンセラーの態度要件をベースにしながらも、それだけでは済まされない学校教育を前提としたカウンセリングマインドについて検討する。さらに、不登校や非行またいじめの事例を取り上げながら、実践に活用する手法、校内・学外連携、評価などについて講義し、理解を深めるためにディスカッションや演習を行う。</p>	

学校教育相談の実践	心理療法またカウンセリングとの比較において、学校教育相談のねらいや役割また配慮事項などについて検討する。また、主として、構成的グループエンカウンターなどの集団心理教育の方法を用い、学校教育相談を実践する際に不可欠な『自己開示、自己理解、自己受容、他者理解、他者受容、グループコンセンサス、リーダーシップ、ファシリテート』などの能力の具体を体験学習する。加えて、学校教育相談の実践におけるアセスメントないし評価の方法としての心理テストや逐語録の読み取り方についても演習する。	
特別活動の理論	特別活動の中核である学級活動を中心に、テーマによる議論を通して理解を深めていく。「特別活動は児童生徒に何を育てようとしているのか、そのために教師はどう働き掛けるか」をテーマとする。学級や学校で行われる特別活動の実際の手法やその時の児童生徒の反応などを資料として活用しながら、より実践的な指導に役立てるための技術や理論を獲得することを目標とする。 ①児童生徒の学級活動に対する自主性はどのようにしたら育てることができるのか。②人間関係性のスキルを養成にはどうすればよいのか。③特別活動を活かした学級経営や生徒指導のあり方はどうあればよいのか、を大きなポイントとして、近年の学校現場における諸問題について検討していく。特に問題となっている社会性の欠如した児童生徒、多様な生徒への対応など実際の事例を基にしながら、実践的な指導のあり方に結びつくように授業を進めていく。	
特別活動の実践	学校生活上の問題（いじめ等の諸問題）に取り組む活動づくり（指導案作成等）、集団決定の実践化、特別活動の評価方法などについて演習する。到達目標及びテーマは「子どもたちが創る学級集団への支援の実践」である。特別活動を活用した学級集団づくりのあり方について、実践的な方法論を構築していくことを目指す。 実践事例をもとにしながら、学校において困難を感じている児童生徒の問題解決のための話し合い活動（学級会）や集団指導のあり方、支援の方法、活動の評価などについて学んでいく。実際の事例を分析することにより授業実践のための改善点や指導上の留意点などについて具体的に理解を深めていくようにする。いじめ問題等の現代教育の課題については、調査等の分析を実際に行いながら課題解決のための手立てをグループ等で探求していく活動を取り入れる。	
キャリア教育の理論	少子高齢化や経済の低成長など、先行きの見えない社会情勢、その一方で情報化や機械化、人工知能の発達などものすごいスピードで変化する現代社会の中で、キャリア教育の一層の充実が求められている。 本授業では、今日の現状と照らし合わせて、キャリア教育の理念と実践について理解を深め、その効果と指導法について論議する。そして、キャリア教育研究の進め方を習得するとともに、学校現場に生かせる専門的知識と指導法技術を身につける。 キャリア教育の意義と歴史的経緯から現在の学校教育におけるキャリア教育の必要性について社会的背景を踏まえて検討する。また、我が国の教育理念とその具現化のために、社会的・職業的自立に向けた能力育成の方策として、キャリア教育の基礎理論及び発達段階に即した効果的指導、各教科、領域との関連、地域社会との連携について論議し理解を深める。	
キャリア教育の実践	キャリア教育に関する基礎的・基本的な理論や実践に対する理解を深め、演習を通してキャリア・ガイダンス及びキャリア・カウンセリングに必要な技術・技能を身につけることが本授業の到達目標である。 キャリア・ガイダンス及びキャリア・カウンセリングは、児童・生徒すべての児童・生徒を対象とするキャリア教育活動である。本授業では、演習を通じてキャリア・ガイダンスの理論と実践を関連づけて理解できるよう概説する。また、キャリア・カウンセリングに関する知識と技術は、進路相談・教育相談を専門とする教員やスクールカウンセラーだけでなく、すべての教員にとって必要なものであることから、児童生徒や保護者とのコミュニケーションスキルトレーニング・演習を通して、キャリア・カウンセリングをおこなうための知識・態度・技能を習得する。	
実践的生徒指導の理論	学校における生徒指導の意義と必要性を現代の教育課題と対比させながら再整理することをテーマとする。児童生徒理解に基づいた生徒指導の理論を実践的な視点から捉え、生徒指導の専門性を高め、学校の生徒指導に関する指導的立場として必要な臨床力を高めることを目標とする。 生徒指導提要をもとに基礎となる生徒指導の考え方・在り方を実践的な視点から再整理した後、現代の教育課題と対比させ、適切な対応の在り方をグループ毎に検討し発表する。	
実践的生徒指導の演習	学校における生徒指導の意義と必要性を現代の教育課題と対比させながら再整理することをテーマとする。児童生徒理解に基づいた生徒指導の理論を実践的な視点から捉え、生徒指導のスキルを高め、学校の生徒指導に関する指導的立場として必要な実践力を高めることを目標とする。 生徒指導の基礎となる児童生徒理解に生かせるスキルと、生徒指導上の諸問題の予防をねらいとした具体的な方策について演習を通じて体験的に習得し、一次予防に生かせる取組の在り方をグループ毎に検討し発表する。	

教科教育・教科複合実践研究コース	教科内容構成「国語」の理論と実践	教科としての「国語」の基礎をなす、国文学・国語学・書写書道の諸領域における体系的な知識や概念の習得を基本とするとともに、国語科教育学の観点からは、授業展開上の原理の考察を行うことを目的とし、中・高等学校における教科としての「国語」の固有性に鑑み、その基盤をなす諸領域から授業回数に応じてオムニバスの体系的な知識・概念の理解を促すとともに、教科教育の観点から臨床場面における実践的な指導法の選択適用能力を高めることを目指す。 (オムニバス方式/全15回) (16 押木 秀樹/3回) 教科内容構成特論の「国語」の特質、文字及び書字に関する学習内容と構造について授業を行う。 (17 小埜 裕二/3回) 文学教育とコード、文学教育と批評、文学教育と人間について授業を行う。 (54 渡部 洋一郎/2回) 授業分析の歴史と手法、教師の意思決定に関わる研究とその成果について授業を行う。 (50 迎 勝彦/2回) 古典文法の基本と古文読解について授業を行う。 (100 船城 梓/2回) 伝統的な言語文化と古文及び漢文について授業を行う。 (93 鯨井 綾希/3回) 音声学の基本と授業における発声表現、語彙論の基本と作文における適切な語の選択、文法論の基本と教科書作品読解の実践について授業を行う。	オムニバス方式 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	日本古典文学の解説と教材研究	『竹取物語』『平家物語』『源氏物語』を取り上げ、その教材的意義を考えながら分析、考察する。①作品(古典本文の抜粋)を原文で、音読でき、意味を説明できること、②作品の性質をあらわすキーワードについて説明できること、③作品を初等・中等教育における教材としてとらえ、その教材的な価値を説明できること、④初等・中等教育における日本古典の扱いやその教材的意義について理解を深め、教材化を図るための基礎的な力を身につけることを目標とする。 初等・中等教育における教科にもなっている『竹取物語』・『平家物語』・『源氏物語』ひいては「物語」について、個々の作品固有の性質を明らかにしながら、その教材的意義や価値について考える。古典文法ならびに古語の基礎知識についての素養を身につけるとともに、日本古典文学解説技術を高め、その上で、日本古典文学(または我が国の言語文化)の教材化を図るための考え方や方法論を学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (100 船城 梓/13回) 『竹取物語』『平家物語』『源氏物語』を取り上げ、解説・考察を行うとともに、教材としての『平家物語』『源氏物語』について授業を行う。 (50 迎 勝彦/2回) 初等・中等教育における「言語文化」の教材化、教材としての『竹取物語』について授業を行う。	オムニバス方式 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	語彙・文法の授業における理論と教材化	日本語の語彙・文法に関する中等国語科の授業構想をテーマとする。日本語という言語の構造的な理解に基づいて、国語科の言語項目に関する教材および授業デザインを形作ることを目標とする。 中等教育では、日本語そのものへの理解を深めるために「言語単位」「単語の分類」「活用」「文の組み立て」などを学び、それらの知識を文章理解や文章作成といった現実的な言語使用に応用していくことが求められる。それを受けて本授業では、身近な言語事象と日本語の語彙・文法の特徴を織り交ぜながら、中等教育における語彙・文法の効果的・実践的な授業法の確立を目指していく。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	文学教材及び説明文教材読解の理論と方法	国語科教科書掲載の教材文に関わる読解の視点と授業構築のあり方をテーマとし、教材文読解の方法を具体的に学び、それを踏まえた授業構想と実施を実際に試みることを目標とする。また、学習指導案の作成についても、その在り方を実際に学ぶ。 小・中・高等学校の国語科教材文を実際に用いながら、どのような観点から読解を試みれば、児童・生徒がわかりやすく納得できる授業展開に結び付くのかを具体的に学ぶ。テキストは教科書各社の教材文を用いるので、特定の会社や教材だけには拠らない読解力を培うことを目指している。	
	文学教材の読解と開発の理論と実践	文学教材(近代文学)の読解や開発の方法を学び、教室で実践できる能力を養うことを目標とする。 本授業では、文学教育の意義について学ぶとともに、文学研究における読解の種々の方法を理解し、具体的なテキストを解釈することで、受講者が文学教材の読み方や教え方の能力を養い、教育現場で実際に活かせるようにする。汎用的能力を養うための手立てや歴史・文化と関連づけた教科横断的な学びの実践手法の修得も目指す。授業後半には具体的な文学教材をもとに課題設定を中心とした授業案の作成を受講者が行い、成果を発表しあう。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	書写指導と文字を書くことの理論と実践	国語科書写指導および文字指導において求められる資質・能力を明らかにした上で、その内容構成と学習過程・授業デザインを検討し、それに適した内容理論について深める。それにより、書写環境の変化に応じて自律的に学習指導を構築する力を伸ばすとともに、実践力を養うことをテーマとする。 書写指導および文字指導における字体・字形についての学力を、情報機器が普及した時代における資質・能力として考える。次に、その力をどのように養うか、認知的側面と運動的側面等から授業デザインについて検討する。それらの構造にあった教科内容の理論を明らかにした上で、模擬授業などを行うことで実践力を養う。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
	国語科教育実践研究	国語科教育に関する基礎的な理論・研究課題について検討を加え、国語教室を対象とした教育実践研究を進めるための知見を深めることを目標とする。 教科教育としての理論を専門的に学ぶことにより、初等及び中等教育を対象とした国語科における学習指導の方法・評価方法等のあり方について検討を加える。教育研究の進め方、研究の主題・対象・方法の設定等についての概説を行い、話す・聞く、書く、読むの各言語活動に即した事例研究、授業研究のあり方や方法論について検討する。	

<p>国語科表現教育の理論と実際</p>	<p>国語科における表現教育に関する理論とその実際的な授業づくりの方途について学ぶ。国語科における表現指導、授業実践上の今日的な課題を明らかにすることを第一の到達目標とした上で、小学校及び中学校、高等学校における言語活動の組織化、教材化の方法、評価の方法等について具体的に提案することを第二の到達目標とする。 (オムニバス方式／全15回) (54 渡部 洋一郎／7回) (50 迎 勝彦／7回) 国語科における「表現」の教育、演習課題の設定、演習発表及びグループディスカッションや発表活動を通して知見を深めるための授業を行う。 (54 渡部 洋一郎／4回) 意見の表出を支える要素とその性質、議論の余地があるとはどのようなことを言うのか、主張のプロセスにおける曖昧さとは何か、Toulmin Modelの国語への応用と課題について授業を行う。 (50 迎 勝彦／4回) 話しことば教育の現代的課題、言語活動の組織化と学習過程の構想、教材化研究とその理論的基底、学習活動の評価と実践的課題について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部) 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>教科内容構成「英語」の理論と実践</p>	<p>各担当教員の専門的見地から学習指導要領に示された「英語」の目標や指導内容を吟味し、児童・生徒の発達段階を考慮した授業実践を積み重ねられるよう基礎的実践能力を養うことを目標とし、「英語」の指導にあたって習得すべき専門的知識・概念や能力・態度について理解を深め、教育現場で理論と合致した体系的な授業が展開できるように指導内容を追求する。 (オムニバス方式／全15回) (42 野地 美幸／5回) 英語統語論に基づく「英語」の構成に関して、導入、内容的・実践的発展、内容的・実践的探求について授業を行う。 (98 橋本 大樹／5回) 英語音韻論に基づく「英語」の構成に関して、導入、内容的・実践的発展、内容的・実践的探求について授業を行う。 (84 Brown, Ivan Bernard／5回) 異文化コミュニケーションに基づく「英語」の構成に関して、導入、内容的・実践的発展、内容的・実践的探求について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>英文法指導の理論と実践</p>	<p>①言語の所在、特徴、働きについて理解を深める。②言語知識、英文法、英語力について理解を深める。③第二言語英語の習得のプロセスについて理解を深める。④英語の文法指導について理解を深める。以上をテーマ及び到達目標とする。 人間の言語使用を可能としている文法とはいかなるものか、そしてそれは第二言語(英語)の場合どのように習得されるのかといった問題について生成文法という言語理論を基に理解を深める。また、学校現場での「英語」の授業内容・方法・評価との関連を検討すると共に、より良い文法指導について考える。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>英語音声指導の理論と実践</p>	<p>英語音声学と英語音韻論についての知識を養い、学校現場で求められる音声指導・発音評価の素地を養うことを目標とする。英語音声学(調音音声学・音響音声学)を理解した後に、音声を分析する方法を学ぶ。その後英単語に見られる音の配列規則(音韻論)について学ぶ。これらの知識を基に、英語音声指導と発音評価を実践する。 (オムニバス方式／全15回) (98 橋本 大樹／13回) 英語音声学音韻論、調音音声学、音響音声学、音響ソフトを用いた共鳴音・阻害音の分析、英語音韻論について授業を行う。 (98 橋本 大樹／2回) (79 長谷川 佑介／2回) 英語音声指導の実践、発音評価の実践について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部) 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>英語インタラクティブ指導の理論と実践</p>	<p>第二言語・共通語としての英語、異文化間コミュニケーションの道具としての英語での実際の会話のメカニズムをより深く理解する。そのために、エスノメソドロジー・会話分析の先行研究の豊かな成果を活用を通じて、第二言語での「相互行為能力」について実践的に検討する。 先行研究及び担当教員の研究資料から実際の会話の録音・動画データ及びトランスクリプトを活用する。また、受講生自身による会話データ収集と分析を行ない、学校の英語の授業を想定した模擬会話活動を行い、様子と結果を検討する。教室内学校の英語教育におけるコミュニケーション活動のデザイン及びその強化を検討し、姉妹協定校との英語で行うリアルタイムオンライン交流や学校が企画する海外研修等を想定し、それらのコミュニケーション場面の相互行為から生じる学ぶ機会の効果的活用を検討する。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>英語授業と協同学習</p>	<p>本授業の目的は、現役あるいは未来の教員として、外国語活動や外国語科(英語)の重要性を認識し、協同学習を取り入れ、児童・生徒の立場に立った授業の設計と実行を可能にすることである。到達目標は、主に初等・中等教育の外国語(英語)教育の現状を知り、児童・生徒が主体的に学ぶことができる協同学習による授業デザインができることである。また、教師として英語コミュニケーション力をつけ、習得した知識を模擬授業に活用でき、評価の基礎知識を踏まえた評価をデザインできることも目標とする。 本授業では、児童・生徒の外国語(英語)を学ぶ意欲を高め、学習し続けるための協同学習に基づく英語授業デザインや評価方法を学ぶ。そのために、協同学習の理念と手法をアクティブラーニングによって学び、模擬授業による実践も行う。また、外国語活動・外国語科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための考え方を学ぶ。 (12 大場 浩正) 各回の授業において、メインティーチャーとして、英語指導における協同学習の理念と手法およびその模擬授業への応用の仕方と模擬授業を指導する。また、学生の議論のファシリテーターとして統括する。 (117 渡邊 政寿) (97 瀧澤 典子) 各回の授業において、サブティーチャーとして、授業内容の補足、および学生の議論の補助として支援する。</p>	<p>共同 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>

英語授業とファシリテーション技術	<p>体系化されたファシリテーション技術であるホワイトボード・ミーティング®を活用した英語活動を体験し、ファシリテーションに基づく学習者の立場に立った英語授業の設計と実行を可能にすることである。初等・中等教育における英語教育の現状を知り、児童・生徒が主体的に学ぶことができるファシリテーションによる授業デザインができること、また、教師として英語コミュニケーション力をつけ、習得した知識を模擬授業に活用でき、評価の基礎知識を踏まえた評価をデザインできることを目標とする。</p> <p>本授業では、授業や会議に活用できる効率的、効果的な話し合いの技法であり、ファシリテーション技術の一つである「ホワイトボード・ミーティング®」の進行技術を学ぶ。さらに、その技術に基づき、学習者の主体的な話し合いが具現化されるファシリテーション技術に基づく英語の授業のデザインの仕方を学ぶ。</p> <p>(12 大場 浩正)</p> <p>各回の授業において、メインティーチャーとして、英語指導におけるファシリテーション技術およびその模擬授業への応用の仕方と模擬授業を指導する。また、学生の議論のファシリテーターとして統括する。</p> <p>(117 渡邊 政寿) (97 瀧澤 典子)</p> <p>各回の授業において、サブティーチャーとして、授業内容の補足、および学生の議論の補助として支援する。</p>	<p>共同</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
英語科教材分析の理論と実践	<p>教材分析に必要と思われる応用言語学理論を習得するとともに、実際の英語教材の分析・評価に習熟し、英語教員としての教科指導力を高めることを目標とする。テキストの講読を通して外国語における言語理解の理論について見識を深めつつ、実際の英語教材やそれに付されたタスクを分類・分析し、教材のもつ効果について議論する。また、各自が選択した教材（文章教材や音声教材など）を活用して模擬授業を行う。学生ひとりひとりが主体的に学び、理解や考えを深めることができるようにするため、学生同士での対話活動をほぼ毎回の授業で取り入れる（アクティブ・ラーニング）。</p> <p>(79 長谷川 佑介)</p> <p>主担当として、文字言語の理解と産出という観点から専門的指導を行い、全15回の講義・演習・討議・評価を統括する。</p> <p>(98 橋本 大樹)</p> <p>副担当として、音声言語の理解と産出という観点から専門的指導を行い、特に第9～11回における授業の補足および支援を行う。</p>	<p>共同</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
社会系教科内容学（地理）A	<p>地域によって様々に変化する環境に対して、その特徴を読み取り、分析し、考えるための力を身につけ、さらにそれを教材として活用する力を身につけることを目的とする。</p> <p>自然環境および自然と人間の相互関係の捉え方について考え、その教材化について考察する。具体的な近傍の地域をいくつか事例にあげ、それぞれの地域について自然環境の特徴を確認し、その生成メカニズムや人間生活との関わりについて検討する。取り上げた地域への巡検も行う。実際に現地を対象を見て、自然と人間との関わりについて考え、地理的な見方・考え方について検討する。さらに実際に調査した内容をもとに教材化を行う作業を通して、地域の自然環境を教材化する力を身につける。</p>	
社会系教科内容学（地理）B	<p>地理学の基本的な考え方である地域的観点について理解を深めるとともに、具体的な事例をもとに理解を深める。また、受講者自らが統計情報とGIS（地理情報システム）を用いた簡便な地域分析ができるようになることを目標とする。</p> <p>本授業では、主として農業と漁業を対象として、地理学の基本的な考え方である地域的観点を通して理解を深めることを目的として、「地域の見方・考え方」や「農業と地域」「漁業と地域」に関して授業を行う。</p>	
社会系教科内容学（地理）C	<p>地理学の一分野である地誌学的な見方や考え方を学び、地域を総合的に理解する力を養う。さらにそれらを教育現場で活用する力を身につけることを目標とする。</p> <p>地域とはなにかという問いに対して地誌学からアプローチする観点を提示することを通して、受講生が地誌学的な見方や考え方を学び、地誌学に特徴的な地域を総合的に理解する力を身につける。また、特定の地域を対象にテーマを設定して、観察、資料収集、聞き取りなどの地域調査を行い、地図化、地域の特徴の分析、空間的思考を深め、成果について全体でディスカッションして最終的にレポートを作成する。この一連の活動を通して、学校現場で教材開発を行う際のポイントを理解し、教材として活用する力を身につける。</p>	
地域研究フィールドワーク	<p>県内あるいは隣接県の特定地域を設定し、教室内での調査方法の検討および各班による事前調査を行ったのち、現地において2泊3日の調査活動を行う。実際の調査活動を行うことによって、地域調査の方法を習得するとともに、地理的な見方・考え方を身につける。その成果を報告書にまとめることによって地域調査の内容や実際の授業への活かし方について理解する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(52 山縣 耕太郎／2回) (77 橋本 暁子／2回)</p> <p>第1回では本講義の導入に関して授業を行い、第15回には総括に関して授業を行う。</p> <p>(52 山縣 耕太郎／6回)</p> <p>地域における自然地理的特徴、地形的特徴、気候的特徴、水文的特徴、水利用の特徴、災害の捉え方について授業を行う。</p> <p>(77 橋本 暁子／7回)</p> <p>地域における人文地理的特徴、歴史的特徴、文化的特徴、農業における特徴、土地利用における特徴、商業における特徴、伝統的産業における特徴の捉え方について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p>

社会系教科内容学（歴史）A	<p>前近代日本社会の新しい捉え方とその教え方の基礎と活用をテーマとし、「歴史総合」をふまえた、これからの時代に必要な日本前近代史を研究動向をふまえて学問的に理解し、教員としてそれを活用するための基礎的力量と素養を身に付けることをテーマとする。</p> <p>日本前近代社会に関して、研究動向は大きく変化し、これまでの歴史教育内容の「前提」それ自体が大きく変化せざるをえなくなっている。また、近代、とりわけ20世紀から現代へのつながりを重視した「歴史総合」のもとでの日本前近代史理解は、小中学校であっても無視することはできない。これからの時代に必要とされる日本前近代社会把握には、どのようなアカデミックな力量と素養が基礎として必要なか、講義に加え、参加者との討議やグループワークを行う。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （1 畔上 直樹／7回）</p> <p>日本史教科書記述の変遷と歴史研究について授業を行い、日本前近代研究の近年の成果から日本史教科書を検討する。 （28 下里 俊行／8回）</p> <p>前近代日本とグローバル・ヒストリーに関する総説、東アジア世界からみた前近代日本、世界のなかの前近代日本について授業を行う。</p>	オムニバス方式
社会系教科内容学（歴史）B	<p>戦前日本社会の新しい捉え方とその教え方の基礎と活用をテーマとして、これからの時代の日本近現代史を研究動向をふまえて学問的に理解し、教員としてそれを活用するための基礎的力量と素養を身に付けることを目標とする。</p> <p>戦前日本社会をどのようにとらえたらよいか。研究動向は大きく変化し、これまでの歴史教育内容の「前提」それ自体が大きく変化せざるをえなくなっている。また、近代、とりわけ20世紀から現代へのつながりを重視した「歴史総合」を念頭においた日本近現代史理解は、小中学校であっても無視することはできない。では、これからの時代の日本近現代史に対応していくには、どのようなアカデミックな力量と素養が基礎として必要なか、参加者との討議をふまえて講義する。</p>	
社会系教科内容学（歴史）C	<p>社会系教科内容（歴史）として世界史・グローバルヒストリ分野での最新の研究成果の習得をテーマとする。</p> <p>社会系教科内容（歴史）としての世界史・グローバルヒストリーに関する文献の読解を中心にアクティブ・ラーニングの方法で発表・討論を中心に構成する。受講者一人ひとりの自立した研究・調査能力の向上とともに、歴史学説史および世界史・グローバルヒストリーと世界史教育との連携、世界史教育の課題を幅広い視点から理解することを目標とする。</p>	
社会系教科内容学（公民）A	<p>小学校・中学校・高等学校における社会科等の教育活動を念頭に、その前提となっている法律学の基礎的知識を確認するとともに、受講生の関心を基に法律学的学術テーマと関連する社会科教育的テーマに関する知識や技能を習得することを目標とする。</p> <p>法律学研究に関する文献・論文の輪読を中心に演習形式で発表・討論をおこなう。受講者の主体的参加による研究・調査能力の向上を図りつつ、法律学研究と社会科教育等の学校教育との関連について理解を深め、その理解を学校教育に応用するための能力の基盤形成を図る。</p>	
社会系教科内容学（公民）B	<p>小学校・中学校・高等学校における社会科等の教育活動を念頭に、その前提となっている政治学の基礎的知識を確認するとともに、受講生の関心を基に政治学的テーマと関連する社会科教育的テーマに関する知識や技能を習得することを目標とする。</p> <p>政治学に関する文献・論文の輪読を中心に演習形式で発表・討論をおこなう。受講者の主体的参加による研究・調査能力の向上を図りつつ、政治学研究と社会科教育等の学校教育との関連について理解を深め、その理解を学校教育に応用するための能力の基盤形成を図る。</p>	
社会系教科内容学（公民）C	<p>小学校社会・中学校社会・高校公民等を念頭に、その前提となっている社会学的基礎知識を、社会問題等に関する社会学的研究文献の講義を通じて確認することを通じて、現代世界と日本社会のさまざまな領域や文化、それらの社会現象についての理解を得るとともに、社会調査法の知識と動向、方法論を身につけることを目標とする。</p> <p>社会学における社会調査法の種類や手法の基礎について理解した上で、現代世界と日本社会におけるさまざまな社会現象・社会問題についての社会学的調査に基づいた社会学の研究文献を読み進める。各回の担当を決め、レジュメを作成して報告し、ディスカッションを行う。各論文で扱われている社会現象・社会問題と、それを取り巻く歴史的経緯、時代背景、社会状況、社会集団などについて理解を深めるとともに、そのような対象を研究する際の社会調査の方法論や特性について学び、それを学校教育に応用するための能力の基盤形成を行う。</p> <p>（22 小島 伸之）</p> <p>前半7回は、メンティーチャーとして社会学の基礎及び文化社会学的な知見について学校教育実践とも関連付けながら指導を行う。後半8回は、サブティーチャーとして院生の議論のファシリテーターを担当する。 （72 塚田 穂高）</p> <p>前半7回は、サブティーチャーとして、院生の議論のファシリテーターを担当する。後半8回の授業でメンティーチャーとして、宗教社会学及び教育社会学的な知見について学校教育実践とも関連付けながら指導を行う。</p>	共同
社会系教科内容学（公民）D	<p>現代の経済社会を見る上で基礎的な概念をふりかえると同時に、それをゲーミングという手法を用いて学ぶ方法を学習する。</p> <p>講義前半は、経済的概念に関して「経済学の歴史」「分配」「再生産と価値」「生存」「政府」「効用」「企業」「失業」等について文献を基に議論を行う。その後、経済的概念を学ぶ既存のゲーミングを行いディスカッションを行う。最後に、各自のゲーミング案の中間報告を行った後、完成版を最終レポートとして提出する。</p>	

社会系教科内容学（公民）E	社会系教科内容（公民）としての倫理学・応用倫理学の分野での最新の研究成果の習得をテーマとする。 社会系教科内容（公民）としての倫理学・応用倫理学に関する最新の研究文献の読解を中心にアクティブ・ラーニングの方法で受講者による発表・討論をおこなう。受講者一人ひとりの自立した研究・調査能力の向上とともに、倫理学説史および応用倫理学と倫理教育との連携、倫理教育の課題を幅広い視点から理解し、具体的には、人新世の時代に対応した持続可能な自然環境の重要性、生物学・文化・ライフスタイルの面でのダイバーシティの重要性について存在論と価値論の両面から考察することを目的とする。	
社会系教科内容学（公民）F	中学校社会・高校地歴公民等や教育現場における「宗教」の取り扱いを念頭に、現代世界と日本社会のさまざまな宗教文化の歴史や現状、諸問題（特に「宗教と教育」）を論じた研究文献の講読を通じて、それらについての理解を得るとともに、宗教教育と研究の方法論を身につけることを目標とする。 現代世界と近現代日本社会における宗教文化・思想・運動・問題等（特に「宗教と教育」）を扱った研究文献を毎週読み進めていく。各回の担当者を決め、担当者がレジュメを作成して報告し、ディスカッションを行う。各論文で扱われている宗教現象や問題と、それを取り巻く歴史的経緯、時代背景、社会状況、社会集団などについて理解を深めるとともに、そのような対象を研究する際の方法論や視座について学び、各自の研究と教育の取り組みを深めるための基盤形成を行う。	
社会科・地理歴史科教育課程の理論と実際	社会科教育・地理教育・歴史教育の教育課程について歴史と国際比較を基軸に総合的に認識することを通し、社会科教育・地理歴史科教育の本質を理解すること、社会科教育・地理教育・歴史教育の課題を解明していく理論的・実践的研究能力を培うことを目標とする。 前半は日本の社会系地理教育課程の歴史の変遷及び海外で相当する教育課程を、後半は日本の社会系歴史教育課程の変遷及び海外で相当する教育課程を通史的・国際的に考察する。これを通して、社会科・地理歴史科教育課程に関する理論と実際並びに教育課程に関する課題とその解決について理解する。 （オムニバス方式／全15回） （27 志村 喬／1回）（8 茨木 智志／1回） 本授業の目標と社会系教科教育理論・実践における位置づけについて授業を行う。 （27 志村 喬／7回） 社会科・地理教育の教育課程と教科教育論、社会科・地理教育課程の比較検討について授業を行う。 （8 茨木 智志／7回） 社会科・歴史教育の教育課程と教科教育論、社会科・歴史教育課程の比較検討について授業を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
社会科・公民科教育課程の理論と実際	社会科教育・公民科教育の本質を理解し、社会科教育・公民科教育の現状を総合的に認識する。さらに、社会科教育・公民科教育の課題を解明する理論的・実践的研究能力を培うことを目標とする。 本授業では、日本の社会科教育・公民科教育の土台となる歴史的な理論や実践を考察する。さらに、トピックに応じた理論と実践、学習方法について考察する。加えて、諸外国における社会系・公民系教育について社会系教科教育学の成果から理解する。	
社会系授業づくりの理論と実践	社会系（社会科・地理歴史科・公民科）授業づくりの基本を確認した上で、社会系授業のあり方を考察することを通じて、その理論と実践の課題を解決していく社会系授業構築の能力を培うことを目標とする。 社会系授業づくりに関わる社会系教科教育学の基本的な考え方を踏まえ、知識理解型、思考力・技能育成型、態度形成型等の各種の授業づくりについて地理授業、歴史授業、公民授業の各観点からの理論と実践に対する批判的検討を進めていき、最後にそれらを総合的に考察する。 （オムニバス方式／全15回） （27 志村 喬／3回）（8 茨木 智志／3回）（75 中平 一義／3回） 社会系授業づくりに関わる社会系教科教育学の系譜、総合討論と各自の考察について授業を行う。 （27 志村 喬／4回） 社会系地理授業づくりの理論と実践の課題、知識理解型、思考力・技能育成型、態度形成型社会系地理授業づくりの理論と実践について授業を行う。 （8 茨木 智志／4回） 社会系歴史授業づくりの理論と実践の課題、知識理解型、思考力・技能育成型、態度形成型社会系歴史授業づくりの理論と実践について授業を行う。 （75 中平 一義／4回） 社会系公民授業づくりの理論と実践の課題、知識理解型、思考力・技能育成型、態度形成型社会系公民授業づくりの理論と実践について授業を行う。	オムニバス方式・共同（一部） 講義 14時間 演習 16時間

<p>社会系授業実践における評価と授業分析</p>	<p>社会系（社会科・地理歴史科・公民科）授業で育成すべき資質・能力を確認した上で、評価と授業分析の理論と実際について理解することで、社会系授業を省察し改善する実践的研究能力を培うことを目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （27 志村 喬／7回）（8 茨木 智志／7回）（75 中平 一義／7回） 本授業の目的と社会系教科教育理論・実践における位置づけ並びに実践的研究、社会系授業実践における評価手法及び評価論、社会系授業の分析方法、社会系授業の目的からみた評価と授業の関連、総合討論について授業を行う。 （27 志村 喬／3回） 社会系授業で育成すべき資質・能力、社会系授業実践における評価の実際（地理的授業を主事例）、社会系事例授業の分析（地理的授業を主事例）について授業を行う。 （8 茨木 智志／1回）（75 中平 一義／1回） 社会系授業で育成すべき資質・能力に関して、技能的・態度的側面を主に取り扱い、授業を行う。 （8 茨木 智志／2回） 社会系授業実践における評価の実際（歴史的授業を主事例）、社会系事例授業の分析（歴史的授業を主事例）について授業を行う。 （75 中平 一義／2回） 社会系授業実践における評価の実際（公民的授業を主事例）、社会系事例授業の分析（公民的授業を主事例）について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部） 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>主権者・シティズンシップ教育の理論と実践</p>	<p>社会系教育実践の現代的課題である主権者・シティズンシップ教育について、その概念や理論、実践の背景を考察し理解する。さらに、地理教育、歴史教育、公民教育のそれぞれの側面から主権者・シティズンシップ教育の理論と実践について理解し、実践的研究能力を培うことを目標とする。社会系教育実践の現代的課題である主権者・シティズンシップ教育について、その理論と実践を考察するとともに、諸外国の理論研究・実践事例や、地理教育、歴史教育、公民教育のそれぞれの側面から理論と実践について構想する。 （オムニバス方式／全15回） （75 中平 一義／2回）（8 茨木 智志／2回）（27 志村 喬／2回） 第1回には主権者・シティズンシップ教育の現代的要請の把握、第15回には総合討論・考察・まとめに関する授業を行う。 （75 中平 一義／5回） 主権者・シティズンシップ教育の現代的課題の把握、アメリカ合衆国におけるシティズンシップ教育、公民教育と主権者・シティズンシップ教育の理論と実践について授業を行う。 （8 茨木 智志／4回） 主権者・シティズンシップ教育の定義についての歴史的考察、歴史教育と主権者・シティズンシップ教育の理論と実践について授業を行う。 （27 志村 喬／4回） イギリスにおけるシティズンシップ教育、地理教育と主権者・シティズンシップ教育の理論と実践について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部） 講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
<p>社会系教育総合演習Ⅰ</p>	<p>受講者のこれまでの教育実践・被教育体験に基づく問題意識を、社会科教育学・社会系教科内容構成学の理論的及び実践的枠組みに主体的に定位することを通し、先進的で高度な教科指導力を備えた教員に必要な研究構想力を培うことを目標とする。 社会系教育分野における教師のプロフェッショナル性について、自身の教育実践・被教育体験に基づく問題意識をふまえつつ、社会科教育学・社会系教科内容構成学の研究成果から考察する。この考察を通し、問題意識を先行関連研究に位置づけた研究構想を構築し発表する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>社会系教育総合演習Ⅱ</p>	<p>研究構想から研究計画を策定し、社会系教育分野におけるプロフェッショナル性を高める研究として遂行することを通し、先進的で高度な教科指導力を備えた教員に必要な研究遂行力を培うことを目標とする。 社会系教育総合演習Ⅰで構築した各自の研究構想を、これまでの学修内容から省察し、社会系教育分野におけるプロフェッショナル性を高める主体的な研究計画を策定する。さらに、遂行した研究の内容を、中間発表として報告し討議する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>社会系教育総合演習Ⅲ</p>	<p>1年目の研究内容を、社会系教育分野におけるプロフェッショナル性を高める研究として再考・遂行することを通し、先進的で高度な教科指導力を備えた教員に必要な研究遂行力をさらに培うことを目標とする。 1年目の社会系教育総合演習の研究を、これまでの理論的・実践的学修内容から省察し、必要な修正を加えた上で、社会系教育分野におけるプロフェッショナル性をさらに高める主体的な研究計画として確定する。さらに、遂行した研究の内容を、中間発表として報告し討議する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>社会系教育総合演習Ⅳ</p>	<p>社会系教育分野におけるプロフェッショナル性を高めるために主体的に設定し遂行してきた研究内容を、研究成果としてとりまとめ発表することを通し、先進的で高度な教科指導力を備えた教員に必要な研究発信能力を培うことを目標とする。 これまでの社会系教育総合演習の研究内容を、研究成果とりまとめの観点から省察し、成果発信としての研究計画を確定する。確定した計画に沿って、研究内容のとりまとめを行い、成果発表報告・討議する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>教科内容構成「数学」の理論と実践</p>	<p>算数、中学校数学、高等学校数学の教材の数学的背景を幾つかのトピックスに焦点を当てて理解するとともに、それらの数学的背景をもとに新たな教材研究をし、実践的な力量を高めることを目標とする。算数、中学校数学、高等学校数学の教材に、代数学、幾何学、解析学、及び数学の境界領域に係る数学から接近し、更なる教材研究と指導法の検討を行う。 (オムニバス方式/全15回) (32 高橋 等/3回) 関数的図形的考え方の教材化とその実践について授業を行う。 (47 松本 健吾/4回) 高校の微積分に現れる原始関数と不定積分、微分と原始関数、微分積分学の基本定理について授業を行う。 (24 斎藤 敏夫/4回) ユークリッド幾何の公理的構成について授業を行う。 (81 林田 秀一/4回) 代数学の群と背景および応用について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>小中連携算数・数学の教材づくりの理論と実践</p>	<p>各学年層を想定しながら、児童生徒を惹きつける算数・数学の面白い教材の核となる問題づくりの実践的探究活動を行うことで、義務教育9年間を見通して算数・数学を指導できる教師の専門性を高めることを目指す。 (オムニバス方式/全15回) (9 岩崎 浩/4回) 数学的活動の本質的特徴の体験的理解、全国学力・学習状況調査、PISA調査、TIMSS調査など国際調査、国内外の教科書の問題、算数オリンピックや和算(算額)等からの問題づくりの実践例について授業を行う。 (24 斎藤 敏夫/4回) 現代数学を背景とした算数・数学の問題づくりの実践例について授業を行う。 (9 岩崎 浩/7回) (24 斎藤 敏夫/7回) 附属小学校の掲示板「ポプラ算額道場」に掲示する算数の問題を作成することを想定し、講義の内容をより具体的かつ発展させて追究する課題を探究するアクティブ・ラーニングとして展開する。</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部) 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>中高連携数学科の理論と実践</p>	<p>中学校数学科と高等学校数学科との連携に焦点を当て、中学校数学と高校数学とを関連させた教材の数学的背景を理解するとともに、それらの数学的背景をもとに教材研究をし、授業実践を行うための力量を高めることを目標とする。中学校数学と高等学校数学とで関連させた教材に、代数学、幾何学、解析学、統計学及び数学の境界領域に係る数学から接近し、教材研究と指導法開発とを行う。 (オムニバス方式/全15回) (32 高橋 等/7回) 中高数学の関連性と指導法、中高数学の接続のための緩衝教材、数と式、幾何、関数、統計、数学の境界領域の教材研究と指導法開発について授業を行う。 (47 松本 健吾/8回) フィボナッチ数列、カタラン数列、数列の母関数、Bell数、Stirling数について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>算数科・数学科におけるICT活用</p>	<p>算数・数学科の学習を補助・促進するソフトウェアおよびプログラミングの事項を通して、算数・数学科におけるICT活用への理解を深め、ICTを用いた授業への応用力・実践力を高めることを目標とする。前半では数式処理システムや、プログラミング言語によるプログラミングを用いた算数・数学の数値問題の計算法を主に扱い、後半では主に幾何に関するソフトウェアを用いて、図形の問題等を主に扱う。また、これらを通じた算数・数学の授業におけるICTの実践的方法を、アクティブ・ラーニング等を通して学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (81 林田 秀一/8回) 算数・数学学習における計算機とソフトウェア、CUIとディレトリ構造、プログラミング言語とデータ型、プログラミング言語の構文について授業を行う。 (40 布川 和彦/7回) 算数・数学の学習におけるパワーポイントの利用、動的幾何環境の利用、思考過程、プログラミング、関数学習への応用、学習内容の動的幾何環境への翻訳、算数・数学学習におけるICT利用の役割について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>算数・数学科の授業づくりの理論と実践</p>	<p>算数・数学の授業づくりの問題には、教師の指導技術面だけでなく、教育思想面、特に子ども観、教材観、数学指導観などの教師の数学の授業の見方が深く関わっている。本授業では、指導技術面というよりも教育思想面に焦点をあて、受講者が自らの算数・数学の授業実践を評価し、自律的に改善していくために必要となる「授業の見方」をより豊かにし、異なる立場から実践を意味づけることができるようになることを1つの到達目標とする。そして、算数・数学の授業を目的の子どもの反応に応じて、柔軟に修正・展開できる実践力をさらに高めることを目指す。 (オムニバス方式/全15回) (9 岩崎 浩/8回) 算数・数学の授業づくりに影響を及ぼす教師の数学指導の見方、学習者の視点からみた算数・数学の授業、算数・数学の授業における子どもの思考のモデルの構成、構成主義の立場の算数・数学の授業づくりの特徴とその可能性、教師の視点からみた算数・数学の授業について授業を行う。 (40 布川 和彦/5回) グループ別探究を担当し、テーマの設定とグループ活動計画、関連する研究資料等の調査・整理、実践的検討(模擬授業等)の計画と実施、事後検討、授業づくりの提案発表の準備について授業を行う。 (32 高橋 等/2回) 第13回までの授業を踏まえ、グループによる授業づくりの提案発表と討議を担当する。</p>	<p>オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間</p>

<p>教科内容構成（理科）の理論と実践A</p>	<p>理科のエネルギー、物理分野の理解を深めるとともに、実際の教育現場において児童、生徒に情報機器や教材を用いて授業を行う際の留意点や指導法などについて学ぶことをテーマとする。 小学校、中学校および高等学校におけるエネルギー・物理分野の中から、いくつかのトピックスを取りあげて、授業カリキュラムとの関連、背景にある基本的な原理や法則、教材の開発や改良の考え方、情報機器の活用方法について議論する。さらに、各トピックスについて教育現場において生徒や学生に教授する際の留意点や指導法などについて討論する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教科内容構成（理科）の理論と実践B</p>	<p>化学及び化学関連分野の学習と教育に必要な基礎知識および教材などについて、小学校から高等学校で扱われている内容を中心に題材を選び、それらの内容について検討することで、受講者自ら教材研究を深め、教科内容を深く理解し、教材や教育方法を開発し授業の質を高める能力を身につけることを目標とする。各々の題材について、その教育現場での取扱い、実際の授業で取り扱われる内容と教材や課題などについて整理検討する。また関連する授業実践例、教材開発例や、背景となっている専門的な知見についても検討する。新たな教材などの提案とそれについての検討も行う。必要な場合は実験による検討を行う。検討は基本的にアクティブラーニング形式で行い、受講者が主体的に議論検討する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教科内容構成（理科）の理論と実践C</p>	<p>理科・生命領域における科学的思考力の涵養と教育実践力の育成の両立をテーマとする。この領域における既習知識を体系的に捉え直し、理科教師がもつべき「知の基盤」を構築するとともに、討論や教材作成を通じて「科学的思考力」を身につけることを第1の到達目標とする。さらに、授業実践の事例分析や授業展開案の構想、模擬授業の実施を通じて「主体的・対話的で深い学び」につながる授業計画を立案し、実行する力を身につけることを第2の到達目標とする。小・中学校理科（生命領域）の学習単元の中から「生物の体のつくりと働き」、「水中の微生物」、「植物の成長と養分」、「植物の水の通り道」、「領域間の融合」の5テーマを取り上げる。それぞれのテーマについて、講義、事例研究、教材作成、授業案作成、模擬授業、および討論を行い、理科教師を目指す学生と現職教員の資質・能力の向上を図る。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>教科内容構成（理科）の理論と実践D</p>	<p>小学校・中学校・高等学校理科の地球と宇宙に関わる分野について、教科の基礎となる学術研究の成果やそれらが判明した過程、その背景にある自然法則にも注目し、講義、演習・実習、観察などを通して、その内容と実践に関する理解を深めることを目標とする。 小学校・中学校・高等学校理科の地球と宇宙に関わる分野に関して、「地球と天体の動き」「太陽系と恒星」「宇宙の広がり」などについての講義、実習・演習、観察、教材開発や模擬授業などを行う。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>科学的リテラシーのための授業設計論</p>	<p>科学的リテラシーを育てるための授業設計について、その指導法と評価法の理論とそれに対応する実践の手法を理解することや、身近な自然における原体験の理科教育的意義について理解することを目標とする。 到達度評価（=目標に準拠した評価）について、その特徴を学び、評価の時に必要な複数の技能を習得し、学習意欲とのかかわりについて検討する。原体験を基盤とした問題解決の能力を育成したり、自然の事物・現象を変数で捉えさせたりするための指導方法に関する理論と方法について講義（演習・討論を含む）を行う。 （オムニバス方式／全15回） （45 古屋 光一／1回）（89 山田 貴之／1回） 本授業に関する導入を行う。 （45 古屋 光一／7回） 理科の評価の基本的な考え方、日本で用いられてきた4つの評価法の規準設定とそれらの特徴、到達度評価（=目標に準拠した評価）の具体的手法、形成的評価の具体的方法、自己評価法の現在の課題と、これから目指す自己評価、資質・能力の評価について授業を行う。 （89 山田 貴之／7回） 子どもと自然・科学、身近な自然における原体験の理科教育的意義、仮説設定能力を育むための基礎となる原体験と指導方法、The Four Question Strategyに基づく仮説設定と推論の過程、批判的思考とメタ認知的活動を促し検証計画立案力を育成する指導方法、問題解決の過程と日本の理科教育に即した「探究の技能」、実験・観察の探究的特徴と「探究の過程の8の字型モデル」について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部） 講義 14時間 演習 16時間</p>
<p>理科教育課程の理論と実践</p>	<p>日本の学習指導要領（平成29年3月）に基づいて、資質・能力を育む理科の授業の教育課程を作成する。その上で学習指導案を書き、それに基づいて模擬授業を実施する。日本の理科教育における現代的課題、理科学習指導要領の変遷、理科のカリキュラム論と学習論、科学の方法を構成する要素について講義（演習・討論を含む）を行う。 （オムニバス方式／全15回） （45 古屋 光一／1回）（89 山田 貴之／1回） 本授業に関する導入を行う。 （45 古屋 光一／7回） 理科の授業設計における三つのキーワードとその特徴について授業を行い、教育課程の簡略版の作成や学習指導案の作成、学習指導案の発表会、模擬授業の活動を行う。また、コンピテンシー・ベースの特徴と他国の実践の検討、コンピテンシーを越える実践の検討について授業を行う。 （89 山田 貴之／7回） 日本の理科教育における現代的課題、現代科学論と理科の目標論、理科学習指導要領の変遷、理科のカリキュラム論、理科の学習論、科学の方法を構成する要素、理科の授業方法論について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部） 講義 14時間 演習 16時間</p>

自然環境学習の理論と実践	理科や総合的な学習の時間などにおいて、身近な地域を対象とした自然環境学習を展開する場合に、指導者が素材となりうる事象について基礎的な知識を持つことは、指導の幅を広げ学習に深みを持たせる上で必要となる条件の一つである。この授業では、地域における自然環境学習を里山、川、海岸に注目して展開する場合に、素材となりうる事象について具体例を上げて講義し、素材理解の視点と、その基礎となる科学的な考え方を理解した上で、里山、川、海岸を対象とした自然環境学習の授業案を作成、協議、検討することによって、自然環境学習の指導に必要な知識と技能を習得することを目標とする。 上越地域の里山、川、海岸を対象とした自然環境学習の授業案作成と検討を行う演習である。授業案作成前に、まず実際に自ら各対象地における自然環境学習素材の理解を深めるための野外演習を行い、実感を伴った授業構想ができるように支援する。	講義 14時間 演習 16時間
理科授業の理論と実践 (野外観察)	動物生態学の理論を基礎とし、自然豊かな上越教育大学を野外観察の場所とする。小学校第3学年理科の昆虫の体のつくりから中学校第3学年の生物の環境の各単元で野外観察が必要な内容をテーマとし、講義と野外での演習を通して、野外観察に秀でた教師の育成を到達目標とする。 動物生態学の基礎である形態、環境、季節、食性、生態、進化、生態系、環境保全の理論を学ぶとともに上越教育大学の校舎内、構内にある川、湿地、池、草地、裸地、二次林を野外観察と場とする。動物の生態に関してビデオやICTを用いた講義を行うとともに、今まで開発した教材を活用する。演習では実際に野外に出て、学生が自ら動物の採集、飼育と観察を通して野外観察の基本を学ぶ。	講義 14時間 演習 16時間
教科内容構成「情報」の理論と実践	教科専門科目としての「情報」の教科内容と教職科目としての情報科指導法とを架橋する。情報学、および、それに関連する科学、技術、工学、芸術、数学、等における原理と教育課程編成の原理をもとに、児童・生徒の発達をふまえつつ、「情報」の現代的課題に応えられる教育課程編成の理論と実際を習得することを目標とする。 (オムニバス方式/全15回) (7 井上 久祥/3回) (67 高野 浩志/3回) (58 石川 真/3回) 「情報とは、情報学とは、情報教育とは、教育の情報化とは」をテーマとして授業を行う。 (7 井上 久祥/4回) 情報産業と社会、課題研究、情報実習に関わる教科内容と実践、データベースや情報デザインに関わる教科内容と実践、高等学校情報科の学習論について授業を行う。 (67 高野 浩志/4回) 情報テクノロジーに関わる教科内容と実践、情報システムのプログラムに関わる教科内容と実践、ネットワークシステムに関わる教科内容と実践、高等学校情報科の教材論について授業を行う。 (58 石川 真/4回) 情報セキュリティに関わる教科内容と実践、コンテンツの制作と発信に関わる教科内容と実践、メディアとサービスに関わる教科内容と実践、高等学校情報科の授業論について授業を行う。	オムニバス方式・共同 (一部)
プログラミング教育におけるICT活用	小学校や中学校におけるプログラミング教育において、さまざまなICT(スクラッチ、ビジュアル、プログル、その他のアプリ、およびロボットなど)が使われる。それらを活用できるスキルを身に付けることをテーマとする。 スクラッチ(MITが開発した小学生用のゲーム開発環境)、ビジュアルプログラミングアプリ) プログル(WEBで公開されている、プログラミング教育の教材)、マインドストーム(レゴブロックで作るロボット教材)などに関する演習を行い、使い方を習得し、それらをどう小学校および中学校の授業で活用するか、その実践をイメージできるようにすることが目標である。	
情報・コミュニケーションの理論と実践	情報教育や教育の情報化に関して理解を深める。その上で、教師として情報通信ネットワークを活用した授業を実践できるようになること、および関連するICT活用指導力を高めることを目的とする。 情報教育(教科情報を含む)の内容に関して、「クラウドサービスの利用」や「情報モラル教育と動画コンテンツの利用」等について、「講義」を通して理解を深め、主体的・対話的で深い学びによる「演習」を通して、ICT活用による授業実践への活用について洞察・検討する。	講義 14時間 演習 16時間
教育工学の理論と実践	学習臨床に関わる教育工学や情報学の理論や概念を明確し、実践に対して意味づけや解明が行えること、及び教育工学や情報学に関する資料を読解して、先端的な取り組みの現状を把握すること、及び実践授業をビデオで視聴し、学習臨床における教育工学・情報学の実践についてイメージを形成することを目標とする。 教育工学及び情報学の立場から、学習臨床における教師の教えと子どもの学びについての「設計」「実施」「評価」の実際について、アクティブラーニングを通して学ぶ。これにより、教育工学と情報学について客観的・理論的側面から学ぶだけでなく、主観的・経験的側面からも課題を考え、実践に適用可能なものとしていく。	講義 14時間 演習 16時間

<p>教科内容構成「音楽」の理論と実践</p>	<p>音楽科の主要な領域から実際の授業場面を取り上げ、学問領域としての音楽ないし音楽学の知見がどのように機能しているか、また、実りある授業を展開するために必要な音楽ないし音楽学的知見とはどのようなものであるか検討する。さらに、音楽という営みそのものが人間にとって持つ意味を考え、本質論のレベルから、現代社会に期待される音楽教育のあり方、音楽家としての音楽教員のあり方を考究するとともに、教科としての「音楽」の内容をどのように構成していくか、その原理とあるべき体系のありようを考案する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (2 阿部 亮太郎/2回) (71 玉村 恭/2回) (43 平野 俊介/2回) (35 時得 紀子/2回) (10 上野 正人/2回) (60 尾崎 祐司/2回) (78 長谷川 正規/2回)</p> <p>音楽および音楽学と音楽科、その原理と体系について授業を行う。 (2 阿部 亮太郎/2回)</p> <p>音を出す(楽器を奏でる、声を出す)という行為、「音」が「音楽」になること、それが人間にとって持つ意味について授業を行う。 (43 平野 俊介/1回)</p> <p>器楽表現の起源と展開について授業を行う。 (78 長谷川 正規/2回)</p> <p>道具としての楽器、表現としての演奏、音を合わせるということについて授業を行う。 (10 上野 正人/2回)</p> <p>「発話から歌へ、歌から歌唱へ」、「世界中で「合唱」が行われているのはなぜか」をテーマとして授業を行う。 (71 玉村 恭/2回)</p> <p>音楽史：音楽における「歴史」の意義、伝統文化と異文化：他者の文化を体験するという点について授業を行う。 (35 時得 紀子/2回)</p> <p>音楽メディアとしての身体、世界の音楽教育について授業を行う。 (60 尾崎 祐司/2回)</p> <p>音楽科教育の理念と現状、多様な児童生徒への対応について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部)</p>
<p>声楽の理論と実践Ⅰ(独唱)</p>	<p>学校教育音楽科の重要な領域である歌唱について、学習指導要領を通して求められる指導の観点及び演奏技術を、自らの経験を通して体得することを目標とするとともに、各個人の歌唱の技能及び表現力の向上を目標とする。</p> <p>学校教育音楽科において歌唱は、その一角をなす重要な領域である。本授業では、学習指導要領の分析・考察を通して求められる指導内容について明らかにするとともに、歌曲作品、オペラ、オラトリオ作品などからそれぞれの技量に即した楽曲を選択し、履修することで自らの経験を通して学ぶ。授業は、主として個人レッスンの形態で行うが、初回は、全員で行う。</p>	
<p>声楽の理論と実践Ⅱ(アンサンブルを含む)</p>	<p>学校教育音楽科において求められる歌唱に関する技能のうち「声を合わせて歌う技能」(小学校)について、演奏を通して、アンサンブルの楽しさや美しさを味わいながら、その技能の習得及び指導法の習得を目指す。</p> <p>本授業では、主に、W.A.モーツァルトのオペラ作品の中にも含まれる様々な重唱楽曲を取り扱い、詩と音楽の関係性に視点を置いた楽曲分析法等について学ぶとともに、楽曲に関する実技指導や、演奏会形式上演の舞台所作に関する指導を行う。</p>	
<p>声楽の理論と実践Ⅲ(合唱)</p>	<p>学校教育音楽科における合唱は、音楽科の内容であるだけでなく、学校行事としての重要な側面を持っている。この合唱の指導するにあたって必要な実践能力である、発声法・発音法・歌唱表現法・指揮法・伴奏法等及び学校音楽コンクール運営に関わる運営の方法を理論と実践の両面から体得し、自らの学習を通して歌唱力のみならず指導力をも養うことを目標として、混声3部合唱曲、あるいは混声4部合唱曲を用いて、授業を行い、発声法に関する理論と実践を学ぶ。</p>	
<p>音楽劇の理論と実践</p>	<p>学校教育の音楽教科としてのみならず学校行事としても重要な事業の一つである音楽劇について、一つの舞台を完成させていく過程を通して、表現する喜びや他者と協働しながら新たな価値を生み出していく能力を育成するための指導方法を、その理論と実践を通して習得することを目標とする。</p> <p>授業は、林光作曲《あまんじゃくとうりこひめ》の上演を通して、音楽劇上演に必要な諸要素など舞台制作のための知識や、発声法、演技術など実技的要素を、身体訓練や舞台稽古など実技を中心とした授業形態の中で学び、最終回に成果の発表として音楽劇公演を行う。</p>	
<p>ピアノの理論と実践Ⅰ(独奏)</p>	<p>音楽科の授業で必要とされるピアノ技能、その中でも特に歌唱教材のピアノ伴奏等に適應できる演奏力の習得に向けて、個別指導の形態で個々の受講者のレベルに即して課題と目標を設定する。独奏曲を中心とした課題に取り組むことで、総合的なピアノの演奏技能の向上を目指す。必要な場合はピアノ伴奏課題も取り上げる。初回のガイダンスで学びたい内容と楽曲について、受講生と検討して、第2回から14回では課題に取り組むことで基本的なタッチや音色の変化、ペダリング、作品に相応しい様式感と表現法などを取り上げて、探究していく。最後には習得した成果を演奏発表する。</p>	
<p>ピアノの理論と実践Ⅱ(アンサンブルを含む)</p>	<p>授業目標は、「ピアノの理論と実践Ⅰ(独奏)」と同様に音楽科の授業で必要とされるピアノ技能の一層の向上であり、Ⅰで取り組んだ内容をさらに発展させて独奏とアンサンブルでの演奏表現力の熟達を目指す。授業はレッスン形態で行うが、独奏曲以外に連弾や2台ピアノによるアンサンブル作品、声楽曲や器楽曲のピアノ伴奏を課題とすることで高度なアンサンブル力の育成を視野に入れることもできる。初回のガイダンスでは学びたい内容と楽曲を受講生と検討して次回以降の課題を設定し、最終回には習得した成果を演奏発表する。</p>	

管楽器初期教育の理論と実践	<p>未経験または経験の少ない管楽器に取り組み、楽器に関する素養を身に付けるとともに、教材や指導のあり方について深く学ぶことをテーマとする。</p> <p>各自が選択した管楽器について、その取り扱い、奏法、特徴および歴史などについて各自資料を収集しまとめる。さらに基礎的な奏法を身に付け、簡単な旋律を演奏できるようになると同時に、特に初期教育の視点から教材や指導の方法について考察し、発表を行う。なお、可能な楽器は履修者同士で学びあいながら進めることを推奨する。</p>	
器楽アンサンブルの理論と実践	<p>器楽による水準の高いアンサンブルを通して、重奏や合奏の本質および教育的意義について深く考察することをテーマとする。</p> <p>ボディーパーカッション、打楽器によるアンサンブル、リコーダーアンサンブルを行ったのち、可能な限り履修者の得意とする楽器を用いたアンサンブルに取り組み。それぞれの実践を行いながら、アンサンブルにおいて「演奏者はどのような思考をしているか」「そのために必要となる準備や技能は何か」を整理し、器楽アンサンブルの教育的意義を考察する。</p>	
合奏教材作成の理論と実践	<p>様々な楽器の特徴や演奏者の能力を活かした楽譜を作成して合奏を行い、教育現場で児童・生徒や学校の実態に合わせた教材を作成・指導する能力を養うことを目標とする。</p> <p>基本的に、履修者の演奏可能な楽器により合奏を行う。楽譜は編成、奏者の能力に合わせて履修者が輪番で作成する。実際に合奏を行ってみて、演奏効果や教材としての有効性を検討するとともに、各楽器やその組み合わせの特性について学ぶ。さらに、学部授業である合奏Ⅰで使用する楽譜も作成することで、より実践的な合奏教材作成の能力を養う。</p>	
指揮の理論と実践	<p>音楽の教員と指揮法の相互の関係性について考察する。そのうえで実際の作品を音楽的意図とともに指揮できるようになることを目標とする。</p> <p>いくつかの管弦楽作品や合唱作品を題材に、楽曲について研究すべきことや実際の合奏における諸問題について検討する。実践は基本的にピアノ1台または2台に向かって指揮する形式で進めるが、可能な場合は管弦打楽器を加える。この場合は履修者も可能なパートで演奏に参加して、他の履修者の指揮や練習を体感する。</p>	
伝統音楽教育の現状と課題	<p>学校教育における伝統文化教育の現状を踏まえ、これからの学校教育に必要な日本の伝統文化（音楽）の知識と技術は何かを考えると同時に、実際の伝統音楽授業の実施に向けて必要な知識と技能の習得を行う。日本の伝統芸能の代表である「能」、および郷土の民俗芸能を通じて、表現と鑑賞の両面からのアプローチにより、日本音楽（および日本文化）の特質について理解と認識を深める。</p> <p>能・文楽・歌舞伎等のいわゆる古典芸能を中心に、学校教育における伝統音楽教育の現状を確認する。伝統芸能の中で最も取り上げられることの多いもの一つ、能に注目し、その音楽的特質（楽器編成や音楽構成）について、いくつかの要素に切り分け実習を交えた検討を行う。また、今後学校と地域をつなぐものとしての役割が期待される民俗芸能について、教材性を考えると同時に、授業での実施を見据えた実技演習（体験・習得）を行う。</p>	
音楽鑑賞の哲学	<p>音楽科における「鑑賞」授業の実態と課題を踏まえ、今後の鑑賞教育のあり方について、古今東西の哲学的・美学的理論研究の成果を踏まえつつ考える。「鑑賞」は芸術論の歴史の中で重要な位置を占めてきた概念であり、社会状況の変化に対応してアップデートし続けている。その概念的深化の動向を押さえるとともに、その成果を現在の音楽鑑賞教育に反映させる可能性と具体的な方途を検討する。所期するところは、鑑賞授業の質の向上である。</p> <p>芸術および芸術論の歴史における鑑賞の位置づけを振り返るとともに、現代の授業事例をも検討し、今後の鑑賞教育の方向性を検討する。次に、鑑賞に関する古典的理論に関して、現代におけるその理論的なインパクトについて討論する。それを踏まえて、実際の鑑賞指導の場面を想定した実施案を策定し、受講者同士での試行を行うことで、質の高い鑑賞教育とは何か、どのような手立てが有効か見通しを得るとともに理解を深める。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
音楽（学）研究の基礎理論	<p>音楽および音楽文化について、論理的に思考する力を身につける。授業をはじめとする各種教育活動を理論的に捉え返し、その結果を理論化するとともに、理論化したものをまた実践へフィードバックするという営為を集中的に行うことで、実践と並行して研究を行い、研究に実質を伴わせる／実質を伴った研究を行うという、音楽（学）研究の本質を習得することを目標とする。</p> <p>本授業では、音楽（学）研究の基本的な方法と作法を習得する。音楽学の文献（研究書、研究論文）に接するとともに、各々の授業実践や指導事例を音楽学的視点から振り返り、その理論的な位置と価値を見定める。関連する研究の知見を盛り込み、教育実践の深化をはかる。</p>	
和楽器教材研究	<p>和楽器を用いた授業実践の現状と課題を確認し、音楽科における伝統文化教育の今後の方向性を検討するとともに、和楽器を用いた授業を行うために必要な専門的知識と技能を習得する。実際に楽器を手にとって音を出し、作品に取り組んだり、楽曲を選定したりする経験を通じて、日本の伝統的な文化に対する理解を深め、授業に応用する力を養うことを目標とする。</p> <p>和楽器を一種類ないし二種類選択し、その楽器について分析と実演を交えた演習を行う。将来的に教材化することを見据えて、演習楽曲の選定を行う。教育現場の現状に鑑み、履修者が未経験の楽器、もしくは経験の浅い楽器を取り上げ、基礎的な知識・技能の習得を目指す。</p>	

諸外国の音楽・諸民族の音楽教材研究	<p>近年学校音楽教育で重視されている異文化理解・多文化教育について、諸外国の音楽・諸民族の音楽の実践を通じて考える。学校教育における異文化理解・多文化教育の現状と課題について理解するとともに、今後の異文化理解・多文化教育をどう進めていくか、個々の教員に何ができるか、教科の枠組みの中で各々がすべきことは何かを、臨時的・実践的に演習を行いつつ、具体的な手立てを考えることをテーマとする。</p> <p>学校教育における異文化理解・多文化教育の現状と課題を確認し、諸外国・諸民族の音楽の実習（インドネシアの古典音楽であるガムランを重点的に取り上げる）を通じて実技を含めた基礎的な知識・技能の習得を行う。同時に、諸外国・諸民族の音楽を題材にしたレクチャーや教育・普及活動を企画・立案・実施する。これらの活動を通して、多文化社会における国際理解・多文化教育のあり方について考えを深め、今後の授業運営の方向性を考える。</p>	
音楽教育研究法	<p>音楽科の授業を研究対象とした論文作成の論旨の展開、データ分析の方法を身に付けることを目標とする。講義内容は、フィールドワークや先行研究等から研究仮説となる理論の生成、そして実践による検証や考察から結論をまとめる方法について講義する。特に、実践研究のテーマ設定、先行研究の収集、参考文献や引用文献などの利用について、学校教育の理論と実践との往還を目指す教育実践学の方法を採る。また、先行研究の中から自ら執筆を目指す研究論文のモデルとなるものを精選し、具体的な研究方法を参考に概要をまとめ、発表する。</p>	
音楽教育実践演習	<p>音楽科の授業の授業構成力と批評能力とを高めることを目標とする。内容は「音楽教育研究法」での講義内容を踏まえ、学校音楽教育の今日的課題を踏まえた授業を考察する。受講者は問題意識を各自提示し、その解決のための指導方法を提案する。そして、その指導方略を学習指導案に展開し、模擬授業を行う。演習では実際に実践を試みた模擬授業について、受講者全員で授業構成について、発問の提示や教具の使い方、想定する子どもの実態、時間配分など批評し合い省察する。</p>	
音楽授業づくりの理論と実践	<p>創作表現活動を取り入れた、主体的・対話的な音楽授業づくりの理論と実践について、主として演習を通じ、体験的に学ぶとともに、即興的な創作表現活動では、体を動かす活動をまじえ、理論と実践により理解を深めることをテーマとする。</p> <p>小・中学校において実践されている音楽づくり(小学校)、創作(中学校)の領域に焦点をあて国内外の事例を取り上げながら、理論と実践の両面から探っていく。実践的なアプローチでは、グループワーク、ディスカッションをベースとし、演習形式で学ぶ。多様な芸術領域から、受講生が個々に興味・関心を抱くトピックを選び、個人またはグループによるプレゼンテーションに取り組み、発表し合う。</p>	
総合表現活動の理論と実践	<p>子どもが生涯にわたって幅広い芸術文化に親しむことをめざし、音楽教育での学びを生かした総合表現活動(創作音楽劇など)を支援していくカリキュラムの理論と実践について学ぶとともに、教科領域を横断した舞台制作をはじめ、児童・生徒による話し合い、発表後の振り返り等を含めた一連の支援について、理論と実践の両面から学ぶことをテーマとする。</p> <p>音楽・舞踊等を含む総合的な舞台表現芸術に映像鑑賞を通じて親しみ、小・中学校での音楽集会、校内発表会における舞台表現を構築し、支援する素地を培う。古典から前衛までの幅広い芸術表現に鑑賞を通じて親しみ、多様な舞台表現の形態を学ぶ。多様な芸術領域から、受講生が個々に興味・関心を抱くトピックを選び、個人またはグループによるプレゼンテーションに取り組み。</p>	
作曲の理論と実践	<p>各自の課題、欲求、要望に沿いながら、それぞれの創作(編曲を含む)や、作曲に関する基礎的な技法、知識などの学習を行うことをテーマとする。</p> <p>作曲の基礎的な技法を学びながら、編曲や作曲を試みる。具体的な音の選択に関する指導、助言や批判は、受講者の技術レベルに合わせて個別に行う。また、まった作品の作曲はもちろん、小品、童謡、伴奏づけ、音具を用いた合奏等、さらには、作曲に関わる諸々の多様な希望に沿いながら授業を行う。楽曲分析は、他に授業もあるが、この授業の中でも、たとえば唱歌や、ソナチネなどの小品の簡単な分析を行うことが可能である。</p>	
楽曲分析の理論と実践	<p>なぜ音楽に感動したり何かの意味を感じたりするかを考える。音楽作品を聴いて感動することや、音楽作品がある意味とまとまりを持って聞こえる主な理由は、音楽作品そのものの中にある。その理由を、音と楽譜を用いて分析することにより解明する。分析は、作曲に貢献するのはもちろんだが、むしろ、演奏するためには有効であり、また、聴取の可能性をひらくものでもある。</p> <p>授業では、いくつかの作品について、その特徴的な性格と楽曲構造の関係に焦点をしばり、また聴取や演奏の場面を想定した分析も行う。ただレクチャーを聞くだけでなく、自分の体験と楽曲との関係の考察を行い、さらに他の受講者の考察も見ながら、表現を考える。この授業の前半で行う自分の実感の言語化が、結果的に「人は、音楽をどのように形容するのか」「どのような形容が、音楽の実感を伝えるのか」ということを考える機会とする。</p>	
ソルフェージュ～聴き取りと実践場面对応A	<p>聴音(聴いて書く)、視唱(楽譜を歌う)、初見などの簡単な課題を用いて、総合的に読譜能力を向上させることを目指す。また、身についた力を実践場面で生かすとはどのようなことか、自分の音楽の把握のしかたを捉え直しながら考えることを本授業の目標の一つとする。</p> <p>聴音(聴いて書く)、視唱(楽譜を歌う)、初見などの簡単な課題を中心として、可能なかぎり各自の実力や目標にあった内容にしつつ、実践場面を念頭においた授業を行う。</p>	
ソルフェージュ～聴き取りと実践場面对応B	<p>聴音(聴いて書く)、視唱(楽譜を歌う)、初見などの簡単な課題を用いて、「ソルフェージュ～聴き取りと実践場面对応A」受講後のさらなる発展的学習として、総合的に読譜能力を向上させることを目指す。また、身についた力を実践場面で生かすとはどのようなことか、自分の音楽の把握のしかたを捉え直しながら考えることを本授業の目標の一つとする。</p> <p>聴音(聴いて書く)、視唱(楽譜を歌う)、初見などの課題を中心として、可能なかぎり各自の実力や目標にあった内容にしつつ、実践場面を念頭においた授業を行う。</p>	

音楽実践総合演習 I	<p>音楽と教育にかかわる多様なテーマについて調査・分析・制作・演奏等を実践し、その共有を通して音楽科の授業実践や教科内容を構成する力の向上に繋げる。同時に、学校における音楽発表会等を実施・運営する能力を身につける。演奏発表会の実施を通して、学校行事を実施・運営する能力を身につける。中間発表会・成果発表会は音楽実践総合演習Ⅱと合同で実施する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (2 阿部 亮太郎/12回) (71 玉村 恭/12回) (43 平野 俊介/12回) (35 時得 紀子/12回) (10 上野 正人/12回) (60 尾崎 祐司/12回) (78 長谷川 正規/12回)</p> <p>音楽実践総合演習からみる学校支援プロジェクト、テーマの設定、設定したテーマにおける基礎的理解及び現状の課題について授業を行い、中間発表会の活動を経て、設定したテーマに関する調査・分析を行い、最終的には成果発表会を実施する。</p> <p>(60 尾崎 祐司/1回)</p> <p>音楽実践総合演習からみる音楽科について授業を行う。</p> <p>(78 長谷川 正規/1回)</p> <p>音楽会実施の方法について授業を行う。</p> <p>(10 上野 正人/1回)</p> <p>音楽会運営の方法について授業を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
音楽実践総合演習Ⅱ	<p>音楽と教育にかかわる多様なテーマについて調査・分析・制作・演奏等を発展させ、その共有を通して音楽科の授業実践や教科内容を構成する力を高める。同時に、学校における音楽発表会等を企画・統括する能力を身につける。音楽実践総合演習Ⅰで扱ったテーマを基本として、調査・分析を行うとともに表現法、関連する技術や指導の理論等を発展的に学び、実践する。また、演奏発表会の実施を通して、学校行事を企画・統括する能力を身につける。中間発表会・成果発表会は音楽実践総合演習Ⅰと合同で実施する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (2 阿部 亮太郎/12回) (71 玉村 恭/12回) (43 平野 俊介/12回) (35 時得 紀子/12回) (10 上野 正人/12回) (60 尾崎 祐司/12回) (78 長谷川 正規/12回)</p> <p>音楽実践総合演習を学校支援プロジェクトでどのように活かすかについて、設定したテーマにおける最新事情について授業を行い、中間発表会の活動を経て、設定したテーマに関するレポート又は報告書の作成に関する活動を経て、最終的には成果発表会を実施する。</p> <p>(60 尾崎 祐司/1回)</p> <p>音楽実践総合演習を音楽科でどのように活かすかについて授業を行う。</p> <p>(78 長谷川 正規/1回)</p> <p>音楽会企画の方法について授業を行う。</p> <p>(10 上野 正人/1回)</p> <p>音楽会統括の方法について授業を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
教科内容構成「図画工作・美術」の理論と実践	<p>図画工作・美術の指導において、児童・生徒一人一人の身体に根ざした活動の楽しさを、保障・支援するために必要な教科内容の原理とその意義について理解する。専門科目の授業内容を取りあげ、個々の内容における、問題発見や問題解決の場面、活動の中から新たな活動へと発展する広がりや過程、人間・社会の基本的な関係などについて省察し、教科内容の原理と体系の理解を図る。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (59 伊藤 将和/2回) (46 松尾 大介/2回)</p> <p>図画工作科・美術科における教科の内容の原理とその意義、既習内容の整理・分類と研究課題の設定について授業を行う。</p> <p>(59 伊藤 将和/1回)</p> <p>描く行為の意味とその変容について授業を行う。</p> <p>(34 洞谷 亜里佐/1回)</p> <p>描く行為と文化の継承について授業を行う。</p> <p>(55 安部 泰/1回)</p> <p>伝達の合目的性と多様性について授業を行う。</p> <p>(46 松尾 大介/1回)</p> <p>触れる行為から立ち現れる形について授業を行う。</p> <p>(94 齋 期天/1回)</p> <p>つくる行為と学校教育について授業を行う。</p> <p>(5 五十嵐 史帆/2回)</p> <p>「美術」と子どもの造形活動、学習指導要領及び教科書における表現と鑑賞の位置づけと具体的実践例の検証について授業を行う。</p> <p>(34 洞谷 亜里佐/6回) (46 松尾 大介/6回) (55 安部 泰/6回) (59 伊藤 将和/6回) (5 五十嵐 史帆/6回) (94 齋 期天/6回)</p> <p>研究課題の実証的考察、実践的運用のための体系化について授業を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
図画工作・美術科教育教材の理論と実践	<p>①学校や社会における、美術教育の目的と特徴について理解する。②図画工作・美術科の授業指導案等を作成し、建設的・批判的に検討することができる。③教材(テーマ、素材、用具等)を精査し、活動全体をデザインする実践力を身につける。以上を本授業のテーマ及び目標とする。</p> <p>美術教育の現状を理解し、美術や美術教育にかかわる様々な課題について探究するとともに、社会と関わる学校教育における「図画工作科」「美術科」のこれからのあり方について、授業や諸機関との連携による造形活動などの実践を通して考え、実現する能力を身につける。</p> <p>授業は、グループ討議、指導案・教材の作成、授業や美術館教育普及活動、ワークショップの実践などを含む、演習形式で行う。</p>	
絵画表現の理論と実践Ⅰ(伝統絵画)	<p>小・中・高等学校の教材を開発するための能力の基礎となる日本・東洋絵画の知識・理解を深める。特に、伝統的に表現された日本画・東洋絵画の美意識と精神性による造形表現を学び、これからの時代の新たな表現の可能性について、他分野との創作活動と関わりながら明らかにし、その考察を基に今日の美術教育に関連づけて考えるようにすることを重視する。</p> <p>伝統的な表現技法を習得し、自然素材と表現の可能性を探求しながら、独自の作品を展開する。教育活動として、学校現場での授業教材研究や地域文化を背景とした日本絵画を探求しながら、ワークショップなども積極的に取り入れる。</p>	

<p>絵画表現の理論と実践Ⅱ (油彩・版画)</p>	<p>学校教育における造形活動の意義を、児童・生徒の表現に基づいて理解を深め、図画工作の指導に必要な基礎的な知識及び技能を身につけていくものである。特に絵画・版画表現における基礎を習得するとともに、材料や用具の特性およびその扱いについての知識・技能を深めながら、学習指導要領における「造形的な見方・考え方」を養っていくことを目標とする。</p> <p>絵画と版画における素材と生成の原理を理解すると同時に、制作とそれに基づく理論について互いに検討していく。「つくりながら知る」「つくったものから知る」ことを通して、実践と理論を往還しながら、実感的に造形活動の意味を理解し理論と実践の両知の有機的結合を体験する。また、多様な表現の理解を深め、個性を反映できる題材開発の理論を構築する。</p>	
<p>彫刻表現の理論と実践</p>	<p>これからの図画工作科・美術科における彫刻表現にかかわる教科内容を深く検証し、教材を開発する能力を身につけることを目標とする。新しい学習指導要領で重視されている「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』の育成」等、所謂「汎用的能力」の育成に資する彫刻表現の教科内容に着目し、彫刻制作の過程で働く固有の思考様式「見方・考え方」について、本質的かつ具体的題材に即して検証を重ねる。まず、イメージを形に実現していく創造的な実体験を通じて「汎用的能力」に資する彫刻表現固有の思考「見方・考え方」を理解する。そして、彫刻の表現や鑑賞の活動における具体的作例や児童・生徒たちの試行錯誤の過程を段階的かつ体系的に捉え、社会的な広がりや踏まえつつ個性を尊重する教材を開発するための理論と実践を学ぶ。</p>	
<p>デザイン学習の理論と実践</p>	<p>図画工作または中学校・高等学校美術、あるいは高等学校工芸の授業において有効な教材または題材の開発と授業実践の観点から、それらを高度に実現するために必要な専門知識や技能について理解し、児童・生徒に対し適切な指導を行うために必要な実践技術を身につけることを目標とする。</p> <p>各種教科書や実践例を参考とし、既存の教材または題材についての理解や分析を学習指導要領解説の内容を踏まえて考察する。対象とした教材または題材について、その背景にある専門的事項についての理解を深め、指導に必要な専門知識や技能を明確にしていく。その上で、それら知識や技能を修得するために有効な課題を設定し、グループまたは個々の活動により実際に制作することを通してより実践的な知見として理解・体得し、児童・生徒への優れた指導が可能となる教員像を目指す。</p>	
<p>工芸表現の理論と実践</p>	<p>図画工作科、美術科、芸術科(工芸)において創造することの楽しさを感じるとともに児童・生徒に指導を行う上で必要な思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てるものである。生活の中の工芸の働きを理解し、伝統文化に関心を持ち、造形的な見方・考え方、表現及び鑑賞に関する資質・能力を養うことを目標とする。</p> <p>陶芸における「土」の材料による手の感覚などを働かせ、焼成による変化と原理を理解すると同時に、制作やそれに基づく理論について検討していく。「どのように表すかについて考える」ことから表現方法を創意工夫して制作し「感じたこと、想像したこと」を通じて、陶芸作品に対する見方や感じ方を深める。「土」から「陶」への創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育む題材開発を構築する。</p>	
<p>人体表現研究の理論と実践</p>	<p>図画工作科・美術科における根源的教科内容にかかわる人体表現の理解を基に、題材を開発する能力を身につける。古代から現代まで芸術表現の主題として絶えず扱われてきた人体にアプローチし、「人間」を表現する際に働く思考様式「見方・考え方」について、絵画と彫刻の両面から理論的かつ具体的題材に即して検証を重ねる。</p> <p>(オムニバス方式/全30回) (46 松尾 大介/1回) (59 伊藤 将和/1回) 「人間」を主題とした表現について授業を行う。 (59 伊藤 将和/11回) (34 洞谷 亜里佐/11回) 教科書や展覧会など学校教育や社会で取り上げられている人体をモチーフとした作例、について授業を行い、人体表現演習(絵画)を行う。 (59 伊藤 将和/2回) 「人間」を主題とした表現の特徴と人体表現の教育的意義(絵画)、芸術文化の営みの中で自然の造形の典型として扱われてきた人体表現の理論的位置づけについての美術史的観点による授業を行う。 (46 松尾 大介/13回) 「人間」を主題とした表現の特徴と人体表現の教育的意義(彫刻)、芸術文化の営みの中で自然の造形の典型として扱われてきた人体表現の理論的位置づけについての美学的観点による授業を行い、人体表現演習(彫刻)を行う。 (34 洞谷 亜里佐/1回) 芸術文化の営みの中で自然の造形の典型として扱われてきた人体表現の理論的位置づけについて、解剖学的観点から授業を行う。 (59 伊藤 将和/2回) (34 洞谷 亜里佐/2回) (46 松尾 大介/2回) 人体表現の具体的題材例の考案、考案した具体的題材の発表について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部)</p>

<p>公共施設等を活用した展示の基礎理論と実践演習</p>	<p>図画工作及び美術教育への理解を深める為に、作品の展示計画の立案から実践としての展示までを経験し、活かした学びとしての表現及び鑑賞の観点や技能を修得する。公共の場での作品展示と公開により、学校教育の現場における展示活動の意義や効能、必要な観点や運営における考え方を見出し、児童・生徒の作品展示をより発展的に活用できる能力を身に付ける。加えて、学部学生の「卒業研究」とも連動して運営することにより、多様な視点を学ぶ機会とする。 (オムニバス方式/全15回) (59 伊藤 将和/1回) 作品を発表する理念と公共施設を利用することの意義について授業を行う。 (34 洞谷 亜里佐/3回) (5 五十嵐 史帆/3回) 受講者の作品展示を前提とした、会場設定や展示計画の作成について授業を行う。 (55 安部 泰/6回) 告知ポスターやリーフレットのデザインおよび関連書類の作成について授業を行う。 (59 伊藤 将和/3回) (94 兪 期天/3回) (46 松尾 大介/3回) 展示計画に基づいた展示の設営について授業を行う。 (34 洞谷 亜里佐/2回) (46 松尾 大介/2回) (55 安部 泰/2回) (59 伊藤 将和/2回) (5 五十嵐 史帆/2回) (94 兪 期天/2回) 鑑賞者に向けた研究内容の発表の場として、一般市民にむけたギャラリートークの開催に関する授業を担当する。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>
<p>鑑賞教育の理論と実践</p>	<p>美術文化(絵画, 立体, デザイン等)と鑑賞の活動と結びつけながら、美術の鑑賞方法と評価について主体的に理解する。鑑賞活動と表現活動を往還することで、美術による教育の特徴や本質を理解し、児童・生徒の発達段階を前提とした鑑賞の指導法や、展開の方法について考察を深める。さらに、美術の社会的、歴史的な繋がりを、自らの経験と照らし合わせながら、社会や生活とつながる豊かな美術教育の教材の開発に結びつける。 (オムニバス方式/全15回) (5 五十嵐 史帆/3回) 美術教育における鑑賞の歴史、美術教育における鑑賞教育の事例、美術館の役割と美術館教育について授業を行う。 (5 五十嵐 史帆/8回) (59 伊藤 将和/8回) 美術館実地見学を担当するとともに、模写を通じた鑑賞教材の開発、描画材からのアプローチ、教材作成、教材の検討と分析について授業を行う。 (59 伊藤 将和/4回) 美術史から振り返る主題の変容、遠近法の発展と空間表現、現代美術の表現と社会的意義、児童・生徒作品の鑑賞とその観点について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>
<p>保健体育科教育演習</p>	<p>保健体育科教育におけるこれまでの実践や理論を理解し、適切な指導方法の実践力を高めるとともに、教育の今日的課題に対応しうる保健体育科教育のあり方を探究する。 保健体育科教育に関するこれまでの実践や理論について文献講読や実践などを通して概観し、教育の今日的課題に対応しうる保健体育科教育のあり方を演習的に探究する。保健体育学習の特性とアクティブラーニングの観点から、講義と実技・演習での理論と実践の往還的活動によって学修する。</p>	
<p>保健体育科教育内容・指導論</p>	<p>小学校及び中学校、高等学校の学習指導要領体育、保健体育におけるゲーム、ボール運動、球技に共通するゴール型、ネット型、ベースボール型等のタイプ別分類の捉え方について構造的に捉え、未熟練者の様相を考慮したボールゲームの指導方法を具体的に提案できること、また、熟練者に対しても適切な学習内容を提案できることを目標とする。 近年提唱された「ボールゲームの構造論」に基づき、種目にとらわれないボールゲームの共通構造に着目した理論について概説し、社会的構築主義に基づき、「動き」や「ゲームパフォーマンス」に偏向しない新しいボールゲームの指導を提案する。いずれの回においても、言われたことをすればよいという性質の活動ではなく、主体的、協同的に学習をすすめる“アクティブ・ラーニング”として積極的に活動したり意見を交流したりする。</p>	
<p>運動方法学演習(武道)</p>	<p>現代武道の基本的な対人技能の理論と実践の学修をテーマとする。 現代武道成立の歴史的発展過程と運動構造の特殊性の理解を通じて、武道とは何かを演習・アクティブラーニング形式で考察する。また、スポーツ・体育と武道における諸問題を取り上げ、今後の学校体育における武道の位置づけと課題を検討する。演習では、武道(剣道、柔道、空手道等)の実践的・理論的検討を通じて、その特性を理解する。特に、対人運動としての技術の特殊性の観点から演習を行ない学校体育における対人的危機管理能力を高める。</p>	
<p>運動学演習</p>	<p>スポーツ運動学が扱うスポーツ・運動における動きの習得や指導に関する理論を理解し、指導実践の充実に繋げることを到達目標とする。 スポーツ運動学が扱うスポーツ・運動における動きの指導に関する理論を学ぶ。その理論を生かしながら、指導計画を立案し、実践する(実践①)。実践①を純粹記述・メタ観察を通して実践の有効性や課題を考察し、指導計画を練り直す。練り直した計画に基づいて指導実践を行い(実践②)、実践①と実践②を通して純粹記述・メタ観察を行い、プレゼンテーションにまとめる。</p>	

<p>教科内容構成「技術」の理論と実践Ⅰ</p>	<p>学習指導要領に示された中学校技術・家庭科技術分野（以下、技術科とする）の内容について、技術科の各専門科目で学習する教材研究と、技術科教育に関する科目で学習する指導方法を架橋させて、ものづくりを重視した技術科の題材（カリキュラム）づくりの計画・実践・評価・改善に必要な力を身につける。また、日本産業技術教育学会「技術科教員養成における修得規準」をもとに、中学校技術科教員が身につけるべき知識・技術・指導方略等を理解し実行する力を身につける。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （83 東原 貴志／5回）</p> <p>21世紀の技術教育（改訂）、技術教育の理解と推進の内容理解、「木材（加工）」「金属（加工）」に関する知識、技術、指導方略等、その内容構成と指導内容について授業を行う。</p> <p>（53 山崎 貞登／4回）</p> <p>「栽培」に関する知識、技術、指導方略等、「生物育成の技術」の内容構成と指導内容、技術科におけるものづくりと題材（カリキュラム）づくりについて授業を行う。</p> <p>（92 岡島 佑介／4回）</p> <p>「電気」に関する知識、技術、指導方略等、その内容構成と指導内容、「エネルギー変換の技術」に関する知識、技術、指導方略等、その内容構成と指導内容について授業を行う。</p> <p>（14 大森 康正／2回）</p> <p>「情報」に関する知識、技術、指導方略等、その内容構成と指導内容について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>教科内容構成「技術」の理論と実践Ⅱ</p>	<p>学習指導要領に示された中学校技術・家庭科技術分野（以下、技術科とする）の内容について、技術科の各専門科目で学習する教材研究と、技術科教育に関する科目で学習する指導方法を架橋させて、ものづくりを重視した技術科の題材（カリキュラム）づくりの計画・実践・評価・改善に必要な力を身につける。また、技術科の研究会の研究授業等を参観し、知識・技術・指導方略の分析を通して、技術科教育の理論と実践の往還を目指し、実践的指導力を身につける。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （14 大森 康正／4回）（83 東原 貴志／4回）（92 岡島 佑介／4回） （53 山崎 貞登／4回）</p> <p>本授業の導入及び課題の把握を行い、第13回から第15回では指導案の提出と発表会、授業検討会を担当する。</p> <p>（83 東原 貴志／11回）（53 山崎 貞登／11回）</p> <p>研究会の授業観察準備を行い、研究会の授業観察と授業協議会に参加する。それを踏まえて、授業場面の分析や検討を行い、授業場面に関連した指導案の検討について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p>
<p>材料加工の先端技術の教材開発と実践</p>	<p>各種加工法の原理について理解し、適切な加工方法を選択することができ、先端技術の効果的な教材活用を促進し、材料加工の技術教科内容学と、技術教科の指導法との連携と、理論と実践の架橋・融合を図るとともに、教科の基盤学問である材料科学・材料力学をはじめとした諸科学の成果を踏まえながら、教材開発のための教材構成（教材開発の過程）に必要な理論と実践方法について修得することを目標とする。</p> <p>本授業では、各種材料加工に関する技術教育ならびに工業教育の研究事例、教育実践例を示し、教科指導に関する議論を深める。</p>	
<p>生物育成の先端技術の教材開発と実践</p>	<p>Society5.0の実現を目指し、先端技術と情報通信技術(ICT)の効果的な教材活用を促進し、生物育成の技術・工業教科内容学と、技術・工業教科の指導法との連携と、理論と実践の架橋・融合を図るとともに、教科の基盤学問である農学・生物工学をはじめとした諸科学の成果を踏まえながら、教材開発のための教材構成（教材開発の過程）に必要な理論と実践方法について修得することを目標とする。</p> <p>中学校技術科「生物育成の技術」に関する実践的指導力に必要な次に記載の1）～6）の技術・エンジニアリング教育概念の理解と、学習指導に必要な資質・能力を身につける。</p> <p>1）生物資源・育種技術、2）育成計画、3）土壌肥料・飼養技術、4）育成管理技術、5）育成生物保護技術、6）バイオテクノロジーと技術倫理</p>	
<p>エネルギー変換の先端技術の教材開発と実践</p>	<p>先端技術の効果的な教材活用を促進し、エネルギー変換の技術教科内容学と、技術教科の指導法との連携と、理論と実践の架橋・融合を図るとともに、教科の基盤学問である電気・機械をはじめとした諸科学の成果を踏まえながら、教材開発のための教材構成（教材開発の過程）に必要な理論と実践方法について修得することを目標とする。</p> <p>エネルギー変換の技術に関する技術教育の研究事例、教育実践例を示し、教科指導に関する議論を深める。</p>	
<p>情報の先端技術の教材開発と実践</p>	<p>Society5.0の基盤的学問領域であるコンピュータサイエンス等の諸科学について理解し、先端技術の効果的な教材活用および先端技術を学ぶ教材開発を促進し、情報技術の技術科内容学と技術科の指導法との連携、理論と実践の架橋・融合を図るとともに、教材開発のための教材構成（教材開発の過程）に必要な理論と実践方法について修得することを目標とする。</p> <p>中学校技術科の学習指導要領と「情報の技術」に関する教材・教具の事例研究によって情報技術と学習指導要領との関係を修得し、情報技術に関する先端技術の事例を通じた基礎技術と理論に基づいた教材開発演習を通して先端技術の教材化に必要な資質・能力を身につける。さらに、開発した教材を用いた学習指導案の作成、模擬授業等を通して実践的指導力に必要な資質・能力を身につけ、技術教科内容学と指導法とが連携した実践的指導力を修得する。</p>	

プログラミング的思考の教材開発と実践	<p>Society5.0の実現に必要な資質・能力として、初等・中等教育におけるプログラミング教育の特にプログラミング的思考を育成する教材開発と実践方法について修得する。STEM教育とSTEAM教育の観点から、プログラミング的思考を育成する教材の理論と実践方法について修得する。2020年度からの小学校プログラミング学習必修化の経緯と、プログラミング的思考が鍵語になった理由を扱う。小学校プログラミングに関する学習活動の分類と学習指導の考え方を取り扱う。次に、プログラミング的思考育成の観点から、初等中等教育におけるプログラミング教材開発と学習指導案作成、模擬授業、授業後の検討会を通じた実践的指導力向上のための方略について扱う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (53 山崎 貞登/7回)</p> <p>学習指導要領におけるプログラミング的思考育成のねらいと教材・教具の関係、STEM教育・STEAM教育からのプログラミング的思考(プログラミング学習)育成の教材と実践事例、プログラミング的思考の視点からの学習指導案の作成と検討、教材開発と継続的な教員研修、初等・中等教育における体系的なプログラミング学習の評価規準について授業を行う。</p> <p>(14 大森 康正/8回)</p> <p>プログラミング的思考育成からの小・中学校教材事例の検討、小・中学校におけるアンブレグド型の教材開発、小・中学校におけるプログラミング言語を活用した教材開発について授業を行う。</p>	オムニバス方式
ものづくり教材の開発と実践	<p>ものづくりに必要な各種加工法の原理について理解し、適切な加工方法を選択することができ、先端技術の効果的な教材活用を促進し、材料加工およびエネルギー変換の技術教科内容と、技術教科の指導法との連携と、理論と実践の架橋・融合を図るとともに、教科の基盤学問である材料科学・材料力学・電気・機械をはじめとした諸科学の成果を踏まえながら、教材開発のための教材構成(教材開発の過程)に必要な理論と実践方法について修得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (83 東原 貴志/8回)</p> <p>ものづくり教育に関する学習指導要領と教材・教具の関係、ものづくり教材の構成(教材開発の過程)、木材や木質材料、ナノ材料の種類と性質に関する教材開発について授業を行う。また、ものづくり技術の教材構成の視点からの学習指導案の作成と模擬授業の実施、授業検討会を行い、教材開発と継続的な教員研修について授業を行う。</p> <p>(92 岡島 佑介/7回)</p> <p>ICを用いた電子回路の製作と特性測定、各種モータの制御と動作測定、光センサの製作と動作測定、デジタルものづくりに関する教材開発について授業を行う。また、ものづくり技術に関わるイノベーション力育成のための教材開発、自動化、システム化のために情報技術を活用したものづくり技術の教材開発について授業を行う。</p>	オムニバス方式
技術科教育教材特論	<p>中学校技術・家庭科技術分野(以下、技術科とする)の学習指導の方法、題材選定と教材・教具、学習評価に関して理解し、実践的な指導力を高めることを目標とする。</p> <p>中学校技術科の学習指導の方法、問題解決的な学習、学力形成と工夫・創造の支援、学習形態と学習指導、教授方略と学習指導、教師の授業スキル、技術科の題材選定と教材・教具、学習評価、比較教育、技術科教育に関する提言と内容構成、技術科教育の歴史、材料の技術と加工の技術、生物育成の技術、エネルギー変換の技術と機械技術、電気技術、情報の技術の各指導内容と方法について講義する。</p>	
教科内容構成「家庭」の理論と実践	<p>教科「家庭」の背景となっている学問体系(教科内容)に基づき、「家庭」の授業を通して修得すべき知識や概念を、子どもの発達段階に応じて選択し、構成する能力を養成することを目標とする。</p> <p>小・中・高等学校「家庭」教科書に掲載された教材や、「家庭」の授業実践例を取り上げ、教科内容の視点から分析を行う。この分析を通して「家庭」の学問体系(教科内容)についての理解を深めるとともに、その内容を自らの教材や実践としてアウトプットする能力を身につける。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (25 佐藤 ゆかり/5回)</p> <p>家庭科の教科内容構成、「家庭」の学問体系、住居の機能と住まい方、「住」の授業・教材検討、まとめとして「家庭」の内容と授業実践について授業を行う。</p> <p>(49 光永 伸一郎/5回)</p> <p>食生活と栄養、食品の選び方、日常食の献立と調理、「食」の授業・教材検討について授業を行う。</p> <p>(90 吉澤 千夏/5回)</p> <p>自分の成長と家族、家庭と家族関係、幼児の生活と家族、「保育」の授業・教材検討について授業を行う。</p>	オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間
21世紀を生き抜くための「家庭」	<p>21世紀を生き抜くために必要な力を育む教科としての「家庭」の授業内容及びその実践について、その背景となる教科内容の理解を深めるとともに、それらを授業の中で生かすことのできる知識・技術を習得することを目標とする。</p> <p>小・中・高等学校家庭科教科書を基に、その内容を裏付ける理論について学ぶとともに、それを生かした授業の構想を行う。さらにそれを基に、さらなる背景知識の習得とそれに基づく授業実践の技術を磨くため、模擬授業を行うとともに、21世紀を生き抜くための力を「家庭」でどのように身につけていくのか、考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (25 佐藤 ゆかり/5回)</p> <p>21世紀を生き抜くための力と教科「家庭」、「家庭」と「家政学」について授業を行うとともに、21世紀を生き抜くための「家庭」の授業の構想と実践、検討を行う。</p> <p>(49 光永 伸一郎/5回)</p> <p>「食」領域の背景学問としての「食物学」、「食」の授業を支える「食物学」の理論について授業を行うとともに、「食」の授業の構想と実践、検討を行う。</p> <p>(90 吉澤 千夏/5回)</p> <p>「保育」領域の背景学問としての「児童学」、「保育」の授業を支える「児童学」の理論について授業を行うとともに、「保育」の授業の構想と実践、検討を行う。</p>	オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間

「家庭」における理論と実践（被服学）	家庭科教育における被服領域の指導に求められる理論と実践を修得することを目標とする。教科内容の背景となっている被服学における学びを高めるとともに、教科の目標や指導内容についての理解を深める。 着装学習、手入れ学習、製作学習の背景となる被服学の諸領域についての学びを深めるとともに、その指導に求められる理論と実践力について解説する。環境・福祉に繋がる現代課題についての知見を解説するとともに、最新のトピックスや地域資源を教材として活用し、喫緊のニーズや課題に対応できる授業を展開する。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
「家庭」における理論と実践（食物学）	小・中・高等学校家庭科教育における食物領域の指導に求められる理論と実践を修得することを目標とする。教科内容の背景となっている食物学における学びを高めるとともに、教科の目標や指導内容についての理解を深める。 さまざまな食物について栄養・食品・調理の視点からの知識を再考するとともに、食べることの目的と意義についての見識を高める。児童・生徒の食生活の現状を解説するとともに、最新の学術論文や新聞記事なども教材として活用する。例えば、郷土料理や地域食材の教材化を通して和食の保護・継承に資する情報を提供するとともに、教科横断的な学習や「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業展開についても言及する。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
「家庭」における理論と実践（住居学）	小・中・高等学校家庭科教育における食物領域の指導に求められる理論と実践を修得することを目標とする。教科内容の背景となっている食物学における学びを高めるとともに、教科の目標や指導内容についての理解を深める。 さまざまな食物について栄養・食品・調理の視点からの知識を再考するとともに、食べることの目的と意義についての見識を高める。児童・生徒の食生活の現状を解説するとともに、最新の学術論文や新聞記事なども教材として活用する。例えば、郷土料理や地域食材の教材化を通して和食の保護・継承に資する情報を提供するとともに、教科横断的な学習や「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業展開についても言及する。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
「家庭」における理論と実践（児童学）	子どもを取り巻く諸問題について理解を深め、子どもにかかわる問題を多様な視点から検討・議論・考察し、子どもとそれにかかわる多様な問題について教科「家庭」において如何に扱い、その問題を解決に導くか、その実践的な方法について検討する。 受講学生によるレポートを基に、子どもとそれを取り巻く諸問題について議論するとともに、多様な視点から考察するとともに、学校教育の中でそれらをいかに扱い、児童・生徒ともに問題を解決していこうとするのか、その実践的な方法を学ぶ。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
家庭科教育教材の理論と実践	家庭科教育の本質と現代の家庭科教育の実相との複眼的視点から、家庭科教育実践のあり方についての検討を行うことをテーマとし、家庭科教育の本質を踏まえた家庭科教育実践について説明でき、家庭科の本質と家庭科教育の実相を踏まえた家庭科教育の教育課程編成及び学習指導法について説明できることを目標とする。 資料の検討及び討議等を通して、家庭科教育の目的及び方法についての理解を深める。家庭科教育の本質と現代の家庭科教育の実相との複眼的視点から、家庭科教育実践の検討を行う。それを踏まえ、家庭科の本質に基づく家庭科教育実践及び家庭科教育の課題の改善に向けた家庭科授業実践のあり方について検討を行う。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
言語と対話的学びのデザイン	言語による認識・思考を深層化しながら考えを形成する対話的な学びのデザインについて学ぶことをテーマとする。 対話場面「ことばタイム」を学習者の視座で体験し、多様な言語活動に問題関心をもつ。学習者が判断し直しながら考えを形成したり、既存の見方・考え方を呼び覚まししながら言語的認識を更新したりしていく姿と要因を意味づけ、対話的学びのデザインに資する要件を抽出する。言語的見方・考え方が更新する対話的学びのデザインをグループで構想し、模擬授業を行う。学ぶ姿と要因を検討するワークショップを行い国語の学習デザインについて成果・課題をまとめる。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
主体的学びの臨床過程	子どもが個々の論理と表現を通して行為や経験をつくり変え、意味や価値を社会的文化的に成り立たせていく学びの過程について、AV機器を用いた学習場面の臨床観察演習による事例収集を行う。収集事例について、道具や記号に媒介された協働的な学びの過程の記述分析と考察を行う。以上により、子どもの学びの過程の臨床的把握と理解、及びその言語化の方法を習得し、子どもの行為の視点から学習をデザインして授業研究する方法を学ぶ。 言語や記号に媒介された行為の関係と過程に着目した子どもの学び過程の質的研究法を、以下の講義と演習により習得し、社会的文化的視点から学びをデザインする方法を学ぶ。①子どもの学びの過程とフィールドワークの基礎理論、②学習場面の臨床観察演習、③学びの過程のビデオカンファレンス、相互行為の記述分析、データセッション、④学習臨床レポートとプレゼンテーションによる討議と考察、⑤主体的学びの臨床過程のデザイン	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
創造行為と相互作用による探究的学習過程	道具、ことばや記号、語り、ふるまい、場や組織等の社会的文化的道具を、つくり・つくり変える創造的相互作用により、文脈の異なる場面での知識や方法の汎用的使用や課題解決を探究する。これにより人や環境とのあいだの自明化した枠組み、方法、概念等に疑念を持ち、フィールドが抱える固有の課題や問題解決のため、社会的文化的な意味や価値を創造して、生活する世界に働きかけることで、自分や他者の見方、考え方、表し方、ふるまい方を更新していく探究的学びの過程の構造と要素について学ぶ。社会的文化的創造物に媒介された相互作用を通して学習過程を臨床的にデザインして吟味し、気づきと省察によりつくり変える授業デザインの在り方と方法を学修する。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
状況論からの教育実践研究	身体を介した深い学びを実現するための新しい実践について学ぶ。ボール運動を構造的に捉え、子どもの遊戯集団をモデルにした学習集団編成等の考え方を具体的に提案できることを目標とする。 社会構築主義に基づいた学習観に依拠し、種目にとらわれない、ボールゲームの構造に着目した理論について概説し、技能に偏向しない新しいボールゲームの授業を概説する。いずれの回においても、言われたことをすればよいという性質の活動ではなく、主体的、協同的に学習をすすめる“アクティブ・ラーニング”として積極的に活動したり意見を交流する。	

メンタルトレーニングを活用した学習支援	メンタルトレーニングの心理的技法が児童の心理的要因を改善し、学習への取り組みを向上できるのではないかと仮説を基に、児童の教科横断的な学習支援を目的として開発された、学習支援プログラム「こころをつよくなるノート」の理論的背景を理解する。さらに、その実践方法を習得することで、教科横断的な課題を解決するための教育実践力を高めることを到達目標とする。 学習支援プログラム「こころをつよくなるノート」に、児童の心理的要因の改善と学習への取り組みの向上を目的として応用されている心理的技法の理論的背景を解説する。児童の立場から「こころをつよくなるノート」を実践に実践し、児童の実践例も参考にしながらディスカッション形式により学習支援プログラムの有用性について検討を進める。	
教材としての身体運動科学	本授業の目標は以下の3つである。 ① 運動生理学的に身体を理解し、生物的身体教育に活用できる。 ② 運動制御的な視点から身体を理解し、表現的身体教育に活用できる。 ③ 認知・知覚の視点から身体を理解し、社会的身体教育に活用できる。 運動生理学・運動制御・認知心理学を中心に身体運動に関する科学的知見を概説するだけでなく、文献購読なども通じて古典的な知見や最新の知見に触れる。これらの上で、身体運動科学を教材として教育に活用する方法について議論する。	講義 14時間 演習 16時間
教科内容構成「総合的な学習の時間」の理論と実践	上越教育大学附属小学校における取組をもとに、総合学習に関する高度な学術的な内容の理解と修得を目指すものである。総合学習を支える自然科学や人文科学を中心とする研究内容を、学習指導要領をふまえ、講義や演習を通して学ぶ。「生活科」及び「総合的な学習の時間」を支える教科内容として、地域文化・自然科学・伝統工芸・情報統計を取り上げ、深く広く学ぶ。さらにそれらの教科内容を授業として実践するためのカリキュラムマネジメントについても学び、各自の興味関心にもとづいた年間学習計画を作成する。 (オムニバス方式/全15回) (107 清水 雅之/10回) 総合学習を支える専門性、総合的な学習の時間とカリキュラムマネジメント、地域文化研究、伝統工芸の教材的価値について授業を行う。 (4 五百川 裕/1回) 自然環境と生物多様性について授業を行う。 (109 中野 博幸/4回) 高等教育における情報・統計、情報・統計を生かした総合的な学習の時間について授業を行う。	オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間
教科内容構成「生活」の理論と実践	学校教育における「生活」等で取り組まれている発達の段階に照らした総合的な学習活動について、実践的に活用することのできる専門的な内容の習得を授業の到達目標とし、「生活」を主軸にした幼児教育からの円滑な流れを意識したカリキュラムデザインを考案し、具体的に提案することができることを目標とする。学校教育における「生活」等で取り組まれている学習内容についての理解と、実践的に指導することのできる専門的な内容の習得を目指すものである。学習指導要領を踏まえながら、児童の発達に合わせ、地域に根ざした学習するためのカリキュラムデザインの方法を具体的に体験的に学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (115 渡辺 径子/2回) (126 上原 進/2回) 第1回では本授業における導入に関する授業を行い、第15回では考察したカリキュラムデザインの発表に関する授業を行う。 (126 上原 進/4回) 生活科の教科特性と育てる学力、生活科における「かく」活動や「たんけんする」活動、「ふりかえる」活動について授業を行う。 (115 渡辺 径子/9回) スタートカリキュラム、生活科における「そだてる」活動(植物及び動物)、「つくる」活動、地域素材探し(フィールドワーク)、地域素材の利用(フィールドワーク)、ICTの利用について授業を行う。	オムニバス方式・共同(一部) 講義 14時間 演習 16時間
国際理解教育の理論と実際	国際理解教育の生成過程と今日的意義を理解し、国際理解教育の理論と実践の往還を通じて、国際理解教育の実践研究の充実に必要な基礎的知識・技能の習得を目標とする。 最初に日本における国際理解教育の生成過程について学ぶ。次に国際理解教育の今日的意義について学ぶ。続いて国際理解教育の展開過程を探究し、グローバル時代の国際理解教育の現状と課題を認識し、将来の国際理解教育を展望する。また、総合的な学習の時間との関係や教師の力量形成、歴史認識問題、クラス内の異己について学び、国際理解教育の内容と方法論を習得する。	講義 14時間 演習 16時間
SDGsに対応したワークショップの理論と実際	グローバル化の進展により学校や地域社会に顕在化してきた教育的な諸課題を対象として、国際理解教育のカリキュラムと教材の開発方法、同学習の科学的な分析と評価に関する研究方法を学び、フィールドワークや実践・演習(国際交流ファシリテーターの準備)を通じて実践的指導力と教育研究の基礎を修得する。 (オムニバス方式/全15回) (19 釜田 聡/9回) (69 田島 弘司/9回) (82 原 瑞徳/9回) (23 小高 さほみ/9回) (115 渡辺 径子/9回) これからの見通しと国際交流ファシリテーターについて授業を行う。また、ワークショップ開発の基礎研究及び実践、開発演習、分析と評価、省察について授業を行う。 (19 釜田 聡/2回) 身近なところから始めるSDGs、SDGsを生かしたカリキュラム・マネジメントについて授業を行う。 (69 田島 弘司/1回) 男女の異文化コミュニケーションから考えるSDGsについて授業を行う。 (23 小高 さほみ/1回) 暮らしと社会をつなぐカリキュラムとSDGsについて授業を行う。 (115 渡辺 径子/1回) STI for SDGsについて授業を行う。 (82 原 瑞徳/1回) SDGsと多文化共生について授業を行う。	オムニバス方式・共同(一部) 講義 14時間 演習 16時間

日本語教育演習	外国語としての日本語教育における実践能力の育成を目標とする。アクティブラーニング形式の講義である。外国語としての日本語教育における実践能力を身に付けるため、授業においては、まず日本語教育の多様性について理解を深め、多様なニーズを持った様々な学習者の存在を認めることができるようにする。その上で、全般的な事項について学習したのち、特に興味のある分野の日本語教育について、グループあるいは個人別に学習を進め、その成果を最後に発表する。	
文化的言語的に多様な子どもの教育	外国につながる文化的言語的に多様な子どもたち（CLD児）が置かれている状況や困難への理解を深め、教育支援のための基礎事項を学び、教育支援の方法について考案することによって、教師としての自らの教育活動についてビジョンを持つことを目標とする。 本授業では、まず、CLDの子どもたちが日本の学校で学ぶ経緯となっている歴史文化的背景、成長過程で直面する困難を知ることにより、子どもたちへの理解を深め、次に、異文化コミュニケーションの観点から教師の関わり方、児童生徒間の関係づくり、国際理解・異文化理解教育、第二言語・外国語教育等について知り、教師自らの関わり方を考えるための基礎を学ぶ。	講義 14時間 演習 16時間
文化的言語的に多様な子どもへの言語教育法	外国につながる文化的言語的に多様な子どもたち（CLD児）の言語教育の方法にかかわる基礎を身につけることを目標とする。 言語習得や学習方法、日本語の特徴を理解した上で教授法や教材分析について学び、授業計画を立てることによってCLD児を対象とした言語教育方法の基礎を学ぶ。グループや全体での検討や共有によって、様々なアイデアや他者の視点を取り入れることを目指す。 （オムニバス方式／全15回） （82 原 瑞徳／7回） 文化的言語的に多様な子ども（CLD児）の言語習得、JSLカリキュラム、コースデザイン、教材分析と教材作成、教材開発、授業計画について授業を行う。 （69 田島 弘司／8回） 日本語の分析、音韻・音声、文字・表記、形態・語彙、文法、意味体系、語用論、教授法について授業を行う。	オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間
文化的言語的に多様な子どもへの日本語教育実習	外国につながる文化的言語的に多様な子どもたち（CLD児）を対象とした教育実習を通して、将来学校教員として教育活動に従事するための基礎的な力を身につけることを目標とする。 本授業では、まず、外国につながる文化的言語的に多様な子どもたち（CLD児）を対象とした教壇実習に向けて参加者のニーズ調査、教案・教具の準備等を行い、教壇実習に臨み、振り返りを重ねながら将来学校教員として教育活動に従事するための基礎を学ぶ。グループや全体での検討や共有によって、様々なアイデアや他者の視点を取り入れることを目指す。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
地域・家族の暮らしの探究学習の理論と実際	家政学等の理論からSDGs時代の社会と暮らしを理解するとともに、家庭科や総合的な学習を手がかりに、暮らしを継承・創造する地域に開かれた探究学習の実践力の向上を目指す。SDGsの視点と暮らしに関わる理論から地域・家族の暮らしの課題を読み解くことができること、暮らしの場からつくる探究学習のカリキュラムをデザインすることができることを目標とする。 少子高齢化、人口減少、産業構造の変化、急速なグローバル化や技術革新等の変化の中で、暮らしの何がどのように変容しているのか、フィールドワークや家政学や社会学の文献をてがかりに現代的課題を理解するとともに、学校において人間の生涯にわたる発達と暮らしについて学習することの意義と、暮らしの場からつくる探究学習のカリキュラムを議論していく。	講義 14時間 演習 16時間
総合的な学習を中核とした教育課程論	総合的な学習を中核にした教育課程における実践事例を分析・考察し、教育課程における総合的な学習の時間の意義や総合的な学習の時間と各教科等との関連の在り方について理解し、教育課程とのかかわりを踏まえた総合的な学習の時間のカリキュラムを作成、検討することを通して、探究的な学習や教科横断的な学習の創り方について考えることをテーマとする。 総合的な学習を中核にした教育課程の実践事例を通して、その特徴を理解するとともに、教育課程における総合的な学習の意義や各教科等との関連の在り方や方法について学ぶ。また、総合的な学習におけるカリキュラム・マネジメントや学習指導について学び、教育課程とのかかわりを踏まえた総合的な学習の時間のカリキュラムを作成し、検討する。最後は、総合的な学習の時間を指導する教師のカリキュラム・マネジメント力など、必要となる力量について考える。	講義 14時間 演習 16時間
総合学習カリキュラムデザイン	総合学習のカリキュラムデザインについて、現代的諸課題の視点から学ぶ。具体的には、総合学習カリキュラムデザインを国際理解教育やグローバル人材の育成、持続可能な社会の構築などの視点から検討し、総合学習のカリキュラムデザインの実践的力の向上を目標とする。 最初に教育課程における総合的な学習について学ぶ。次に小学校と中学校における総合学習の特質について学ぶ。続いて国際理解教育や持続可能な社会における教育などの現代的な諸課題に関する教科横断的・総合的なカリキュラム開発について学ぶ。最後に総合学習のカリキュラムを作成し協議を行う。授業では、映像資料、新聞資料、写真資料など、多様なメディアを活用し、総合学習のカリキュラムについて内容と方法について究明する。	講義 14時間 演習 16時間
生活科・総合的な学習における体験学習	主体性を導き長期記憶に残る体験を通じた学びの在り方や有用性について学ぶ。実際のフィールドワークを通じ、地域に根ざした生活科や総合的な学習における学びの可能性について具体的に提案することを目指す。 体験を通じた学びは、子どもの思考や実践の出発点あるいは基盤として、また思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくという主体性を導くために必要であるとされる。また体験を通じた学びは子どもの長期記憶に残り生きた力として働くとする。そのような体験を通じた学びであるが、その有用性を高めるためには、どのような体験をどのような展開で指導していくかという工夫が必要となる。本授業では、以上のような課題に対する知見を深める。	講義 14時間 演習 16時間

	総合学習におけるICT活用	総合的な学習の時間におけるICTの活用について、学校現場での実践例をもとに理解を深めることを目標とする。本授業では、学校における具体的な事例を取り上げ、目的・方法・分析などについて学ぶこと、ICTを実際に活用する体験を通して、単元開発やICT活用指導力を形成する。小学校段階での総合的な学習の時間におけるICT活用についての具体的な事例を取り上げ、情報教育や情報モラル教育への理解を深めるとともに、総合的な学習の時間におけるプログラミング教育について学ぶ。	
	学校教育と統計・評価	学校教育においては、指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。本授業では、学校における具体的な事例を取り上げ、目的・方法・分析などについて学ぶことを通して、統計的な手法を用いて現実のデータから批判的・発見的に知見を引き出す力を形成することを目標とする。学校評価や授業評価などの具体的な事例を取り上げ、評価方法やデータ分析の手法を学ぶとともに、統計分析ソフトウェアを用いて、統計分析の知識と技能を身につける。	
発達支援教育実践研究コース	特別支援教育原論	障害児教育の行政・制度の史的展開及び現行の行政・制度の概要を理解することを目標とする。我が国における障害児教育の行政制度について、その現状と問題点を把握し、今後の方向性を検討することを目的とする。具体的には、明治期から現在までの障害児教育の変遷過程を、関係法令をもとに講述し、特殊教育から特別支援教育への転換の背景、意義、課題について考察する。あわせて、欧米諸国における障害児教育についても分析を加え、比較教育学的観点から、わが国における特別支援教育の方向性を探る。	講義 14時間 演習 16時間
	特別支援教育と自立活動	特別支援教育の基礎理論として、自立活動の前身である養護・訓練成立の歴史、特別支援教育制度における自立活動の位置づけを理解するとともに、自立活動の理念、個別の指導計画作成の意義について、基本的な理解を得ることを到達目標とする。 自立活動成立の歴史、わが国の特別支援教育制度における自立活動設置の意義について解説するとともに、自立活動の指導を実施する上で義務付けられている個別の指導計画作成及び教師、保護者、関係者との協働、各教科等の学習と自立活動との関連について講述する。 (オムニバス方式/全15回) (44 藤井 和子/12回) 戦後の特殊教育における自立活動成立までの歴史、障害児教育制度における養護・訓練成立の背景、養護・訓練成立以前における障害の状態を改善・克服する指導、養護・訓練の理念、精神薄弱教育の歴史における養護・訓練の位置づけ、自立活動の成立と背景要因、自立活動の理念、特別支援学校の目的・教育目標・自立活動の目標の関連性、知的障害者である幼児児童生徒に対する教育を行う特別支援学校における自立活動の位置づけについて授業を行う。また、自立活動の指導における教師間協働及び保護者・専門機関等との協働について授業を行う。 (18 笠原 芳隆/3回) 特別支援教育制度における自立活動の位置づけ、自立活動の指導における個別の指導計画作成の意義、特別支援学級における自立活動の指導について授業を行う。	オムニバス方式 講義 14時間 演習 16時間
	視覚障害心理・生理学論	視覚障害児の発達支援をテーマとし、視覚障害児の教育において必要とされる心理、生理、病理に関する基礎的知識の習得と、教育場面におけるそれらの知識の活用に関する探求能力の涵養を目標とする。 現代社会及び特別支援教育の各枠組における視覚障害のとりえ方、視覚障害の原因にかかわる生理・病理に関する基礎的内容、及び視覚障害児の心理学的諸特性について講述する。また、視覚障害児の心理・生理・病理の特性に関する知識を基に、他の履修者との協働による具体的な学習場面を想定した支援プランの策定活動を通して、視覚障害児の社会参加に向けた合理的配慮について考える場を設定する。	講義 14時間 演習 16時間
	聴覚障害心理・生理学論	聴覚障害児教育において必要な心理・生理・病理学に関する基礎知識を習得することを目標とする。 具体的には、外耳・中耳・内耳・中枢聴覚路などの聴覚器官の構造と機能、聴覚障害の原因となる疾患と特徴、純音聴覚検査や語音聴覚検査などの聴力評価、補聴器・人工内耳などの聴覚補償機器を用いた聴覚活用、聴覚障害児・者の発声発音の特徴とアセスメント、聴覚障害児・者の認知機能および心理的特徴、学齢期における障害認識、軽・中等度難聴児や片側難聴児など通常学校に在籍する聴覚障害児への支援について講義する。	講義 14時間 演習 16時間
	知的障害心理・生理学論	知的障害の心理・生理に関する基礎的知識を習得することをテーマとする。具体的には、知的障害の概念、発生機序、心理学的特性、支援の在り方を理解することを到達目標とする。 知的障害のある児童生徒の理解と支援について、基本的な知識を講義する。知的障害の定義・分類・アセスメント、知的障害の発生に関わる生理・病理、脳の構造と機能等を理解した上で、心理学的特性に応じた教育的支援の在り方について理解することを目的とする。また、演習を通して、知的障害児の特性に基づいた支援方法への理解を深める。	講義 14時間 演習 16時間
	肢体不自由心理・生理学論	運動機能の発達、肢体不自由と起因疾患の種類や病態、特に割合の高い脳性まひの分類・病型・合併症、脳性まひ児を中心とした肢体不自由児の日常生活上の困難、心理学的特性、運動・動作の心理学的な考え方、実際に支援を展開する際の基本的な技能(方法)等について理解を深めることを目標とする。 運動機能の発達、運動機能にかかわる器官、肢体不自由の定義と起因疾患、脳性まひの分類・病型・合併症を中心に論述するとともに、脳性まひ児を中心とした肢体不自由児の日常生活上の困難や心理学的特性、運動・動作の心理学的な考え方や支援技能の具体例について概説するとともに体験する。	講義 14時間 演習 16時間

病弱心理・生理学論	<p>病弱・身体虚弱の心理・生理に関する基礎的知識の習得を目標とする。具体的には、病弱・身体虚弱の概念、病因、発達特性、障害特性、心理特性、支援の在り方を理解することを目標とする。</p> <p>病弱・身体虚弱のある児童生徒の理解と支援に関する基本的な知識を講義する。具体的には、病弱・身体虚弱のある児童生徒を対象とする学校教育に関する基本事項を概説した上で、病弱・身体虚弱の定義、疾患分類、アセスメント、病弱・身体虚弱に関する心身諸機能の発達と障害、教育現場において頻繁に認められる各種疾患の特性について、教育的支援の在り方を含めて論説する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
視覚障害教育課程・指導法	<p>次の5つを目標とする。</p> <p>①視覚障害について心理・生理・病理的基盤により理解する。②視覚障害教育の歴史と現在の制度について理解する。③視覚障害の教育課程について理解する。④視覚障害の程度や重複障害の有無に応じた、細やかな指導や関わりについて理解する。⑤実践及視点から視覚障害教育について展望できるようになる。</p> <p>視覚障害の心理・生理・病理的理解を基盤とし、インクルーシブ時代における視覚障害児(者)のニーズに対応した教育・支援を進めるための基本的理念及び知識について学修していく。また視覚・重複障害児(者)への教育・支援についても取り上げる。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
聴覚障害教育課程・指導法	<p>聴覚障害の特性や発達段階ごとの特徴をふまえた教育課程の編成及び指導法について学習することをテーマとする。聴覚障害児教育の歴史を概観し、教育理念や教育方法等の変遷をたどりながら、今日の特別支援学校(聴覚障害)の教育課程編成について知識を習得することをめざす。また、聴覚障害児の認知特性をふまえた指導の理論について学習し、教科や自立活動等の指導法に関する知識技能を習得することをめざす。</p> <p>言語指導の変遷を核としながら国外・国内双方の聴覚障害児教育の歴史について概観し、聴覚障害児教育の理念と方法に関する考え方を整理したうえで、今日の特別支援学校(聴覚障害)の教育課程編成について講義する。また、聴覚障害児の障害特性や認知特性、発達課題に関する理論を学んだうえで、全国の特別支援学校(聴覚障害)における授業実践を紹介したり、実際に模擬授業を行ったりしながら、教科指導法及び自立活動指導法について講義する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
知的障害教育課程・指導法(授業論)	<p>心身に障害(知的障害)のある幼児、児童又は生徒の学校教育における教育課程編成や授業論、授業づくりの実際について、基本的な考え方、具体的な授業計画の立案/実際/評価、指導形態(個別・小集団)の指導法、関連して知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害(ASD)のある子どもの多くが示す問題行動の理解と支援について、基礎的な事項から高度な専門的知識・技能の習得を修得することをテーマ及び到達目標とする。</p> <p>心身に障害(知的障害)のある幼児、児童又は生徒の学校教育における教育課程編成や授業論、授業づくりの実際について、基本的な考え方、具体的な授業づくりの立案/実際/評価、指導形態(個別・小集団)の指導法、関連して知的障害を伴うASDのある子どもの多くが示す問題行動の理解と支援について講義を行う。また、学校現場で生じる教育実践の課題に関わる演習を通して、障害特性に基づいた支援方法への理解を深める。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
知的障害教育課程・指導法(自立活動指導論)	<p>知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の教育課程の特徴、各教科及び自立活動の指導において作成が義務付けられている個別の指導計画作成に関する基礎的な知識・技能を習得するとともに、特に、各教科等と自立活動との関連を図る個別の指導計画作成を通して、知的障害者である児童生徒の指導に関わる基礎的な知識・技能を習得することを到達目標とする。</p> <p>本授業では、平成29年4月に告示された特別支援学校学習指導要領における知的障害者である児童生徒に対する教育課程編成の基本的な考え方、知的障害教育に独自に設定されている各教科、指導形態の工夫について概説するとともに、知的障害者である児童生徒の学習を支える自立活動の指導について、演習を通して理解する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
肢体不自由教育課程・指導法	<p>肢体不自由教育における実践的指導力を高めるために、次の3つを目標とする。</p> <p>①肢体不自由児の実態を踏まえた教育課程編成や個別の指導計画作成・活用のあり方について理解を深める。②自立活動の学習内容とその授業への生かし方について各教科等とも関連させながら理解を深める。③特別支援学校等卒業後の生活を見ずえた指導・支援や個別の教育支援計画作成・活用のあり方について理解を深める。</p> <p>肢体不自由児童生徒の特性を踏まえた教育課程の編成、自立活動を中心とした障害に基づく困難への対応、教科指導、学校卒業後の生活を見ずえた移行支援(福祉等外部専門機関連携)等について、実践例を紹介しながら論説するとともに、児童生徒に対する基本的な援助法、自立活動に生かせる技法の体験や指導計画・学習指導案作成の演習を行い、実践的指導力を身につけることができるようにする。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
病弱教育課程・指導法	<p>病弱・身体虚弱の教育課程・指導法に関する基礎的知識の習得を目標とする。具体的には、病弱・身体虚弱の概念、病弱・身体虚弱のある児童生徒を対象とする学校教育に関する法令、制度、教育課程、教育の意義および病弱・身体虚弱のある児童生徒の状態に応じた指導法の理解を目標とする。</p> <p>病弱・身体虚弱のある児童生徒を対象とする教育課程と指導法に関する基本的な知識を講義する。具体的には、病弱・身体虚弱の概念と病弱・身体虚弱のある児童生徒を対象とする学校教育に関する基本事項を概説した上で、病弱・身体虚弱の状態(長期入院/在宅療養)に応じたアセスメント、指導目標、指導計画の策定方法および指導・支援の実際について講義する。併せて、病弱・身体虚弱と関連の深い肢体不自由、知的障害、重複障害について解説する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>

発達障害・情緒障害教育総論	<p>通常の学級、特別支援学級（自閉症・情緒障害学級）等に在籍する発達障害（限局性学習症、注意欠如・多動症、自閉スペクトラム症）及び情緒障害（選択性／場面緘黙を含む）のある子どもの教育について、各障害の定義や対象、心理特性、学校教育の変遷、支援の実際に関わる基礎的知識、支援方法を修得することをテーマ及び到達目標とし、学校現場で生じる教育実践の課題に関わる演習を通して、障害特性に基づいた支援方法への理解を深める。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （51 村中 智彦／8回）</p> <p>発達障害、情緒障害の定義と対象、発達障害、情緒障害の症状と発生要因、発達障害及び情緒障害の学校教育とその変遷、自閉スペクトラム症の症状と発生要因とその子どもの支援の実際、情緒障害の症状と発生要因とその子どもの支援の実際について授業を行う。</p> <p>（57 池田 吉史／7回）</p> <p>注意欠如・多動症のある子どもの理解や心理、支援について、限局性学習症のある子どもの心理や支援について、発達性協調運動症のある子どもの心理について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>講義 14時間 演習 16時間</p>
言語・重複障害教育総論	<p>言語障害及び重複障害のある幼児児童生徒の教育の基本的な考え方を学ぶとともに、前言語期のコミュニケーション発達、口腔機能の発達、構音障害・吃音・言語発達遅滞の評価と指導法、重複障害についての生理・心理的基盤による理解及びアセスメントに基づいた指導や関わりについて基本的な知識を習得することを到達目標とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （44 藤井 和子／8回）</p> <p>言語障害の定義と言語障害教育の歴史の変遷、前言語期コミュニケーションの発達と評価、口腔機能の評価と支援、構音障害・吃音・言語発達遅滞の指導、知的障害、肢体不自由のある子どもの言語指導、保護者・専門機関等との連携による言語障害教育について授業を行う。</p> <p>（63 佐藤 将朗／3回）</p> <p>重複障害の定義と重複障害教育の歴史の変遷、視覚・知的重複障害児の視力及び視覚能力の評価に基づく教育内容と方法、盲・聾重複障害児の発達評価に基づく教育内容と方法について授業を行う。</p> <p>（18 笠原 芳隆／2回）</p> <p>重複障害教育の教育課程と個別の指導計画、重度・重複障害時及び重症心身障害児の運動機能の評価に基づく教育内容と方法について授業を行う。</p> <p>（87 八島 猛／2回）</p> <p>濃厚な医療を要する重複障害児の理解及び教育と評価について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>講義 14時間 演習 16時間</p>
視覚障害教育総論	<p>①視覚障害について心理・生理・病理的基盤により理解すること、②視覚障害教育の歴史と現在の制度について理解すること、③視覚障害の教育課程について理解すること、④視覚障害の程度や重複障害の有無に応じた、細やかな指導や関わりについて理解することを目標とする。視覚障害の心理・生理・病理的理解を基盤とし、インクルーシブ時代における視覚障害児(者)のニーズに対応した教育・支援を進めるための基本的理念及び知識について学修していく。また視覚・重複障害児(者)への教育・支援についても取り上げる。</p> <p>（オムニバス方式／全8回） （11 大庭 重治／2回）</p> <p>視覚機能の基礎と視覚障害、空間認知の指導と歩行能力について授業を行う。</p> <p>（20 河合 康／2回）</p> <p>視覚障害教育の歴史の変遷、視覚障害教育の制度について授業を行う。</p> <p>（63 佐藤 将朗／4回）</p> <p>視覚障害児の教育課程、触覚的認知の指導と点字触読能力、視覚障害教育の展望について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>
聴覚障害教育総論	<p>聴覚障害を有する児童生徒に対する教育の概要や基礎的知識について講義する。各障害の定義・アセスメント、発生要因、教育の概要をテーマとして、教育学・心理学的特性に応じた教育的支援の在り方について理解することを到達目標とし、聴覚障害を有する児童生徒が在籍する特別支援学校や特別支援学級の学校現場で生じる教育実践に関わる課題の理解を深める。</p> <p>（オムニバス方式／全8回） （62 小林 優子／4回）</p> <p>聴覚障害の解剖・生理、聴覚障害をもたらす疾患、聴覚障害児・者のアセスメント（聴力検査）と心理的支援について授業を行う。</p> <p>（95 坂口 嘉菜／4回）</p> <p>聴覚障害児の読み書き能力と言語指導法、聴覚障害教育における教科指導、聴覚障害児への早期教育と言語発達の評価、聴覚障害教育における自立活動について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>
知的・肢体・病弱教育総論	<p>知的障害、肢体不自由、病弱のある児童生徒に対する教育の基礎的知識について講義する。講義内容は、各障害の定義・アセスメント、発生要因、教育学・心理学的特性に応じた教育的支援の在り方である。また、知的障害、肢体不自由、病弱のある児童生徒が在籍する特別支援学校や特別支援学級の学校現場で生じる教育実践に関わる課題の理解を深める。</p> <p>（オムニバス方式／全8回） （51 村中 智彦／2回）</p> <p>障害のある子どもの教育、知的障害（重度）のある子どもの教育について授業を行う。</p> <p>（44 藤井 和子／1回）</p> <p>知的障害（中等度）のある子どもの教育について授業を行う。</p> <p>（57 池田 吉史／2回）</p> <p>知的障害（軽度）のある子どもの教育、知的障害（境界域）のある子どもの教育について授業を行う。</p> <p>（18 笠原 芳隆／1回）</p> <p>肢体不自由のある子どもの教育について授業を行う。</p> <p>（87 八島 猛／1回）</p> <p>病弱のある子どもの教育について授業を行う。</p> <p>（18 笠原 芳隆／1回）（87 八島 猛／1回）</p> <p>重度・重複障害（肢体不自由、病弱）のある子どもの教育について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p>

特別支援学校教育実習	<p>教育職員免許法に基づき、特別支援学校教諭免許状（視覚障害教育領域、聴覚障害教育領域、知的障害教育領域、肢体不自由教育領域、病弱教育領域）を取得するための教育実習を新潟県内の特別支援学校で実施する。教育実習を通して、大学院で習得した専門的知識や方法について実践的に検証し、教師としての職務や使命感を体得する。</p> <p>学内における事前指導では、教育実習の意義や教育実習の実際、各障害種の児童生徒に対する配慮事項や指導法、学習指導案作成について授業を行う。</p> <p>実習校における指導では、実習校における自立活動の指導、各教科の指導、特別活動・総合的な学習の時間の指導の実際について学修する。また、それぞれの指導教壇実習に向けた教材研究及び実践、研究協議を行い、実習の成果・課題について討議を行う機会も設ける。</p> <p>(18 笠原 芳隆)</p> <p>事前指導における「特別支援学校実習の概要」「受講手続き及び注意事項」の説明、事後指導における実習の総括（教育課程・授業づくり）を担当する。</p> <p>(63 佐藤 将朗)</p> <p>事前指導における「実習の対象となる児童生徒の実態」「実態に応じた配慮・工夫」の説明、事後指導における実習の総括（児童生徒理解・指導上の配慮工夫）を担当する。</p>	<p>共同</p> <p>講義 1 5 時間 実習 6 0 時間</p>
重複障害教育論	<p>①重複障害のアセスメントについて論じた研究論文を検索し、その生理・心理的基盤を理解すること、②重複障害児の学習や日常生活における指導について論じた研究論文を検索し、その内容を確認すること、③重複障害教育における教育と医療の協働について理解すること、④重複障害教育における研究知見の構築について展望できるようになることを目標とする。</p> <p>重複障害の種類について生理・心理的基盤により分類し、それぞれに応じた様々なアセスメントの方法について理解する。次に、多様な様相を示す重複障害児への指導及び日常生活の指導法に関する研究論文をできるだけ多く取り上げ、主張されている見解や知見を整理し、その有効性について議論する。さらに、重複障害児に対する医療的アプローチや他職種とのチームアプローチに関する論文についても扱う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(63 佐藤 将朗／9回)</p> <p>重複障害の定義、重複障害のアセスメント、視覚・知的重複障害児への指導法、盲・聾重複障害児への指導法、重症心身障害児への指導法、重複障害教育の展望について授業を行う。</p> <p>(18 笠原 芳隆／6回)</p> <p>重複障害のアセスメント、重度重複障害児への指導法、重複障害教育における疾患別の教育、重複障害児への他職種とのチームアプローチについて授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
特別支援教育研究法論	<p>様々な障害のある子どもにも適用できる研究方法を取り上げ、その具体的な実施方法を習得させ、教育実践に関する調査的、臨床的、実験的研究や事例（子ども、教師／支援者、組織支援や連携／協働支援）に関するケースレポートのまとめを遂行するための基礎的知識を習得させる。この講義及び演習では、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱の5障害の他、重度・重複障害、加えて、通常の学級に在籍する学習障害／注意欠如多動性障害／自閉症スペクトラム障害を中心とする発達障害、情緒障害、言語障害等多様な障害種を対象に、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室、通常の学級における特別支援教育に関する教育実践研究の進め方やケースレポートのまとめ方を包括的に習得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(18 笠原 芳隆／2回)</p> <p>特別支援教育における教育実践研究やケースレポートを実施する上での倫理的配慮、調査的研究やケースレポートの進め方（方法：量的研究）について授業を行う。</p> <p>(11 大庭 重治／1回)</p> <p>特別支援教育における教育実践研究やケースレポートの進め方について授業を行う。</p> <p>(20 河合 康／2回)</p> <p>文献的研究やケースレポートの進め方、調査的研究やケースレポートの進め方（デザイン）について授業を行う。</p> <p>(44 藤井 和子／1回)</p> <p>調査的研究やケースレポートの進め方（方法：質的研究）について授業を行う。</p> <p>(51 村中 智彦／2回)</p> <p>臨床的研究やケースレポートの進め方（デザイン及び方法）について授業を行う。</p> <p>(63 佐藤 将朗／1回)</p> <p>実験的研究やケースレポートの進め方（デザイン）について授業を行う。</p> <p>(95 坂口 嘉菜／1回)</p> <p>実験的研究やケースレポートの進め方（方法）について授業を行う。</p> <p>(44 藤井 和子／1回) (114 関原 真紀／1回)</p> <p>授業研究法やケースレポートの進め方について授業を行う。</p> <p>(62 小林 優子／2回)</p> <p>事例・データ解析のケースレポートのまとめ方（統計の基礎及びt検定、カイ二乗検定）について授業を行う。</p> <p>(57 池田 吉史／1回)</p> <p>事例・データ解析のケースレポートのまとめ方（分散分析）について授業を行う。</p> <p>(87 八島 猛／1回)</p> <p>事例・データ解析のケースレポートのまとめ方（相関、重回帰分析）について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
特別支援教育研究法論演習	<p>特別支援教育研究法論で習得した実践研究や事例研究等に関する基本的な知識・技能に基づいて、各自が行う教育実践推進のための研究に関連する専門分野についての具体的な研究方法及び技法の習得を目指す。</p> <p>学校実習等を通して設定した研究希望内容と合致する特別支援教育領域又は研究方法を専門とする教員の下で、グループ別を実施する。各自が調べた具体的な研究方法等について定期的に報告を行い、その報告内容に基づいて意見交換や討議を行う。</p>	<p>共同</p>

聴覚障害心理・指導法論	<p>聴覚障害児教育に関する専門性を高めるため、特別支援学校（聴覚障害）や難聴学級・難聴通級指導教室の現場実践に必要な心理・指導法に関する知識の習得を目的とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回） （62 小林 優子／1回）（95 坂口 嘉菜／1回） 本授業の導入について授業を行う。 （62 小林 優子／7回）</p> <p>聴覚機能の検査の概要、純音聴覚検査及び語音聴覚検査による実態把握の方法、補聴器・人工内耳の聴覚活用の評価・支援、聴覚障害児の発声・発音の評価や指導、聴覚障害児・者への授業における情報保障について授業を行う。 （95 坂口 嘉菜／7回）</p> <p>聴覚障害児に対する個別的教育支援計画の策定、特別支援学校（聴覚障害）における個別の指導計画の策定や早期教育、聴覚障害児に対する言語と思考の指導（小学部段階及び中学部段階）、聴覚障害児に対する作文指導、特別支援学校（聴覚障害）における個に応じた指導と一斉指導の在り方について授業を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p> <p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
発達障害心理・指導法論	<p>発達障害児教育に関する専門性を高めるため、通常の学級、通級による指導、自閉症・情緒障害特別支援学級の現場実践に必要な心理・指導法に関する知識の習得を目的とする。</p> <p>通常の学級に在籍している発達障害などの特別の支援を必要とする児童及び生徒が各教科等の授業において学習活動に参加・理解することができるよう、児童及び生徒の学習上又は生活上における個別の教育的ニーズを理解するためのアセスメントの理論と方法を講義し、アセスメントに基づいた学習支援の具体的な方法について演習を通して教授する。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
小中学校における特別支援教育の課題と実践	<p>小中学校における発達障害等の児童生徒の理解と対応について、実践事例をもとに、教育的ニーズの把握、目標設定、支援方策の検討、実践、評価の在り方を理解するとともに、事例に基づいた個別的教育支援計画や個別の指導計画の作成等を通して、学校の体制づくりや支援の在り方を考える。</p> <p>実践事例をもとに、発達障害のある児童生徒の理解と対応について学ぶ。また、校内委員会の役割、保護者や関係機関との連携について学ぶ。通常の学級や通級指導教室、特別支援学級の発達障害の児童生徒に対する指導について実践から学ぶ。また、事例に基づいた個別的教育支援計画や個別の指導計画の作成、演習や模擬授業等により、発達障害児への適切な指導や支援の在り方について考える。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
幼年発達心理学	<p>幼年期（幼児期・児童期前期）の発達を中心とした発達心理学の知見について理解し、教育・保育場面での実践活動に活かすことのできる知識を獲得することを目標とする。</p> <p>胎児期、新生児期、乳児期、幼児期、児童期の子どもの発達と、子どもを取り巻く環境について学習を進める。特に、子どもと環境との相互作用についての学びを通して、履修者自身と子どもとの関係のなかでより良い子どもの発達を考えていく。現代社会における教育・保育場面での実践活動を考えるうえでは、子どもの成長・発達における教師・保育者または保護者の役割を理解すること、教育・保育場面の観察・評価の方法論をもつことが重要な課題である。その課題に取り組むため、履修者それぞれの知識と経験を共同学習によって深めながら、発達心理学の知見に基づく理解を進める。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
子どもの発達研究法	<p>幼児期・児童期の子どもとそれらを取り巻く環境ならびに教師・保育者を対象とした専門的研究の理解と実践のため、心理学、発達心理学の研究手法の習得と、研究実践において重要な科学的思考の理解を目標とする。</p> <p>幼年期の発達・心理、発達支援の課題等についての近年の研究動向を把握するとともに、子ども理解や発達研究における方法論を実践的に理解し、研究実践のための基礎的知識と実践的応用力を習得する。また、研究論文の基本的枠組みを確認し、論理的構成、分析方法、データ読解について実践的な学習を行う。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
幼年教育・保育論	<p>幼年期における公的な教育・保育の制度や組織、実践がどのように展開し現在に至っているかについて具体的に理解するとともに、共同検討を通して現代の幼年教育・保育を担う教員・保育者が取り組むべき実践的な諸課題を見出し、共有することを目標とする。</p> <p>近代公教育制度の成立期以降、現代までの幼年期の教育・保育に関する歴史的資料のうち、トピック的に精選した資料に、履修者自身が直接出会い体験しながら、現在直面している実践的な諸課題の多くが歴史的に引き継がれた課題でもあることにまず気付いてもらう内容である。就学前後の教育・保育のそれぞれの「独自性」と相互の「連続性」とは何かの問いを基盤として、幼年期教育・保育の現在と未来の担い手にいま何が求められているかについて共同で探究する。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
幼年教育・保育研究	<p>次の2点を授業目標とする。①現在、わが国が直面している幼年期における教育・保育・子育ての諸問題とそれをめぐる就学前施設や小学校における教員・保育者の役割について、近年の社会変化の視点から包括的、総合的に理解を深める。②諸問題の共同検討を通して履修者各自が教員・保育者として取り組むべき実践的な研究課題を見出す。トピック学習を基本とし、次のプロセスを通して目標達成を図る。①講師による基本情報の提示→②ディスカッション→③教育・保育・子育てをめぐる研究課題の抽出。①に履修者からの情報提示の機会も含める。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>
子どもの生活環境論	<p>幼稚園教育要領に示される領域「環境」のねらいと内容を理解する。子どもが環境と能動的に関わることを通じて、身近な自然に関心を向け、生活実感を通して身の回りの事象の仕組みを学んでいくプロセスを知るとともに、学びを支える保育者の援助について理解を深めることを目標とする。</p> <p>子どもが身近な自然に関わり、動植物とのふれあいを通じて、いのちや環境に対する関わり方を学んでいくプロセスについて事例を通して考察する。また、子どもが身の周りのさまざまな出来事や現象に関心を向け、事物の仕組みに興味を持ち、数量や記号に対する知識や感覚を身につけていくことを理解し、保育者の具体的な援助のあり方について考察する。</p>	<p>講義 1 4 時間 演習 1 6 時間</p>

子どもの遊び研究	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領の理解に基づき、遊びに関する理論と教育実践現場での遊びの実態を理解し、遊びの指導と援助方法の基礎を学ぶ。模擬的に遊びの指導を試行することを通して、基礎的な指導力の育成を目標とする。 子どもの生活の中心が遊びであることを理解するために、「遊び」に関する古典的理論について検討する。また、幼稚園等教育実践現場における遊びの実態と保育者による援助の実態について、観察を通して理解する。さらに、乳幼児向けの玩具や遊び道具を作成し、指導案の立案及び模擬保育を通して、基礎的な指導力を身につける。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
幼年期の子どもの教育と福祉	現代における児童福祉領域について教育社会学、社会福祉学の観点から理解することをテーマとする。具体的には、「児童虐待」や「児童福祉施設における養育の在り方」、「家族再統合」の問題といった幅広いテーマを考察していく。児童福祉は教育と福祉が混合する領域であるが、以上のような様々なテーマを学ぶことを通じて、教育と福祉両者のアプローチから子どもを包括的にケアすることができるような観点を獲得することを目標とする。本授業では、国内外の児童福祉に関する制度や法体系、歴史の変遷といった基礎的知識を概観することに加え、様々な事例や文献を通してグループ・ディスカッションも行う。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
教育福祉研究	子どもをめぐる、児童福祉・学校教育・少年司法がどのように関わっているのかを考察し、それを通して、各々の受講者が持つ研究内容も多角的に深めていくことを目標とする。本授業では、国内外の児童福祉に関する制度や法体系、歴史の変遷といった基礎的知識を概観することに加え、様々な事例や文献を通してグループ・ディスカッションも行う。本授業でとりあげる文献は教育学、教育社会学における比較的最新の論文を対象としており、本授業がそれぞれの「あたりまえ」を相対化する契機となる。他方、とりあげる文献は質的研究・歴史研究であり、受講者の研究方法の理解につながる。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
教科内容構成「保健」の理論と実践	生涯にわたり健康に関心を持ち、自ら進んで健康づくりを実践できる子どもを育てるためには、包括的に健康教育を実施することが大切である。本授業では、様々な視点や方法を通じた健康教育の理論学習と演習を実施することで、包括的健康教育を実践できる力を養う。また、教科としての「保健」の授業を実施する中で、これらの実践を生かせるような授業構成や教材の工夫・あり方についての議論を深めることで、「保健」の授業力を高める。 (56 池川 茂樹) 主担当として授業を行い、受講生の議論のファシリテーターとして統括する。 (41 野口 孝則) 副担当として、主に栄養に関わる授業の実践的な補足を行い、受講生の議論のファシリテーターとして支援する。 (74 留目 宏美) 副担当として、主に養護に関わる授業の実践的な補足を行い、受講生の議論のファシリテーターとして支援する。	共同
疾病予防教育の理論と実践	新型コロナウイルスの感染拡大は、学校における学習活動や生活様式にも大きな影響を与えてきた。その結果、児童生徒に主体的な予防活動を実践させるために、養護教諭をはじめとした全ての教員に予防リテラシーが求められる時代となりつつある。本授業では、感染症予防をはじめ、生活習慣病、熱中症など、児童生徒に生涯を通して健康に生きるためのスキルを身につけさせるための予防教育の理論とその実践方法を身につけることを到達目標とする。本授業は、学校における予防教育、特に生活習慣病、熱中症、感染症の予防について、講義および演習を通して理解を図るものである。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
健康教育の方法と技術	養護教諭が行う健康教育の実践基盤である「からだの学習」理論にもとづき、方法及び技術について学修する。それを通して、健康という観点から、子どもたちが生活・からだ・社会や自然を捉え、向き合い、考え動く主体的な学びのプロセスを構築・評価・改善するための力量の修得、向上を目標とする。また、学校における健康教育を推進する者としての資質能力を高めることを目標とする。この授業では、常に、子どもの生活実態や内面を大切に健康教育を行うことの意味に立ち返りながら、その考え方と具体的な方法、技術について、学修を進めていく。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
養護実践の内容と方法	学校教育のみならず、社会福祉における「養護」の概念についても理解を広げ・深めながら、学校において養護教諭がつかさどっている「養護」観について検討、議論しながら確かめ、醸成する。また、養護教諭が行う養護実践の基本的な構造、実践的な内容と方法について学修することを通して、養護教諭としての“観”の構築と、実践力の向上を図ることを目標とする。この授業では、養護実践の考え方、特徴に沿って、具体的かつ実践的な内容と方法を多角的に捉え、分析しながら、学修を進めていく。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
保健室の機能と経営	学校保健活動を実質的に推進する拠点であり、児童生徒等の心身の健康や生活面に関する様々な情報を有し、センター的な機能も有している保健室の位置づけを踏まえ、組織・経営論的な観点から、安全・安心を基盤にした保健室の諸機能を促進・向上する手立てについて学修する。この授業を通して、学校保健活動の推進において、中核的な役割を果たすことが期待されている養護教諭として、組織マネジメント力を高めるとともに、学校組織参画に資する保健室経営力を高めることを目標とする。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間
健康相談活動の方法と技術	養護教諭の行う健康相談は、保健室に入室した児童生徒の間診からはじまり、総合的な入室者対応の方法と技術から構成される。そこで、養護教諭の専門性や保健室の特性を生かしながら、児童生徒等の見立て・アセスメント及びアプローチの方法、技術について学修を進めながら、児童生徒等が直面している健康・生活課題の明確化、早期発見・早期対応に必要な力量を高めることを目標とする。また、健康相談と切り離すことのできない個別の保健指導や、保護者への助言のあり方についても併せて学修を進め、包括的な支援力の修得、向上を目標とする。	講義 1 4 時間 演習 1 6 時間

	現代的な健康課題の把握と養護実践の組織化	多様化・複雑化している児童生徒等を取りまく現代的な健康課題に対し、他の教職員や地域との関係機関、関係者等とともに、改善・解決を探り、実践につなげる手立てについて学修することを通して、連携やチームづくりにかかわる養護教諭の実践力の向上を目標とする。 この授業では、児童生徒等を取りまく現代的な健康課題についての実態理解（適切な把握と分析）を起点に、養護教諭がどのように、連携体制を整備したり、チームづくりの一翼を担っていくのかを具体的に学び、検証することを通して、実践の組織化理論について、実践的な学修を進めていく。	講義 14時間 演習 16時間
	食教育の理論と実践	教育や保育の現場における「食教育（食育）」の必要性や有効性に関する最新の情報を収集・分析し、今後の「食育」の展開のあり方や教育現場における具体的な食教育（食育）事例について議論・企画・提案できる知識や技術を習得することを目標とする。 「食教育の理論と実践」では、幼児期・学童期・思春期における健康の維持・増進や生活の質の向上を目指して、望ましい栄養状態・食生活の実現に向けての支援と活動を学校教育現場において実践するための知識と技能を習得することを目的とする。具体的には、（１）生きる上での食の大切さ、（２）教育現場における食育の推進や実践、（３）学校と家庭が連携した食育推進、（４）地域社会における食育推進、に関して受講大学院生が理解し、自らが進んで効果的な食育の推進を実践できることを目標とする。	講義 14時間 演習 16時間
	子どもの健康栄養学	教育や保育の現場における「食教育（食育）」が求められる背景（幼児、児童及び生徒の栄養に係わる課題や食生活に関する歴史的及び文化的な推移）や、国民の健康増進を形成する基本要素となる食品の機能、栄養・食生活、身体活動・運動、休養・睡眠などと疾患の関係について科学的な視点から学び、幼児・児童・生徒における「健康な生活を送るための栄養・食事・食生活」の重要性について理解することを目標とする。 本授業では、食品の持つ生活習慣病予防や健康の維持・増進と疾患の関係について科学的な視点で学ぶ。特に、幼児、児童及び生徒の栄養に係わる課題に関する事項を中心に、ライフステージ、生活環境、社会経済、地域社会や文化・風習に適応した「健康な生活を送るための栄養・食事・食生活」について理解する。	講義 14時間 演習 16時間
	子どもの栄養管理	学校現場において栄養教諭に求められる「食に関する指導」や「学校給食経営管理」に関する知識・技術・技能の教育・習得の方法について学び、将来、学校現場の食育や給食管理に関する調査・研究や指導・教育の中心的役割を担う能力を養うことを目的とする。 「子どもの健康栄養学」と「食教育の理論と実践」で修得した知識や技術をもとに、「子どもの栄養管理」においては、学校全体における食育の目標・年間計画の作成や、児童・生徒の実態把握から食に関する課題を解析し、食に関する指導の実践に結び付ける手法に関する研究論文を批判的思考で読むことや、学校給食を生きた教材として活用するために、栄養教諭が主体的かつ積極的に授業科目・単元の内容に活用できる献立を考案することや食に関する指導前後の評価のあり方について議論・企画・提案できる知識や技術を演習形式で習得することを目標とする。	講義 14時間 演習 16時間
全 コ ー ス	国際教育研究論	教育と国際協力がどのように関わっていくかを知ることを目的としての日本および諸外国の教育の制度・内容等の概説を留学生とともに学ぶことをテーマとする。日本および諸外国の教育の特徴の概要を理解し、記述すること、本授業での学びを他の授業における学びの基礎として位置づけ、活用することを目標とする。 現在、暮らしている日本という国の教育、あるいは体験してきた日本の教育の制度・内容等を理解し、日本の教育の特徴を把握するとともに、自国とは異なる教育の制度・内容等の理解の深化を図り、教育に関する日本および世界の諸課題について、留学生とともに教育実践面に着目しつつ考察する。	
	国際教育研究の実践と課題	受講生による国際教育の分野の実践に関する諸課題の認識および教育実践上で必要となる手法の学習をテーマとする。 国際教育の分野の実践を進める上での手法を理解し、同手法の活用能力を習得すること、国際教育の分野での実践的な活動および調査で必要となるであろう教材等の作成能力および活用能力を習得することを目標とする。 国際教育に関する分野で活動し、かつ、実践力を高めるため、留学生とともに、同分野で必要とされる調査の計画・実施に関する能力等、必要な知識・技術を獲得する一方で、国際教育に関する理論および課題の理解を進める。また、調査で重要な位置を占める授業実施能力の強化にも重きをおく。また、国際教育の分野で必要となる言語運用能力のうち、日本語もしくはその他の言語における発表能力の基礎を構築する。	
	日本と教育開発	教育と国際協力がどのように関係するかを知るための日本の教育の制度・内容等の概説およびその上で日本・海外における多様な国・地域での教育に関する支援・協力のための思考力・表現力・実践力の育成について学ぶことをテーマとする。 日本の教育の特徴の各分野からのより詳細な概要を理解し、記述すること、本授業での学びを多様な教育に関する支援・協力における学びの基盤として位置づけ、活用することを目標とする。 国際教育に関する分野で活動し、かつ、実践力を高めるため、現在、暮らしている日本という国の教育、あるいは体験してきた日本の教育の制度・内容等を開発途上国の教育開発でなじみのある分野の視点から留学生とともに理解する。そして、開発途上国の教育開発だけでなく、さまざまな国の教育あるいは日本の地域の教育を活性化させるためには何が必要なのかを考察する。	講義 14時間 演習 16時間
	Development of Japan and Educational Issues	「社会および経済的な変化に基づく日本の教育開発」が本授業のテーマである。本授業の目的は、第一に、日本の社会および経済的な変化を英語で理解すること、第二に、日本の教育開発を英語で理解することが挙げられる。以上を通じて、国際教育現場で必要とされる実践的な技能および態度を身に付けることを最終的な目的とする。授業では、国際教育現場で必須とされることとが要求される。つまり、授業で、受講者は社会および経済的な変化に基づいた日本の教育開発についての知識を得るだけでなく、自分自身の意見を構築し、他の受講者とコミュニケーションを行うことが課せられる。	講義 14時間 演習 16時間

日本語教育実践演習	<p>学習者のニーズや能力、四技能に応じた多様な日本語教授法について、実践的に理解し基本的技法を習得する。多様な教授法について受講生間のディスカッションをもとに検討し、学習者に応じて適切な技法を選択できるようになることをめざす。</p> <p>日本語教育の教授法について、歴史的変遷を理解すること、学習者のニーズや能力に応じた教授法の選択ができること、現在多く用いられている日本語教授法について、実践できるようになることを目標とする。</p> <p>日本語教育における教授法の変遷を学ぶ。また、学習者のニーズや能力に応じた教授法の選択について、主な受講生である留学生と日本人受講生とが対話的に学びを深めることにより、母語話者・非母語話者双方の視点の違いを理解する。さらに、現在多く用いられている日本語教授法について、自ら実践する。</p>	
日本語教育方法論	<p>日本語教育で用いられる教材について、教科内容構成の観点から踏まえながら教材研究を行い、各教材の特性と活用法について理解を深めることをテーマとする。日本語能力別の学習項目について理解すること、各教材の利点と欠点について理解すること、日本語教育文法と国語文法との用語や考え方の違いについて理解することを目標とする。</p> <p>日本語教育において用いられている教科書や教材の分析を行う。主な受講生である留学生と日本人受講生とが対話的に学びを深めることにより、母語話者・非母語話者双方の視点の違いを理解しながら、それぞれの教材の利点と欠点について検討し、適切な教材の選び方について考える。またその際、教材や学習者の日本語能力による学習項目の違い、日本語教育文法と日本語文法における用語や考え方の違いについても検討する。</p>	<p>講義 14時間 演習 16時間</p>
日本の歴史と文化	<p>日本の歴史と文化について、基本的な歴史の流れとその内容、地域性と多様性を理解すること、また、女性史・ジェンダー史等の歴史研究の動向を知ること。併せて、年中行事や通過儀礼などについての理解を深めることをテーマとする。</p> <p>日本史の基本的な流れを、地域の歴史をベースに講義する。通史的に縄文時代から近代までを講義するが、特に地域の歴史にとって重要な近世の城と城下町、大名家、町（直江津）と村などを取り上げる。また地域の多様性として、市内の妻太地域、隣接する長野県飯山市の小菅地域という宗教空間に触れ、琉球とアイヌ民族の歴史と文化についても述べていく。併せて、女性史、年中行事、通過儀礼についても取り上げる。</p>	
日本文化演習	<p>日本と地域の歴史と文化について、どのようなアプローチが可能か、実践的に理解すること。また、博物館等を活用して、さまざまな史料やモノ資料についての理解を深め、活用の仕方等の実践的な方法と知見を深めることをテーマとする。埋蔵文化財センターや博物館等を訪問して、史料に関する知見を深め、自ら学んでいくこと。古地図や資料を用いて、実際に町を歩き、近世の町の形成のされ方を学ぶこと。それを通して、近世の町並みや町の個性が、現代のそれらを規定していることを学び、併せて地図や資料の活用方法を獲得すること。また、災害史についての基礎的な知見を獲得し、フィールドで確かめることを目標とする。</p> <p>「日本の歴史と文化」の講義内容をベースに、地域の歴史の重層性を理解し、また上越市内の歴史と文化に関わる施設等を訪問し、知見を深める。さらに、歴史と文化に関する基本的な文献の探し方等を学び、内容を理解する。</p>	
海外教育実践研究A	<p>外国での短期間の滞在を通じて、その国の教育の実態及びその背景をなす文化に直接触れ、自国とは異なる教育の制度・内容等の理解の深化を図り、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図ることを目的とし、オーストラリアにおける教育事情を体験・研究する。</p> <p>授業では、日本の文化・社会・生活等を紹介する、英語で行う授業実践の授業案の作成及び授業案を基にした模擬授業・リハーサル、授業案の改善を行う。現地研修は、本学交流協定校であるウェストミンスター・スクールの協力により、授業参観や英語による授業実践、アデレード及びシドニーでの文化体験学習を行う。事後学習として、報告書の作成、報告会の開催により現地研修の成果を発表する。</p>	隔年
海外教育実践研究B	<p>外国での短期間の生活を通じて、その国の教育の実態及びその背景をなす文化に直接触れ、自国とは異なる教育の制度・内容等の理解の深化を図り、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図ることを目的とし、アメリカ合衆国における教育事情を体験・研究する。</p> <p>授業では、グループごとに日本の文化・社会・生活等を紹介する、英語による授業実践の準備、模擬授業・リハーサル及びその振り返りを行う。現地研修では、本学交流協定校であるアイオワ大学等の協力により、英語による授業実践及び学生・教職員等との交流、ホームステイ体験や文化研修等を行う。事後学習として、報告書の作成、報告会の開催により現地研修の成果を発表する。</p>	隔年
海外教育実践研究C	<p>外国での短期間の生活を通じて、その国の教育の実態及びその背景をなす文化に直接触れ、自国とは異なる教育の制度・内容等の理解の深化を図り、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図ることを目的とし、韓国における教育事情を体験・研究する。</p> <p>授業では、日本の文化・社会・生活等を紹介する、英語で行う授業実践の授業案の作成及び授業案を基にした模擬授業・リハーサル、授業案の改善を行う。現地研修は、本学交流協定校である韓国教員大学校の協力により、同校での学生交流及び同校附属小学校等において授業参観や授業実践を行う。また、ソウルでの文化体験学習を行う。事後学習として、報告書の作成、報告会の開催により現地研修の成果を発表する。</p>	隔年
海外教育実践研究D	<p>外国での短期間の生活を通じて、その国の教育の実態及びその背景をなす文化に直接触れ、自国とは異なる教育の制度・内容等の理解の深化を図り、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図ることを目的とし、台湾における教育事情を体験・研究する。</p> <p>授業では、日本の文化・社会・生活等を紹介する、英語で行う授業実践の授業案の作成及び授業案を基にした模擬授業・リハーサル、授業案の改善を行う。現地研修では、本学交流協定校である国立嘉義大学の協力により、同校附属小学校での見学及び授業実践、同校での学生交流、台北市での学校訪問、文化体験学習を行う。事後学習として、報告書の作成、報告会の開催により現地研修の成果を発表する。</p>	隔年

学校支援プロジェクト科目	学校教育実践研究リフレクション	<p>学校教育実践研究リフレクションⅠ（学校経営・学校心理）</p> <p>学校課題を解決する即応力の基盤となるリフレクションの意義を理解し、その力量を高めることを目標とする。Ⅰでは、まず自身のこれまでの学校経験や問題意識をリフレクションし、教育現場における現代的教育課題の本質をとらえ、「問題は何か」を吟味する基本的な力量を身につけることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （3 安藤 知子／1回） 教師の職能発達プロセスについて授業を行う。 （73 辻村 貴洋／1回）（108 菅原 至／1回） 学校経験のリフレクションとして、現象分析について授業を行う。 （13 大前 敦巳／1回）（3 安藤 知子／1回） 学校経験のリフレクションとして、認識の相対化について授業を行う。 （66 角谷 詩織／1回）（85 堀 健志／1回） 学校経験のリフレクションとして、課題解決のための「問い」へのアプローチについて授業を行う。 （76 野澤 有希／1回）（21 越 良子／1回） 学校経験のリフレクションとして、批判的思考：データの整理・考察について授業を行う。 （80 蜂須賀 洋一／1回）（37 内藤 美加／1回） 学校経験のリフレクションとして、批判的思考：先行研究・事例の検討について授業を行う。 （21 越 良子／9回）（37 内藤 美加／9回）（3 安藤 知子／9回） （13 大前 敦巳／9回）（73 辻村 貴洋／9回）（66 角谷 詩織／9回） （80 蜂須賀 洋一／9回）（108 菅原 至／9回）（85 堀 健志／9回） （76 野澤 有希／9回） 実習先課題と照らし合わせた具体的な実習のための活動計画を立案する。受講者がそれぞれ実習計画の試案を作成し、その試案について全員で吟味検討する授業を行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
	学校教育実践研究リフレクションⅡ（学校経営・学校心理）	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」を実質化するための科目として、学校課題を解決する即応力の基盤となるリフレクションの実際を体験し、その力量を高めることを目標とする。Ⅱでは、実習校での教育課題解決へ向けた協働探求としての実習を効果の高いものとするために必要な、課題を俯瞰的・内省的に捉え直し、意味を共有し、それを具体的・行動的な計画へ結実させるためのリフレクションの基本的スキルを身につけることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （37 内藤 美加／1回）（21 越 良子／1回）（66 角谷 詩織／1回） 現代教育課題（子どもの発達に関する問題）の再定義について授業を行う。 （13 大前 敦巳／1回）（85 堀 健志／1回） 現代教育課題（教育に関する社会的問題）の再定義について授業を行う。 （3 安藤 知子／1回）（73 辻村 貴洋／1回）（80 蜂須賀 洋一／1回） （76 野澤 有希／1回） 現代教育課題（教育に関する制度的・組織的課題）の再定義について授業を行う。 （108 菅原 至／1回）（3 安藤 知子／1回）（73 辻村 貴洋／1回） 現代教育課題（学校と外部諸機関等との連携の在り方）の再定義について授業を行う。 （21 越 良子／11回）（37 内藤 美加／11回）（3 安藤 知子／11回） （13 大前 敦巳／11回）（73 辻村 貴洋／11回）（66 角谷 詩織／11回） （80 蜂須賀 洋一／11回）（108 菅原 至／11回）（85 堀 健志／11回） （76 野澤 有希／11回） 実習先課題と照らし合わせた具体的な活動計画を立案する。受講者がそれぞれに俯瞰的・内省的リフレクションを行い、立案した新たな課題探求・解決方法案については受講メンバー全員で協議検討を行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
	学校教育実践研究リフレクションⅠ（学級経営・授業経営）	<p>本科目は、学級経営・授業経営実践研究領域の1年次に履修する科目である。刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく即応力を培うことを目標とする。そのために、実習での活動計画の立案に加え、学校における（学校支援フィールドワークⅠ）での経験を、反省的に意味づけることにより身につけた知識を用いて臨床的視点から適切に分析する。連携協力校の実態把握をもとに、フィールドワークの課題（教科学習、特別活動、生徒指導・進路指導）を設定する。次に、連携協力校の教育課題に対する支援案を作成し、支援案に基づいた実践（「学校支援フィールドワークⅠ」）を分析する。臨床的視点からの改善策を立案・実施・分析・修正を繰り返す中で、分析する力を確かにする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
	学校教育実践研究リフレクションⅡ（学級経営・授業経営）	<p>本科目は、学級経営・授業経営実践研究領域の2年次に履修する科目である。1年次の「教育臨床リフレクションⅠ」で身につけた臨床的視点から適切に分析する力をもとに、刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく即応力を高度化することを目標とする。そのために、実習での活動計画の立案に加え、学校における実習（学校支援フィールドワークⅡ）での経験を反省的に意味づけることにより、理論的な分析を実践と結びつけ、適切な対処の方向性を立案する。連携協力校の実態把握をもとに、フィールドワークの課題（教科学習、特別活動、生徒指導・進路指導）を設定する。次に、連携協力校の教育課題に対する支援案を作成し、支援案に基づいた実践（「学校支援フィールドワークⅡ」）を分析する。臨床的視点からの改善策を立案・実施・分析・修正を繰り返す中で、理論と実践の架橋・往還・融合を図り、適切な対処の方向性を立案する力を確かにする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同

<p>学校教育実践研究リフレクションⅠ（道徳・進路・生徒指導）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験や課題、個々の探求課題に主体的に取り組み、解決する即応力を身につけ、実習での活動計画の立案に加え、学校実習等での経験を、反省的に意味づけるための科目である。 本学教職大学院における実習や個々の探求課題への取組は、受講者の明確な課題意識の基に進められるものであり、学校運営や学級運営に関わる専門的な「実務実習」に通じるものである。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」と「教育相談」及び「生徒指導」「キャリア教育（進路指導）」の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校教育実践研究リフレクションⅡ（道徳・進路・生徒指導）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験や課題、個々の探求課題に主体的に取り組み、解決する即応力を身につけ、実習での活動計画の立案に加え、学校実習等での経験を、反省的に意味づけるための科目である。 本学教職大学院における実習や個々の探求課題への取組は、受講者の明確な課題意識の基に進められるものであり、学校運営や学級運営に関わる専門的な「実務実習」に通じるものである。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」と「教育相談」及び「生徒指導」「キャリア教育（進路指導）」の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（人文・社会：国語）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での国語科を基幹とした授業計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけることを目的とする。 国語科教育実践における今日的課題を教育実習を通してとらえ直し、教材研究、教材開発、実践開発のあり方について学ぶ。また、実習の活動計画においては、受講者個々の教育実践力、指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。このため、実習中においても実習校の指導教諭とともに、大学側の担当教員が随時指導することも重視する。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、学級経営や生徒指導の視点から省察を行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（人文・社会：国語）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での国語科を基幹とした授業計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、「リフレクションⅠ（国語）」の内容に基づき、さらに反省的に意味づけることを目的とする。 「リフレクションⅠ（国語）」の内容に基づき、国語科教育実践における今日的課題をとらえ直し、教材研究、教材開発、実践開発のあり方について学ぶ。また、実習の活動計画においては、受講者個々の教育実践力、指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。このため、実習中においても実習校の指導教諭とともに、大学側の担当教員が随時指導することも重視する。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、学級経営や生徒指導の視点から省察を行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（人文・社会：英語）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での英語科を基幹とした活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。 本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に教科指導や学校・学年・学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、共通の内容を「教科等の指導」及び「学校・学年・学級経営」とし、新学習指導要領、教科横断や学校・学年・学級経営の視点から省察を行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（人文・社会：英語）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での英語科を基幹とした活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、「リフレクションⅠ（英語）」の内容に基づき、さらに反省的に意味づけるための科目である。 本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に教科指導や学校・学年・学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、共通の内容を「教科等の指導」及び「学校・学年・学級経営」とし、新学習指導要領、教科横断、学校・学年・学級経営の視点から省察を行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（人文・社会：社会）</p>	<p>本科目は、1年次に履修する科目であり、学校現場でのフィールドワークをもとに社会系教科教育等での実践力を培うことを目標とする。そのために、フィールドワークの立案に加え、フィールドワークでの経験を、社会系教科教育の視座から分析し反省的に意味づける。 連携協力校の実態把握をもとに、社会系教科教育の視座から学校支援フィールドワークⅠの課題を設定する。次に、実習における課題に対する支援探究案を作成し、案に基づいた学校支援フィールドワークⅠの実践を分析する。臨床的視点からの改善案の立案・実施・分析・修正を繰り返すことを通して、社会系教科教育等での実践力を高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（人文・社会：社会）</p>	<p>本科目は、2年次に履修する科目であり、1年次の「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（人文・社会：社会）」を踏まえた学校現場でのフィールドワークをもとに社会系教科教育等での実践力をさらに高めることを目標とする。そのために、フィールドワークの立案に加え、フィールドワークでの経験を、社会系教科教育の視座から分析し反省的に意味づける。 連携協力校の実態把握をもとに、社会系教科教育の視座から学校支援フィールドワークⅡの課題を設定する。次に、実習における課題に対する支援探究案を作成し、案に基づいた学校支援フィールドワークⅡの実践を分析する。臨床的視点からの改善案の立案・実施・分析・修正を繰り返すことを通して、社会系教科教育等での実践力をさらに高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（自然科学）（特別）</p>	<p>教職経験を有する者若しくはそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が1年次に履修するもので、一年制プログラムに対応している。学校支援フィールドワークⅠ（特別）に向けての実習課題を探究し、実習計画を立案し、フィールドワークで得た経験を分析し、反省し、フィールドワークⅠで得た成果を確認する。その分析、反省は、実践的力量を高めるためであり、プレゼンテーションⅠにより成果と反省点を発表する。 連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅠ（特別）での実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（自然科学）（特別）</p>	<p>教職経験を有する者若しくはそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が1年次に履修するもので、一年制プログラムに対応している。学校支援フィールドワークⅡ（特別）に向けての実習課題を探究し、実習計画を立案し、フィールドワークで得た経験を分析し、反省し、フィールドワークⅡで得た成果を確認する。その分析、反省は、実践的力量を高めるためであり、プレゼンテーションⅡにより成果と反省点を発表する。 連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅡ（特別）での実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（自然科学：数学）</p>	<p>学校支援フィールドワークⅠ（数学）に向けての実習課題を探究し、実習計画を立案し、フィールドワークで得た経験を分析し、反省し、フィールドワークⅠで得た成果を確認する。その分析、反省は、実践的力量を高めるためであり、プレゼンテーションⅠにより成果と反省点を発表する。 連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅠ（数学）での実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（自然科学：数学）</p>	<p>学校支援課題探究リフレクションⅠ（数学）、学校支援フィールドワークⅠ（数学）、学校支援課題探究プレゼンテーションⅠ（数学）を履修した上で、学校支援フィールドワークⅡ（数学）に向けての実習課題を探究し、実習計画を立案し、フィールドワークで得た経験を分析し、反省し、フィールドワークⅡで得た成果を確認する。その分析、反省は、実践的力量を高めるためであり、プレゼンテーションⅡにより成果と反省点を発表する。 連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅡ（数学）での実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（自然科学：理科）</p>	<p>学校支援フィールドワークⅠに向けての実習課題を探究し、実習計画を立案し、フィールドワークで得た経験を分析し、反省し、フィールドワークⅠで得た成果を確認する。その分析、反省は、実践的力量を高めるためであり、プレゼンテーションⅠにより成果と反省点を発表する。 連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅠでの実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ(自然科学：理科)	教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ(自然科学：理科)，学校支援フィールドワークⅠ，教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ(自然科学：理科)を履修した上で，学校支援フィールドワークⅡに向けての実習課題を探究し，実習計画を立案し，フィールドワークで得た経験を分析し，反省し，フィールドワークⅡで得た成果を確認する。その分析，反省は，実践的力量を高めるためであり，プレゼンテーションⅡにより成果と反省点を発表する。連携協力校の実態把握，用意したフィールドワークの課題，連携協力校との打ち合わせから，実習における課題に対する支援案，課題探究案を作成し，更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅡでの実践を分析，反省する。臨床的観点からの改善点の立案，実施，分析，修正を繰り返すことを通して，実践力を高める。 なお，本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ(自然科学：情報)	実習科目「学校支援フィールドワークⅠ」での経験を，自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため，実習での活動計画の立案に加え，学校における教育実習での経験を反省的に意味づけ，持続的・協働的に教育実践の改善を行う能力と資質を形成することを目標とする。 本学教職大学院における実習は，受講者の明確な課題意識の基に，主体的に学校運営や学級運営に関わり，実習校の責任ある一員として参加する，高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては，受講者個々の指導力の向上だけでなく，所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。また，教員の役割や職務内容を踏まえ，共通に扱われる内容として「情報学」「データサイエンス」「情報コミュニケーション」「プログラミング教育」「ICTを活用した教育」「情報教育」「教育工学」の臨床的視点からの省察を必ず行い，授業実践能力の向上に資するものとする。 なお，本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ(自然科学：情報)	実習科目「学校支援フィールドワークⅡ」での経験を，自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため，実習での活動計画の立案に加え，学校における教育実習での経験を反省的に意味づけ，持続的・協働的に教育実践の改善を行う能力と資質を形成するための科目である。 本学教職大学院における実習は，受講者の明確な課題意識の基に，主体的に学校運営や学級運営に関わり，実習校の責任ある一員として参加する，高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては，受講者個々の指導力の向上だけでなく，所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。また，教員の役割や職務内容を踏まえ，共通に扱われる内容として「情報学」「データサイエンス」「情報コミュニケーション」「プログラミング教育」「ICTを活用した教育」「情報教育」「教育工学」の臨床的視点からの省察を必ず行い，授業実践能力の向上に資するものとする。 なお，本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ(芸術創造：音楽)	学校支援フィールドワークのための科目として，学校現場での諸課題を解決する即応力の基盤となるリフレクションの意義を理解し，その力量を高めることを目標とする。Ⅰでは，まず自身のこれまでの学校経験や専門領域で培った経験や知識をもとに問題意識をリフレクションし，教育現場における現代的教育課題の本質をとらえつつ，芸術教科の特性から「問題は何か」を吟味し，支援に結びつけていく基本的な力を身につけることを到達目標とする。 学校支援フィールドワークのための準備として，まずリフレクションの意義と方法を理解する。その上で，連携協力校の実態を把握し，プレ調査を通してその課題を分析する。さらにそこから得られた諸課題について，全体リフレクションやグループワークを通して深めていく。後半では，その内容をもとにそれぞれの研究内容について発表を通して共有する。 なお，本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ(芸術創造：音楽)	学校支援フィールドワークのための科目として，学校現場での諸課題を解決する即応力の基盤となるリフレクションの意義を理解し，その力量を高めることを目標とする。Ⅱでは，1年次で行なった学校支援フィールドワークⅠをもとに，さらに実習を効果の高いものとするために必要な課題を捉え直すことを通して，それを具体的・行動的な計画へ結実させるためのリフレクションの基本的スキルを身につけることを到達目標とする。 学校支援フィールドワークのために，まず1年次で行った学校支援フィールドワークⅠを振り返ることで，支援方法や内容の捉え直しを行う。その上で，連携協力校の実態を把握し，プレ調査を通して実習を効果の高いものとするために必要な課題を設定する。さらにそこから得られた諸課題について，全体リフレクションやグループワークを通して深めていく。後半では，その内容をもとにそれぞれの研究内容について発表を通して共有する。 なお，本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ(芸術創造：美術)	本科目は，芸術創造・美術の1年次に履修する科目である。実習科目「学校支援フィールドワークⅠ」と関連づけられた専攻科目であり，実践的課題を探究してゆく構想力を培うことを目標とする。実習計画の立案，実習経験を反省的に意味づけるための振り返り，成果の確認と課題等を行う。 連携協力校の実態把握をもとに，「学校支援フィールドワークⅠ」の課題(教科学習，課外活動，部活動等の場面)を設定し，図画工作科・美術科に関する教育課題を踏まえた実習計画の立案，支援策に基づいた実践，実習経験の振り返り，成果の確認等を事前・事中・事後を通して継続的にい行い都度分析し，検討していく。 なお，本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同

教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（芸術創造：美術）	<p>本科目は、芸術創造・美術の2年次に履修する科目である。実習科目「学校支援フィールドワークⅡ」と関連づけられた専攻科目であり、実践的課題を探究してゆく構想力の高度化を目標とする。1年次の「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ」で得た経験を踏まえた実習計画の立案、実習の省察、成果の確認を理論的な分析を基に意味づけし客体化を図る。</p> <p>連携協力校の実態把握をもとに、「学校支援フィールドワークⅡ」の課題（教科学習、課外活動、部活動等の場面）を設定し、図画工作科・美術科に関する教育課題を踏まえた実習計画の立案、支援策に基づいた実践、実習経験の振り返り、成果の確認等を事前・事中・事後を通して継続的に行い都度分析し、検討していく。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（生活・健康：保健体育）	<p>刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく即応力を培うことを目標とする。そのため、実習での活動計画の立案に加え、学校における実習（学校支援フィールドワークⅠ）での実践経験について、随時、体育科学的観点からの「分析」や反省的に意味づける「省察」を行い、経験的知識として蓄積して、次の教育実践に活かすことを具体的なテーマとする。</p> <p>連携協力校等の実態把握をもとに、フィールドワークの課題（体育科の学習指導、運動部活動指導等）を設定する。次に、連携協力校等の教育課題に対する支援策を作成し、支援策に基づいた実践（学校支援フィールドワーク）を分析する。改善策を立案-実施-分析や省察-修正を繰り返す中で、分析や省察する能力を高め、経験的知識に基づいた即応力を培う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（生活・健康：保健体育）	<p>1年次の「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（保健体育）」で身につけた体育科学的観点から適切に分析・省察する力をもとに、刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく即応力を高度化することを目標とする。そのために、実習での活動計画の立案に加え、学校における実習（学校支援フィールドワークⅡ）での実践経験を反省的に意味づけることにより、理論的な分析や省察を実践と結びつけ、適切な対処の方向性をもつ支援を立案する。</p> <p>連携協力校等の実態把握をもとに、フィールドワークの課題（体育科の学習指導、運動部活動指導等）を設定する。次に、連携協力校等の教育課題に対する支援策を作成し、支援策に基づいた実践（学校支援フィールドワーク）を分析・省察する。改善策を立案-実施-分析・省察-修正を繰り返す中で、理論と実践の架橋・住選・融合を図り、適切な対処の方向性をもつ支援を立案する力を確かなものとする。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（生活・健康：技術）	<p>実習科目「学校支援フィールドワークⅠ」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を反省的に意味づけ、持続的・協働的に教育実践の改善を行う能力と資質を形成するための科目である。</p> <p>受講者個々の実践的指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、設計（計画）、製作（制作・育成）、教材開発、他教科等との連携、学習評価の視点から技術教育の学習活動の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（生活・健康：技術）	<p>実習科目「学校支援フィールドワークⅡ」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を反省的に意味づけ、持続的・協働的に教育実践の改善を行う能力と資質を形成するための科目である。</p> <p>受講者個々の実践的指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、設計（計画）、製作（制作・育成）、教材開発、他教科等との連携、学習評価の視点から技術教育の学習活動の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（生活・健康：家庭）	<p>フィールドワークⅠに向けての実習課題を探究し、実習計画を立案する。フィールドワークⅠで得た経験を省察・分析し、プレゼンテーションⅠでその成果と課題点を提示する。</p> <p>連携協力校の実態把握やフィールドワークⅠの課題設定を考慮し、課題に対する支援策・探究案を作成する。それらの案に基づいた実践をフィールドワークⅠにおいて行い、その結果について省察・分析する。臨牀的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（生活・健康：家庭）	<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（生活・健康：家庭）及びプレゼンテーションⅠ（生活・健康：家庭）を履修した上で、フィールドワークⅡに向けての実習課題を探究し、実習計画を立案する。フィールドワークⅡで得た経験を省察・分析し、プレゼンテーションⅡでその成果と課題点を提示する。</p> <p>連携協力校の実態把握やフィールドワークⅡの課題設定を考慮し、課題に対する支援策・探究案を作成する。それらの案に基づいた実践をフィールドワークⅡにおいて行い、その結果について省察・分析する。臨牀的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同

<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（教科横断・総合学習：教科横断・探究的学習）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。 本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、共通の内容を「教科学習」及び「学年・学級経営」「生徒指導」とし、新学習指導要領、教科横断・探究的学習等の視点から省察を行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（教科横断・総合学習：教科横断・探究的学習）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。 本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、教員の役割や職務内容を踏まえ、共通の内容を「教科学習」及び「学年・学級経営」「生徒指導」とし、新学習指導要領、教科横断・探究的学習等の視点から省察を行い、授業実践能力の向上に資するものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（教科横断・総合学習：グローバル・総合）</p>	<p>持続可能な社会の創り手・担い手の育成に向けた「学校支援フィールドワークⅠ」で学修した国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生に向けた取組、ICT、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメント等について、個人・協働で省察を行い、実践の知を導出することをテーマとする。 持続可能な社会の創り手・担い手を育てる学校や地域での取り組みを、国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生、ICTの利活用、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメントの視座から分析・考察し、協働的な探究活動を通じて、具体的な省察と提案ができることを目標とする。 共通に扱われる内容として「教育のグローバル化に関する課題（国際理解教育、異文化コミュニケーション、多文化共生）」「ICTの利活用」「生活科」「総合的な学習の時間」「カリキュラム・マネジメント」の視座からの分析・考察・省察を行う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（教科横断・総合学習：グローバル・総合）</p>	<p>持続可能な社会の創り手・担い手の育成に向けた「学校支援フィールドワークⅡ」で学修した国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生に向けた取組、ICT、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメント等について、個人・協働で省察を行い、実践の知を導出することをテーマとする。 持続可能な社会の創り手・担い手を育てる学校や地域での取り組みを、国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生、ICTの利活用、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメントの視座から分析・考察し、協働的な探究活動を通じて、具体的な省察と提案ができることを目標とする。 共通に扱われる内容として「教育のグローバル化に関する課題（国際理解教育、異文化コミュニケーション、多文化共生）」「ICTの利活用」「生活科」「総合的な学習の時間」「カリキュラム・マネジメント」の視座からの分析・考察・省察を行う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>発達支援教育実践研究リフレクションⅠ（特別支援教育）</p>	<p>特別な支援が必要な子どもが在籍する教育現場の状況を把握し、適切に対応しながら特別支援教育を実践していく即応力を養う。そのために、実習での活動計画立案に加え、学校支援フィールドワークⅠでの経験を反省的に意味づける。 連携協力校等の実態把握をもとに、フィールドワークの課題（障害のある子どもの理解と理解に基づいた学校・学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の向上等）を設定する。次に連携協力校等の課題に対する支援案を作成して、それに基づいた実践（学校支援フィールドワーク）を分析する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>発達支援教育実践研究リフレクションⅡ（特別支援教育）</p>	<p>発達支援教育実践研究リフレクションⅠの学びを生かし、特別な支援が必要な子どもが在籍する教育現場の状況を把握し、適切に対応しながら特別支援教育を実践していく即応力を高度化する。そのために、実習での活動計画立案に加え、学校支援フィールドワークⅡでの経験を反省的に意味づける。 連携協力校等の実態把握をもとに、フィールドワークの課題（障害のある子どもの理解と理解に基づいた学校・学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の向上等）を設定する。次に連携協力校等の課題に対する支援案を作成して、それに基づいた実践（学校支援フィールドワークⅡ）を分析する。そして改善策の立案・実施・分析・修正を繰り返す中で理論と実践の往還を図り、適切な対処の方向性を立案する力を養う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>発達支援教育実践研究リフレクションⅠ（幼年教育）</p>	<p>幼年教育領域における1年次履修の科目である。学校支援フィールドワークⅠに向けた課題の設定、実施計画の作成、フィールドワークから得た経験の反省的意味づけを通して、教育・保育の実地に即した思考力、実践力の基礎を培う。 連携協力校園の実態把握に基づき、フィールドワークの課題を設定し、連携協力校園と打ち合わせながら、教育課題に対する支援案を作成する。また、支援案に基づいた実践（「学校支援フィールドワークⅠ」）を分析し、臨牀的視点から改善案の立案・実施・分析・修正を繰り返すことを通して、思考力と実践力を身に付ける。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

		発達支援教育実践研究リフレクションⅡ (幼年教育)	<p>幼年教育領域における2年次履修の科目である。学校支援フィールドワークⅠ、発達支援教育実践研究リフレクションⅠ (幼年教育) の成果を踏まえ、学校支援フィールドワークⅡに向けた課題の設定、実施計画の作成、フィールドワークから得た経験の反省的意味付けを通して、教育・保育の実地に即したより高度な思考力、実践力を培う。</p> <p>連携協力校園の実態把握に基づき、フィールドワークの課題を設定し、連携協力校園と打ち合わせながら、教育課題に対する支援案を作成する。また、支援案に基づいた実践(「学校支援フィールドワークⅡ」)を分析し、臨床的視点から改善案の立案・実施・分析・修正を繰り返すことを通して、高度な思考力と実践力を身に付ける。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
		発達支援教育実践研究リフレクションⅠ (学校ヘルスケア)	<p>本科目は、発達支援教育実践研究コース (学校ヘルスケア領域) の1年次に履修する科目である。刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく即応力を培うことを目標とする。そのために、実習での活動計画の立案に加え、学校における学校支援フィールドワークⅠでの経験を反省的に意味づけることにより身につけた知識を用いて臨床的視点から適切に分析する。</p> <p>連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅠでの実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
		発達支援教育実践研究リフレクションⅡ (学校ヘルスケア)	<p>発達支援教育実践研究リフレクションⅠ (学校ヘルスケア)、学校支援フィールドワークⅠ、発達支援教育実践研究プレゼンテーションⅠ (学校ヘルスケア) を履修した上で、学校支援フィールドワークⅡに向けての実習課題を探究し、実習計画を立案し、フィールドワークで得た経験を分析し、反省し、フィールドワークⅡで得た成果を確認する。その分析、反省は、実践的力を高めるためであり、プレゼンテーションⅡにより成果と反省点を発表する。</p> <p>連携協力校の実態把握、用意したフィールドワークの課題、連携協力校との打ち合わせから、実習における課題に対する支援案、課題探究案を作成し、更にそれら案に基づいた学校支援フィールドワークⅡでの実践を分析、反省する。臨床的観点からの改善点の立案、実施、分析、修正を繰り返すことを通して、実践力を高める。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
学校支援課題探究プレゼンテーション	学校教育実践研究コース	学校教育実践研究プレゼンテーションⅠ (学校経営・学校心理)	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験によって学んでいる事柄を意味づけ、特定の現代教育課題に関する問題把握の深化や、学校での課題解決の可能性について論点を整理しつつ明快に説明し、広く共有するためのプレゼンテーション能力を高めることを目標とする。Ⅰでは、まず自身の学校支援フィールドワークでの経験を記述し、データ化して現象を整理し、客観的に捉え直すための基本的な方法論を学び、実践できる力を身につけることを到達目標とする。本授業ではまずテーマに依存しないプレゼンテーションの意義、必要性、及び今日的なプレゼンテーション技法の特色等を共通に学び、第二に各受講者のテーマに即した実際の支援/課題探求の経過を分析的に整理し、他者と共有するために必要な論点の抽出や構造化の演習を行う。第三に、実習校単位、課題テーマ単位でのグループによるプレゼンテーション資料を作成するグループワークを行い、実際に試行する。これらを通して自身の課題探求内容を外化し、学校課題の解決に向けて他者と共有していくためのプレゼンテーション力を育成する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
		学校教育実践研究プレゼンテーションⅡ (学校経営・学校心理)	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験によって学んでいる事柄を意味づけ、特定の現代教育課題に関する問題把握の深化や、学校での課題解決の可能性について論点を整理しつつ明快に説明し、広く共有するためのプレゼンテーション能力を高めることを目標とする。Ⅱでは、これまでのリフレクション、フィールドワーク、プレゼンテーションのサイクルを踏まえて、最終的な学修成果をまとまりのある研究知見とし、広く報告・公表していくための思考力とアカウンタビリティ能力を獲得することを到達目標とする。1年次からの学校支援リフレクション、フィールドワーク、プレゼンテーションの各科目の関連性を意識し、総合的に実際の支援/課題探求の経過を分析・考察し、他者と共有するために必要な論点の抽出や構造化を行う。最終的には各受講者のテーマに即したプレゼンテーションと実習校単位、課題テーマ単位でのグループによるプレゼンテーションの資料を作成し、学修成果発表会でプレゼンテーションを行う。これらを通して自身の課題探求内容を外化し、学校課題の解決に向けて他者と共有していくためのプレゼンテーション力を高める。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
		学校教育実践研究プレゼンテーションⅠ (学級経営・授業経営)	<p>本科目は、学級経営・授業経営実践研究領域の1年次に履修する科目である。学校における (学校支援フィールドワークⅠ) での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ。児童生徒の状態や対処すべき問題の状況、問題への対処の方法や意図などについて、臨床的視点から分かりやすく整理し、的確に表現し、それによってフィールドワーク、リフレクションへの還元と、連携協力校等への還元を目標とする。</p> <p>臨床的視点から、児童生徒の状態、対処すべき問題の状況、問題への対処の方法と意図などを、「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の領域で的確に表現し、連携協力校等に還元する。フィールドワークの結果をリフレクションでまとめた結果を実際に発表し、関係者対話しながら改善する科目である。その結果をフィールドワーク、リフレクションに還元する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同

<p>学校教育実践研究プレゼンテーションⅡ (学級経営・授業経営)</p>	<p>1年次の、「学校支援フィールドワークⅠ」、「学校教育実践研究リフレクションⅠ」、「学校教育実践研究プレゼンテーションⅠ」での学びを発展する。学校における「学校支援フィールドワークⅠ」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ。児童生徒の状態や対処すべき問題の状況、問題への対処の方法や意図などについて、臨床的視点から分かりやすく整理し、的確に表現し、それによってフィールドワーク、リフレクションへの還元と、連携協力校等への還元を目標とする。 臨床的視点から、児童生徒の状態、対処すべき問題の状況、問題への対処の方法と意図などを、「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の領域で的確に表現し、連携協力校等に還元する。フィールドワークの結果をリフレクションでまとめた結果を実際に発表し、関係者と対話しながら改善し、その結果をフィールドワーク、リフレクションに還元する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>	
<p>学校教育実践研究プレゼンテーションⅠ (道徳・進路・生徒指導)</p>	<p>1年次に履修する科目である。学校における(学校支援フィールドワークⅠ)での経験や個々の探求課題を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ。児童生徒の状態や対処すべき問題の状況、問題への対処の方法や意図などについて、臨床的視点から分かりやすく整理し、的確に表現し、それによってフィールドワーク、リフレクションへの還元と、連携協力校等への還元を目標とする。 臨床的視点から、児童生徒の状態、対処すべき問題の状況、問題への対処の方法と意図などを「道徳」「生徒指導」「キャリア教育」「教育相談」等の領域的視点、「教科」「特別な教科道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」等の授業としての視点で、適切かつ的確に表現し、連携協力校等に還元する。さらに、フィールドワークの結果をリフレクションでまとめた結果を実際に発表し、関係者と対話しながら改善する科目である。その結果をフィールドワーク、リフレクションに還元する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>	
<p>学校教育実践研究プレゼンテーションⅡ (道徳・進路・生徒指導)</p>	<p>1年次の、「学校支援フィールドワークⅠ」、「学校教育実践研究リフレクションⅠ(道徳・進路・生徒指導)」、「学校教育実践研究プレゼンテーションⅠ(道徳・進路・生徒指導)」での学びを発展する。学校における(学校支援フィールドワークⅠ)での経験や個々の探求課題を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ。児童生徒の状態や対処すべき問題の状況、問題への対処の方法や意図などについて、臨床的視点から分かりやすく整理し、的確に表現し、それによってフィールドワーク、リフレクションへの還元と、連携協力校等への還元を目標とする。 臨床的視点から、児童生徒の状態、対処すべき問題の状況、問題への対処の方法と意図などを「道徳」「生徒指導」「キャリア教育」「教育相談」等の領域的視点、「教科」「特別な教科道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」等の授業としての視点で、適切かつ的確に表現し、連携協力校等に還元する。さらに、フィールドワークの結果をリフレクションでまとめた結果を実際に発表し、関係者と対話しながら改善する科目である。その結果をフィールドワーク、リフレクションに還元する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>	
<p>教科教育・教科複合実践研究コース</p>	<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ (人文・社会：国語)</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を踏まえ、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を伝えることによって知見を深めるものである。本実習では、受講者の明確な課題意識の基に、国語科における授業づくりに加え、学校運営や学級運営に主体的に関わることが求められており、また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が本科目に組み込まれているため、この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行うことを目標とする。 教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として、「国語学習」及び「学年・学級経営」「生徒指導」の省察に関するプレゼンテーションを含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
	<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ (人文・社会：国語)</p>	<p>「教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うことを目的としている。また、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験、並びに、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を伝えることによって学ぶ科目でもある。本実習では、受講者の明確な課題意識の基に、国語科における授業づくりに加え、学校運営や学級運営に主体的に関わることが求められており、また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が本科目に組み込まれているため、この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行うことを目標とする。教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として、「国語学習」及び「学年・学級経営」「生徒指導」の省察に関するプレゼンテーションを含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
	<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ (人文・社会：英語)</p>	<p>1年次に履修する科目であり、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を踏まえ、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を伝えることによって理解を深めるものである。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に教科等の指導や学校・学年・学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。 また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行い、併せてより高次のプレゼンテーションの技能を培うことを目標とする。教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「教科学習」や「学校・学年・学級経営」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（人文・社会：英語）</p>	<p>2年次に履修する科目であり、「教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（人文・社会：英語）」を踏まえ、より深い省察を行うことを目的としている。また、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験、並びに、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を伝えることによって学ぶ科目でもある。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に教科等の指導や学校・学年・学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。さらには、受講者個々の指導力・分析能力の向上だけでなく、所属する学校全体あるいは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「教科学習」や「学校・学年・学級経営」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（人文・社会：社会）</p>	<p>本科目は、1年次に履修する科目であり、学校現場でのフィールドワークでの経験をリフレクション科目で反省的に意味づけた結果をプレゼンテーションすることを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認することを目標とする。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し表現することで、自身の実践力を高めるとともに、連携協力校等へ成果還元を図る。臨床的観点から、「学校支援フィールドワークⅠ」と「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（人文・社会：社会）」で得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方などの反省的成果を多面的・多角的かつ的確に表現し、プレゼンテーションする。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（人文・社会：社会）</p>	<p>本科目は、2年次に履修する科目である。1年次のフィールドワーク、リフレクション、プレゼンテーションを踏まえ、2年次のフィールドワークの経験をリフレクションで反省的に意味づけた結果をプレゼンテーションすることを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認することを目標とする。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し表現することで、自身の実践力をさらに高めるとともに、連携協力校等へ成果還元を図る。臨床的観点から、「学校支援フィールドワークⅡ」と「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（人文・社会：社会）」で得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方などの反省的成果を多面的・多角的かつ的確に表現し、プレゼンテーションする。フィールドワーク、リフレクションで得た成果の最終的なプレゼンテーションである。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（自然科学）（特別）</p>	<p>教職経験を有する者若しくはそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が1年次に履修するもので、一年制プログラムに対応している。学校での学校支援フィールドワークⅠ（特別）での経験と学校支援課題研究リフレクションⅠ（自然科学）（特別）で反省した結果をプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークで経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（自然科学）（特別）</p>	<p>この科目は、教職経験を有する者若しくはそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が1年次に履修するもので、一年制プログラムに対応している。学校支援フィールドワークⅠ、リフレクションⅠ（自然科学）（特別）、プレゼンテーションⅠ（自然科学）（特別）を履修した上で、学校支援フィールドワークⅡでの経験とリフレクションⅡで反省した結果をプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークで経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。フィールドワーク、リフレクションで得た成果の最終的なプレゼンテーションである。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（自然科学：数学）</p>	<p>学校支援フィールドワークⅠでの経験と教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠとで反省した結果をプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（自然科学：数学）</p>	<p>学校支援フィールドワークⅠ（数学）、教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（数学）、教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（数学）を履修した上で、学校支援フィールドワークⅡでの経験と学校支援課題研究リフレクションⅡで反省した結果とをプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。フィールドワーク、リフレクションで得た成果の最終的なプレゼンテーションである。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ(自然科学：理科)</p>	<p>学校での学校支援フィールドワークⅠでの経験と教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ(自然科学：理科)とで反省した結果をプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ(自然科学：理科)</p>	<p>学校支援フィールドワークⅠ、教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ(自然科学：理科)、教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ(自然科学：理科)を履修した上で、学校支援フィールドワークⅡでの経験と教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡで反省した結果とをプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。 臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状態、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。フィールドワーク、リフレクションで得た成果の最終的なプレゼンテーションである。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ(自然科学：情報)</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、児童生徒の学習の臨床過程に基づく授業とカリキュラムの改善と運営に主体的に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。 教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「情報学」「データサイエンス」「情報コミュニケーション」「プログラミング教育」「ICTを活用した教育」「情報教育」「教育工学」の臨床的省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ(自然科学：情報)</p>	<p>「プレゼンテーションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うものとし、「学校支援フィールドワーク」での経験を、リフレクションで反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。本学における学校実習は、受講者の明確な課題意識の基に、児童生徒の学習の臨床過程に基づく授業とカリキュラムの改善と運営に主体的に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。 教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「情報学」「データサイエンス」「情報コミュニケーション」「プログラミング教育」「ICTを活用した教育」「情報教育」「教育工学」の臨床的省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ(芸術創造：音楽)</p>	<p>「学校支援フィールドワーク」で行なった活動や経験を意味づけ、一般的・普遍的な視座からその活動や経験を捉え返し、プレゼンテーションすることで、現代の教育課題や学校現場での課題の可能性について、問題を的確に把握し、論点を整理する力を深めるとともに、新たな課題解決法やその方向性を見出す能力を高めることを目指す。Ⅰでは、個人が各自のフィールドワークの概要とそこで得た知見を記述し、現象を整理・テキスト化して客観的に捉え直すための基本的な方法論を学ぶこと、それをグループとしての活動につなげていくための協働力を養い、プレゼンテーションを行うための基礎的な力を身につけることを目標とする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ(芸術創造：音楽)</p>	<p>「学校支援フィールドワーク」で行なった活動や経験を意味づけ、一般的・普遍的な視座からその活動や経験を捉え返し、プレゼンテーションすることで、現代の教育課題や学校現場での課題の可能性について、問題を的確に把握し、論点を整理する力を深めるとともに、新たな課題解決法やその方向性を見出す能力を高めることを目指す。Ⅱでは、これまでのリフレクション、フィールドワーク、プレゼンテーションのサイクル全体を踏まえ、最終的な学修成果をまとまりのある研究知見とし、広く報告・公表していくための高度な論理的思考力・プレゼンテーション構成能力、同遂行能力を習得することを到達目標とする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ(芸術創造：美術)</p>	<p>本科目は、1年次に履修する科目である。実習科目「学校支援フィールドワークⅠ」と関連づけられた専攻科目であり、「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ」で省察した実習での経験を伝え意味付けることで実践力を培うことを目標とする。実習の省察から導きだされた課題に対する支援策について、検討した結果を客体化し協定校への還元を目指す。 「学校支援フィールドワークⅠ」で設定された図画工作科・美術科に関する教育課題およびその領域(教科学習、課外活動、部活動等の場面)を踏まえた実習計画や、支援策に基づいた実践、実習経験の振り返りから得られた成果についてリフレクションを通して明確化し、プレゼンテーションする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（芸術創造：美術）	<p>本科目は、2年次に履修する科目である。実習科目「学校支援フィールドワークⅡ」と関連づけられた専攻科目であり、「教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ」で省察した実習での経験を伝え、意味付けることで実践力の高度化を目標とする。実習の省察から導きだされた課題に対する支援策について、検討した結果を客体化し協定校への還元を目指す。</p> <p>「学校支援フィールドワークⅡ」で設定された図画工作科・美術科に関する教育課題、およびその領域（教科学習、課外活動、部活動等の場面）を踏まえた実習計画や、支援策に基づいた実践、実習経験の振り返りから得られた成果についてリフレクションを通して明確化し、プレゼンテーションする。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（生活・健康：保健体育）	<p>学校における実習（学校支援フィールドワークⅠ）での経験を、リフレクション科目で分析や省察した結果を伝えることによって学ぶ。児童生徒の状態や教科・運動部活動の組織運営等における対処すべき問題の状況、問題への対処の方法や意図などについて、体育科学的観点から分かりやすく整理し、的確に表現することを目標とする。</p> <p>体育科学的観点から、児童生徒の状態や教科・部活動の組織運営における対処すべき問題の状況、問題への対処の方法と意図などを「教科の学習指導」及び「運動部活動指導」についての的確に表現し、連携協力校等に還元する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（生活・健康：保健体育）	<p>1年次の「教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ」で身に付けた的確に表現する力をもとに、学校における実習（学校支援フィールドワークⅡ）での経験を、リフレクション科目で分析や省察した結果を伝えることによって学ぶ。児童生徒の状態や教科・運動部活動の組織運営等における対処すべき問題の状況、問題への対処の方法や意図などについて、体育科学的観点から分かりやすく整理・表現し、相手に応じた適切な表現方法や伝達方法を用いることを目標とする。</p> <p>体育科学的観点から、児童生徒の状態や教科・部活動の組織運営等における対処すべき問題の状況、問題への対処の方法と意図などを「教科の学習指導」及び「運動部活動指導」についての的確に表現し、説明する相手に応じた適切な表現方法や伝達方法を用いて、連携協力校等に還元する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（生活・健康：技術）	<p>本科目は、実習科目「学校支援フィールドワークⅠ」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、児童生徒の学習の臨床過程に基づく授業とカリキュラムの改善と運営に主体的に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。</p> <p>教員の役割や職務内容を踏まえ、設計（計画）、製作（制作・育成）、教材開発、他教科等との連携、学習評価の視点から技術教育の学習活動における臨床的省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（生活・健康：技術）	<p>本科目は、実習科目「学校支援フィールドワークⅡ」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、児童生徒の学習の臨床過程に基づく授業とカリキュラムの改善と運営に主体的に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。</p> <p>教員の役割や職務内容を踏まえ、設計（計画）、製作（制作・育成）、教材開発、他教科等との連携、学習評価の視点から技術教育の学習活動における臨床的省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（生活・健康：家庭）	<p>フィールドワークⅠでの経験と、教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（生活・健康：家庭）での演習内容をプレゼンテーションし、議論・討議を通して、フィールドワークⅠで得られた成果を明確化する。フィールドワークⅠでの経験を臨床的観点から整理・表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。フィールドワークⅠとリフレクションⅠで得られた成果や課題についてプレゼンテーションを行い、それに対して臨床的観点からの議論・討議を行う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（生活・健康：家庭）	<p>教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅠ（生活・健康：家庭）及びプレゼンテーションⅠ（生活・健康：家庭）を履修した上で、フィールドワークⅡでの経験と、教科教育・教科複合実践研究リフレクションⅡ（生活・健康：家庭）での演習内容をプレゼンテーションし、議論・討議を通して、フィールドワークⅡで得られた成果を明確化する。フィールドワークⅡでの経験を臨床的観点から整理・表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。フィールドワークⅡとリフレクションⅡで得られた成果や課題についてプレゼンテーションを行い、それに対して臨床的観点からの議論・討議を行う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同

<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（教科横断・総合学習：教科横断・探究的学習）</p>	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を踏まえ、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を伝えることによって理解を深めるものである。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行い、併せてより高次のプレゼンテーションの技能を培うことを目標とする。 教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「教科学習」及び「学年・学級経営」「生徒指導」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（教科横断・総合学習：教科横断・探究的学習）</p>	<p>「教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うことを目的としている。また、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験、並びに、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を伝えることによって学ぶ科目でもある。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。さらには、受講者個々の指導力・分析能力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。 教員の役割や職務内容を踏まえ、共通に扱われる内容として「教科学習」及び「学年・学級経営」「生徒指導」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅠ（教科横断・総合学習：グローバル・総合）</p>	<p>持続可能な社会の創り手・担い手の育成に向けた「学校支援フィールドワーク」で学修し、リフレクション科目で省察した結果を、国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生に向けた取組、ICT、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメント等の視座からまとめ、他者に公表することをテーマとする。 持続可能な社会の創り手・担い手を育てる学校や地域での取り組みを、国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生、ICTの利活用、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメントの視座から分析・考察した結果を他者に分かりやすく発表することを目標とする。 実習科目「学校支援フィールドワークⅠ」での経験を、リフレクション科目等で省察し、その結果を、他者に伝えることによって学修を深める。本学における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、児童生徒の学習に基づく授業とカリキュラムの改善と運営に主体的に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、所属する学級・学年・学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>教科教育・教科複合実践研究プレゼンテーションⅡ（教科横断・総合学習：グローバル・総合）</p>	<p>持続可能な社会の創り手・担い手の育成に向けた「学校支援フィールドワーク」で学修し、リフレクション科目で省察した結果を、国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生に向けた取組、ICT、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメント等の視座からまとめ、他者に公表することをテーマとする。 持続可能な社会の創り手・担い手を育てる学校や地域での取り組みを、国際理解教育や異文化コミュニケーション、多文化共生、ICTの利活用、生活科、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメントの視座から分析・考察した結果を他者に分かりやすく発表することを目標とする。 実習科目「学校支援フィールドワークⅡ」での経験を、リフレクション科目等で省察し、その結果を、他者に伝えることによって学修する科目である。本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、児童生徒の学習に基づく授業とカリキュラムの改善と運営に主体的に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学級・学年・学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>発達支援教育実践研究プレゼンテーションⅠ（特別支援教育）</p>	<p>学校支援フィールドワークⅠでの経験を、リフレクションⅠで反省的に意味づけた結果を伝えることによって学ぶ。本学における学校実習フィールドワークは受講者の明確な課題意識のもと、主体的に学校・学級運営や児童生徒の指導に関わり、連携協力校等の責任ある一員として参加する高度で専門的な実習である。また受講者個々の指導力向上だけでなく、連携協力校或いは地域の学校全体の教育力充実につながる視点が組み込まれている。本科目ではこの趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。 連携協力校等や受講者によって課題が異なるため、実習やリフレクションの内容はさまざまであるが、特別支援教育のフィールドワークの課題として挙げられる「障害のある子どもの理解と理解に基づいた学校・学級経営力」、「授業計画力」、「授業指導力」、「授業分析力」の向上等に関する省察を含むプレゼンテーションとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

			発達支援教育実践研究 プレゼンテーションⅡ (特別支援教育)	プレゼンテーションⅠを踏まえてより深い省察を行い、学校支援フィールドワークでの経験をリフレクションⅠで反省的に意味づけた結果を伝えることによって学ぶ。本学における学校実習フィールドワークは受講者の明確な課題意識のもと、主体的に学校・学級運営や児童生徒の指導に関わり、連携協力校等の責任ある一員として参加する高度で専門的な実習である。また受講者個々の指導力向上だけでなく、連携協力校あるいは地域の学校全体の教育力充実につながる視点が組み込まれている。 連携協力校等や受講者によって課題が異なるため、実習やリフレクションの内容はさまざまであるが、特別支援教育のフィールドワークの課題として挙げられる「障害のある子どもの理解と理解に基づいた学校・学級経営力」、「授業計画力」、「授業指導力」、「授業分析力」の向上等に関する省察を含むプレゼンテーションとする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
			発達支援教育実践研究 プレゼンテーションⅠ (幼年教育)	学校支援フィールドワークⅠにおける経験と発達支援教育実践研究リフレクションⅠ(幼年教育)で反省した結果を発表し、交流することを通して、フィールドワークで得た成果を吟味し、明確なものとする。フィールドワークの経験を臨床的視点から整理するとともに、他者にわかりやすく報告し共有する作業を通して、思考力、実践力の基礎を培う。 フィールドワークとリフレクションから得られた幼児・児童の状況、学校園における教育課題やそれに対する対処の仕方等について、教育・保育実践に関わることを通して得た学習成果を発表し、関係者に還元するとともに、学校園の支援計画の改善点を検討する。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
			発達支援教育実践研究 プレゼンテーションⅡ (幼年教育)	学校支援フィールドワークⅠ、発達支援教育実践研究リフレクションⅠ(幼年教育)の成果を踏まえ、学校支援フィールドワークⅡにおける経験、ならびに発達支援教育実践研究リフレクションⅡ(幼年教育)で反省した結果を発表し、交流することを通して、最終的な成果を吟味し、明確なものとする。フィールドワークの経験を臨床的視点から整理するとともに、他者にわかりやすく報告し共有する作業を通して、より高度な思考力、実践力を培う。 フィールドワークとリフレクションから得られた幼児・児童の状況、学校園における教育課題やそれに対する対処の仕方等について、教育・保育実践に関わることを通して得た学習成果を発表し、関係者に還元するとともに、学校園の支援計画の改善点を検討する。1年次の経験を踏まえチームを主導しながら、2年にわたるフィールドワークとリフレクションの最終成果を反映させたプレゼンテーションを行う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
			発達支援教育実践研究 プレゼンテーションⅠ (学校ヘルスケア)	学校での学校支援フィールドワークⅠでの経験と発達支援教育実践研究リフレクションⅠ(学校ヘルスケア)とで反省した結果をプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。 学校での学校支援フィールドワークⅠでの経験と発達支援教育実践研究リフレクションⅠ(学校ヘルスケア)とで反省した結果をプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
			発達支援教育実践研究 プレゼンテーションⅡ (学校ヘルスケア)	学校支援フィールドワークⅠ、発達支援教育実践研究リフレクションⅠ(学校ヘルスケア)、発達支援教育実践研究プレゼンテーションⅠ(学校ヘルスケア)を履修した上で、学校支援フィールドワークⅡでの経験と学校支援課題研究リフレクションⅡで反省した結果とをプレゼンテーションし、議論することを通して、学校支援フィールドワークで得た成果を明確に確認する。特に、フィールドワークでの経験を臨床的観点から整理し、表現し、自身の実践力を高めることを目標とする。 臨床的観点から、フィールドワークとリフレクションで得た、児童・生徒の状況、学校や授業における課題、課題への対処の仕方など、多方面から実践に係わるための一定の成果を、プレゼンテーションし、議論する。フィールドワーク、リフレクションで得た成果の最終的なプレゼンテーションである。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
実習科目	学校支援プロジェクト科目	学校支援フィールドワーク	学校支援フィールドワークⅠ(ストレート)	本科目は、学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生(ストレート)が、1年次に連携協力校において履修する実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。子ども理解に基づいた授業計画力、授業指導力、授業分析力をテーマとする。 1年次に連携協力校において、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員の養成のため、連携協力校において実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、教員の役割や職務内容を踏まえ、子ども理解に基づいて授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同
			学校支援フィールドワークⅡ(ストレート)	本科目は、学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生(ストレート)が、2年次に連携協力校において履修する実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。子ども理解に基づいた授業計画力、授業指導力、授業分析力をテーマとする。 2年次に連携協力校において、学校の課題解決に取り組む実習科目である。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ(ストレート)」で身につけた子ども理解に基づく授業計画力、授業指導力、授業分析力を踏まえ、学校づくりの有力な一員となり得る新入教員に必要な力量を養う。 なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。	共同

<p>学校支援フィールドワークⅠ（現職）</p>	<p>本科目は、教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが、1年次に連携協力校において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力をテーマとする。</p> <p>1年次に連携協力校において、学校の課題解決に取り組む実習科目である。指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、教員の役割や職務内容を踏まえ、教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた臨床力（学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただ中に身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力）を培う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（現職）</p>	<p>本科目は、教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが、2年次に連携協力校において履修する実習科目である。理論と実践を教育現場に適用する指導的立場の教員に必要な優れた資質能力（特に臨床力）を身につけ、高度化することが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力をテーマとする。</p> <p>2年次に連携協力校において、学校の課題解決に取り組む実習科目である。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（現職）」における理論と実践の架橋・往還・融合を図る学修を踏まえ、指導的立場の教員を育成する。連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、教員の役割や職務内容を踏まえ、教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた臨床力（学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただ中に身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力）を高度化する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（特別）</p>	<p>本科目は、教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが、1年次に連携協力校において履修する実習科目である。教育現場の状況を的確に把握し、他の教員と協働することにより、指導的立場の教員に必要な高度な資質能力（特に協働力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力を協働的視点から高めることをテーマとする。</p> <p>1年次に連携協力校において、学校の課題解決に取り組む実習科目である。指導的立場の教員を育成するため、連携協力校において授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、教員の役割や職務内容を踏まえ、教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた協働力を培う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（特別）</p>	<p>本科目は、教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが、2年次に連携協力校において履修する実習科目である。教育現場の状況を的確に把握し、他の教員と協働しながら適切に対応することにより、指導的立場の教員に必要な高度に優れた資質能力（特に協働力）を身につけることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力を指導的視点から高度化することをテーマとする。</p> <p>2年次（1年制プログラム履修者は1年次）に連携協力校において、学校の課題解決に取り組む実習科目である。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（特別）」における教育現場の状況を的確に把握し、他の教員と協働する学修を踏まえて、指導的立場の教員を育成する。そのために、連携協力校において授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、教員の役割や職務内容を踏まえ、教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた協働力を高度化する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワーク（特別：教育経営）</p>	<p>教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが、1年次において履修する実習科目である。教育経営に関連する様々な組織や機関、地域や民間団体の連携状況を俯瞰し、問題解決につながる戦略を策定する教育経営プロフェッショナルとしての資質能力を育成することが目的である。</p> <p>教育経営プロフェッショナル育成のための実習科目として、学校経営と教育委員会等との関係とともに、その延長線上にある地域社会や関係機関、民間団体との連携を踏まえた教育経営の視点から教育を考察し、将来構想を考えながら今日的な教育課題を解決する資質能力を身に付けることが目標となる。学校経営、教育行政、市民社会等を全体としてとらえる「俯瞰力」、教育組織にかかわる実践のプロセスを冷静に考察する「省察力」、教育組織のビジョンを設定・協働し、地域社会や関係機関と連携しながら目標の達成を目指す「マネジメント力」を育成する。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（視覚障害教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。視覚障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、視覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新人教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、視覚障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>学校支援フィールドワークⅡ（視覚障害応用教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。視覚障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（視覚障害教育臨床実習）（ストレート）」で身につけた視覚障害のある子どもの障害の状態に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新入教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、視覚障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（聴覚障害教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。聴覚障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、聴覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新入教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、知的障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（聴覚障害応用教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。聴覚障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（ストレート）」で身につけた聴覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新入教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、聴覚障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。知的障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、知的障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新入教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、知的障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（知的障害応用教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。知的障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（ストレート）」で身につけた知的障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新入教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、知的障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（肢体不自由教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新入教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。肢体不自由のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、肢体不自由のある子どもの障害の状態に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新入教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、知的障害のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>学校支援フィールドワークⅡ（肢体不自由教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。即戦力となる新人教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。肢体不自由のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。</p> <p>2年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（ストレート）」で身につけた肢体不自由のある子どもの障害の状態に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新人教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、肢体不自由のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（病弱教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>即戦力となる新人教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。病弱のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、病弱のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新人教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、病弱のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅡ（病弱応用教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>即戦力となる新人教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。病弱のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（病弱教育臨床実習）（ストレート）」で身につけた病弱のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新人教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、病弱のある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅠ（特別な教育的ニーズのある子どもの応用教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。特別な教育的ニーズのある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、特別な教育的ニーズのある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新人教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、特別な教育的ニーズのある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（特別な教育的ニーズのある子どもの応用教育臨床実習）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。特別な教育的ニーズのある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（特別な教育的ニーズのある子どもの教育臨床実習）（現職）」で身につけた子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。専門性を備えた特別支援教育の即戦力となる新人教員を養成するため、連携協力校やセンターにおいて実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、特別な教育的ニーズのある子どもの理解に基づいて学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（視覚障害教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。</p> <p>1年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、視覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、視覚障害のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>学校支援フィールドワークⅡ（視覚障害応用教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての視覚障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。</p> <p>1年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（視覚障害教育臨床実習）（現職）」で身につけた視覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、視覚障害のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（聴覚障害教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。</p> <p>1年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、聴覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、聴覚障害のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（聴覚障害応用教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての聴覚障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。</p> <p>1年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（現職）」で身につけた聴覚障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、聴覚障害のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、知的障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、知的障害のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（知的障害応用教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての知的障害のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。</p> <p>連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（現職）」で身につけた知的障害のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、知的障害のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p> <p>なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>学校支援フィールドワークⅠ（肢体不自由教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、1年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。1年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、肢体不自由のある子どもの障害の状態に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、肢体不自由のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（肢体不自由教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修する実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての肢体不自由のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。2年次に連携協力校及びセンターにおいて、学校の課題解決に取り組む実習科目である。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（知的障害教育臨床実習）（現職）」で身につけた肢体不自由のある子どもの障害の状態に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、肢体不自由のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅠ（病弱教育臨床実習）（現職）</p>	<p>理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、病弱のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、病弱のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅡ（病弱応用教育臨床実習）（現職）</p>	<p>理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての病弱のある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（病弱教育臨床実習）（現職）」で身につけた病弱のある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、病弱のある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅠ（特別な教育的ニーズのある子どもの応用教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての特別な教育的ニーズのある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（特別な教育的ニーズのある子どもの教育臨床実習）（現職）」で身につけた特別な教育的ニーズのある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、特別な教育的ニーズのある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>
<p>学校支援フィールドワークⅡ（特別な教育的ニーズのある子どもの応用教育臨床実習）（現職）</p>	<p>教職経験を有する者又はそれに準ずる社会経験を有すると認められる者が、2年次に連携協力校及び特別支援教育実践研究センター（以下、センター）において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。教育実践や学校運営のリーダーとしての特別な教育的ニーズのある子ども理解に基づいた学級経営力、授業計画力、授業指導力、授業分析力、校務の企画・運営能力の修得をテーマとする。連携協力校との協議により、「学校支援フィールドワークⅠ（特別な教育的ニーズのある子どもの教育臨床実習）（現職）」で身につけた特別な教育的ニーズのある子どもの障害の状態（その程度や支援のニーズ等）に即して実習を実施し、必要に応じてセンターを活用して実施する。特別支援教育に関する指導的立場の教員を育成するため、連携協力校の授業・教育研究・校務運営を支援することを通して、特別な教育的ニーズのある子ども理解に基づいた教育実践や、教員の役割や職務内容を踏まえた学校運営のリーダーとしての臨床力を養う。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	<p>共同</p>

<p>学校支援フィールドワークⅠ（養護）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員（養護教諭）としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が1年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員（養護教諭）に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいて養護実践を構築する力、養護実践の展開過程で適切に調整し評価する力をテーマとする。</p> <p>即戦力となる新人教員（養護教諭）の養成のため、連携協力校において実習しながら課題を遂行する中で、養護教諭としての使命感・自覚を身に付けるとともに、自らの役割や職務内容、職責を踏まえ、子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいて養護実践を構築する力、養護実践の展開過程で適切に調整し評価する力を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅡ（養護）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員（養護教諭）としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が2年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員（養護教諭）に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいて養護実践を構築する力、養護実践の展開過程で適切に調整し評価する力をテーマとする。</p> <p>この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（ストレート）」で身につけた子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいて養護実践を構築する力、養護実践の展開過程で適切に調整し評価する力を踏まえ、学校づくりの有力な一員となり得る新人教員（養護教諭）に必要な力量を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅠ（栄養）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員（栄養教諭）としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が1年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員（栄養教諭）に必要な資質能力を身につけさせることが目標である。子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいた食育実践を構築する力、学校における食育を適切に調整し評価する力をテーマとする。</p> <p>即戦力となる新人教員（栄養教諭）の養成のため、連携協力校において実習しながら課題を遂行する中で、栄養教諭としての使命感・自覚を身に付けるとともに、教員（栄養教諭）の役割や職務内容を踏まえ、子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいた食育実践を構築する力、学校における食育を適切に調整し評価する力を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅡ（栄養）（ストレート）</p>	<p>学部段階で教員（栄養教諭）としての基礎的・基本的な資質能力を習得した教職経験のない院生（ストレート）が2年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。即戦力となる新人教員（栄養教諭）に必要な優れた資質能力を高度化し、適切に対応しながら教育実践を展開できるようにすることが目標である。子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいた食育実践を構築する力、学校における食育を適切に調整し評価する力をテーマとする。</p> <p>この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（ストレート）」で身につけた子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいた食育実践を構築する力、学校における食育を適切に調整し評価する力を踏まえ、学校づくりの有力な一員となり得る新人教員（栄養教諭）に必要な力量を養う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅠ（養護）（現職）</p>	<p>教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが1年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員（養護教諭）に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。学校保健活動の中心的な役割を發揮し、学校保健の観点から学校運営に参画するリーダーとして、子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいて養護実践を構築する力、養護実践の展開過程で適切に調整し評価する力、組織マネジメント力をテーマとする。</p> <p>指導的立場の教員（養護教諭）を育成するため、連携協力校の学校保健活動・校務運営・研修等を支援することを通して、教員（養護教諭）の役割や職務内容、職責を踏まえ、学校保健活動の中心的な役割を發揮し、学校保健の観点から学校運営に参画するリーダーとしての子ども理解に基づいた臨床力（学問知と実践知の動的なバランスを保持する力）で、実践のただ中に身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力を培う。</p>	
<p>学校支援フィールドワークⅡ（養護）（現職）</p>	<p>教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが2年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践を教育現場に適用する指導的立場の教員（養護教諭）に必要な優れた資質能力（特に臨床力）を身につけ、高度化することが目標である。学校保健活動の中心的な役割を發揮し、学校保健の観点から学校運営に参画するリーダーとして、子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいて養護実践を構築する力、養護実践の展開過程で適切に調整し評価する力、組織マネジメント力をテーマとする。</p> <p>この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（現職）」における理論と実践の架橋・往還・融合を図る学修を踏まえ、指導的立場の教員（養護教諭）を育成する。</p> <p>そのために、連携協力校の学校保健活動・校務運営・研修等を支援することを通して、教員（養護教諭）の役割や職務内容、職責を踏まえ、学校保健活動の中心的な役割を發揮し、学校保健の観点から学校運営に参画するリーダーとしての子ども理解に基づいた臨床力（学問知と実践知の動的なバランスを保持する力）で、実践のただ中に身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力を高度化する。</p>	

		<p>学校支援フィールドワークⅠ（栄養）（現職）</p> <p>教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが1年次に連携協力校において履修し、学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践の架橋・往還・融合を図り、指導的立場の教員（栄養教諭）に必要な資質能力（特に臨床力）を身につけさせることが目標である。食育実践活動の中心的な役割を發揮し、栄養教育・栄養管理の観点から学校運営に参画するリーダーとして、子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいた食育実践を構築する力、学校における食育を適切に調整し評価する力をテーマとする。指導的立場の教員（栄養教諭）を育成するため、連携協力校の食育実践活動・校務運営・研修等を支援することを通して、教員（栄養教諭）の役割や職務内容、職責を踏まえ、食育実践活動の中心的な役割を發揮し、栄養教育・栄養管理の観点から学校運営に参画するリーダーとしての子ども理解に基づいた臨床力（学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただ中に身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力）を培う。</p>	
		<p>学校支援フィールドワークⅡ（栄養）（現職）</p> <p>教職経験を有するもの又はそれに準ずる社会経験を有すると認められるものが2年次に履修し、連携協力校において学校の課題解決に取り組む実習科目である。理論と実践を教育現場に適用する指導的立場の教員（栄養教諭）に必要な優れた資質能力（特に臨床力）を身につけ、高度化することが目標である。食育実践活動の中心的な役割を發揮し、栄養教育・栄養管理の観点から学校運営に参画するリーダーとして、子どもの実態を把握・分析する力、実態に基づいた食育実践を構築する力、学校における食育を適切に調整し評価する力をテーマとする。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（現職）」における理論と実践の架橋・往還・融合を図る学修を踏まえ、指導的立場の教員（栄養教諭）を育成する。そのために、連携協力校の食育実践活動・校務運営・研修等を支援することを通して、教員（栄養教諭）の役割や職務内容、職責を踏まえ、食育実践活動の中心的な役割を發揮し、栄養教育・栄養管理の観点から学校運営に参画するリーダーとしての子ども理解に基づいた臨床力（学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただ中に身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力）を培う。</p>	
自由科目	特別研究セミナーⅠ	<p>専門職学位課程において身につける研究力を更に向上させ、学校教育に関する高度な実践研究力と、実践成果を社会に広く還元できる力を養成するとともに、博士課程での研究継続も視野に入れた実践研究力の高度化を目指す。本セミナーⅠでは、専門職学位課程での研究を更に発展させた研究課題に関する構想を検討し、受講時点での研究内容についてプログラム中間発表会で発表する。研究指導はアドバイザー教員が担当し、博士課程D1セミナー、専門に関連する学会等にも参加する。成績は研究の進捗や学会参加状況等により評価する。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同
	特別研究セミナーⅡ	<p>高度な教育実践研究力及び実践成果を社会に広く還元できる力の養成と、博士課程での研究継続も視野に入れた実践研究力の高度化を目指し、本セミナーⅡではこれまでの研究成果をまとめ、論文化する力を養う。プログラム研究成果発表会での口頭発表及び研究成果論文集（無審査）への論文掲載を行う。その際、専門職学位課程の学修成果の研究内容との関連についても触れる。博士課程D2セミナー、専門に関連する学会等にも参加する。成績は、プログラム研究成果発表会での口頭発表及び論文内容により評価する。なお、本授業は受講者をグループに分けて実施する。</p>	共同